

2025年度 大学院国際文化研究科 講義概要（シラバス）



法政大学

科目一覧

〔発行日：2025/5/1〕 最新版のシラバスは、法政大学Webシラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

凡例 その他属性

〈他〉：他学部公開科目	〈グ〉：グローバル・オープン科目
〈優〉：成績優秀者の他学部科目履修制度対象科目	〈実〉：実務経験のある教員による授業科目
〈S〉：サティフィケートプログラム_SDGs	〈ア〉：サティフィケートプログラム_アーバンデザイン
〈ダ〉：サティフィケートプログラム_ダイバーシティ	〈未〉：サティフィケートプログラム_未来教室
〈カ〉：サティフィケートプログラム_カーボンニュートラル	

【X2001】 国際文化研究 A〔森村 修〕 春学期授業/Spring	1
【X2002】 国際文化研究 B〔釜土 詳二〕 秋学期授業/Fall	3
【X2003】 国際文化共同研究 A〔松本 悟〕 春学期授業/Spring	4
【X2004】 国際文化共同研究 B〔張 勝蘭〕 秋学期授業/Fall	6
【X2005】 多言語相関論 I A〔栗飯原 文子〕 春学期授業/Spring	7
【X2006】 多言語相関論 I B〔栗飯原 文子〕 秋学期授業/Fall	8
【X2007】 多言語相関論 II A〔大野 ロベルト〕 春学期授業/Spring	9
【X2008】 多言語相関論 II B〔大野 ロベルト〕 秋学期授業/Fall	10
【X2009】 多言語相関論 III A〔輿石 哲哉〕 春学期授業/Spring	11
【X2010】 多言語相関論 III B〔輿石 哲哉〕 秋学期授業/Fall	12
【X2011】 多言語相関論 IV A〔副島 健作〕 春学期授業/Spring	14
【X2012】 多文化相関論 I A〔LETIZIA GUARINI〕 春学期授業/Spring	15
【X2013】 多文化相関論 I B〔LETIZIA GUARINI〕 秋学期授業/Fall	16
【X2014】 多文化相関論 II A〔小川 敦〕 春学期授業/Spring	17
【X2015】 多文化相関論 II B〔小川 敦〕 秋学期授業/Fall	18
【X2016】 多文化相関論 III〔佐々木 一恵〕 春学期授業/Spring	19
【X2017】 多文化芸術論 I〔佐藤 千登勢〕 春学期授業/Spring	21
【X2018】 多文化芸術論 II〔廣松 勲〕 秋学期授業/Fall	23
【X2019】 異文化社会論 I A〔今泉 裕美子〕 春学期授業/Spring	24
【X2020】 異文化社会論 I B〔今泉 裕美子〕 秋学期授業/Fall	26
【X2021】 異文化社会論 II A〔浅川 希洋志〕 春学期授業/Spring	28
【X2022】 異文化社会論 II B〔浅川 希洋志〕 秋学期授業/Fall	29
【X2025】 マイノリティ社会論 A〔張 勝蘭〕 春学期授業/Spring	31
【X2026】 マイノリティ社会論 B〔張 勝蘭〕 秋学期授業/Fall	33
【X2027】 ジェンダー論〔佐々木 一恵〕 秋学期授業/Fall	35
【X2028】 多言語社会論 A〔大中 一彌〕 春学期授業/Spring	37
【X2029】 多言語社会論 B〔大中 一彌〕 秋学期授業/Fall	39
【X2032】 多民族共生論 II A〔高柳 俊男〕 春学期授業/Spring	41
【X2033】 多民族共生論 II B〔高柳 俊男〕 秋学期授業/Fall	42
【X2034】 国際ジャーナリズム論〔神林 毅彦〕 秋学期授業/Fall	43
【X2035】 国際文化交流論 II A〔木村 真〕 秋学期授業/Fall	44
【X2036】 比較宗教文明論〔白杵 陽〕 秋学期授業/Fall	45
【X2037】 多文化情報空間論 I A〔森村 修〕 春学期授業/Spring	47
【X2038】 多文化情報空間論 I B〔森村 修〕 秋学期授業/Fall	48
【X2039】 多文化情報メディア論 I A〔大嶋 良明〕 春学期授業/Spring	49
【X2040】 多文化情報メディア論 I B〔大嶋 良明〕 秋学期授業/Fall	50
【X2041】 多文化情報メディア論 II〔重定 如彦〕 秋学期授業/Fall	51
【X2042】 外国語実践研究 A〔英語〕〔MARK E FIELD〕 春学期授業/Spring	52
【X2044】 外国語実践研究 A〔ドイツ語〕〔小川 敦〕 春学期授業/Spring	53
【X2045】 外国語実践研究 A〔ロシア語〕〔佐藤 千登勢〕 春学期授業/Spring	54
【X2046】 外国語実践研究 B〔ロシア語〕〔佐藤 千登勢〕 秋学期授業/Fall	55
【X2047】 Thesis Writing A〔MAXIM WOOLLERTON〕 春学期授業/Spring	56
【X2048】 Thesis Writing B〔MAXIM WOOLLERTON〕 秋学期授業/Fall	58
【X2049】 Oral Presentation〔MARK E FIELD〕 春学期授業/Spring	60

[X2051]	国際人権論〔藤岡 美恵子〕春学期授業/Spring	61
[X2052]	多文化情報ネットワーク論A〔和泉 順子〕春学期授業/Spring	64
[X2053]	多文化情報ネットワーク論B〔和泉 順子〕秋学期授業/Fall	65
[X2054]	国際文化研究日本語論文演習A〔板井 美佐〕春学期授業/Spring	66
[X2055]	国際文化研究日本語論文演習B〔板井 美佐〕秋学期授業/Fall	68
[X2056]	国際文化研究日本語論文演習C〔板井 美佐〕春学期授業/Spring	70
[X2070]	修士論文演習A〔代表シラバス〕〔重定 如彦、大野 ロベルト〕春学期授業/Spring	72
[X2071]	修士論文演習B〔代表シラバス〕〔重定 如彦、大野 ロベルト〕秋学期授業/Fall	73
[X2072]	修士論文演習A〔浅川 希洋志〕春学期授業/Spring	74
[X2073]	修士論文演習B〔浅川 希洋志〕秋学期授業/Fall	75
[X2074]	修士論文演習A〔大嶋 良明〕春学期授業/Spring	76
[X2075]	修士論文演習B〔大嶋 良明〕秋学期授業/Fall	77
[X2076]	修士論文演習A〔松本 悟〕春学期授業/Spring	78
[X2077]	修士論文演習B〔松本 悟〕秋学期授業/Fall	79
[X2078]	修士論文演習A〔佐藤 千登勢〕春学期授業/Spring	80
[X2079]	修士論文演習B〔佐藤 千登勢〕秋学期授業/Fall	81
[X2080]	修士論文演習A〔LETIZIA GUARINI〕春学期授業/Spring	82
[X2081]	修士論文演習B〔LETIZIA GUARINI〕秋学期授業/Fall	83
[X2082]	修士論文演習A〔張 勝蘭〕春学期授業/Spring	84
[X2083]	修士論文演習B〔張 勝蘭〕秋学期授業/Fall	85
[X2084]	修士論文演習A〔佐々木 一恵〕春学期授業/Spring	86
[X2101]	博士論文演習ⅠA〔代表シラバス〕〔重定 如彦、大野 ロベルト〕春学期授業/Spring	87
[X2117]	博士論文演習ⅠA〔大野 ロベルト〕春学期授業/Spring	88
[X2102]	博士論文演習ⅠB〔代表シラバス〕〔重定 如彦、大野 ロベルト〕秋学期授業/Fall	89
[X2118]	博士論文演習ⅠB〔大野 ロベルト〕秋学期授業/Fall	90
[X2103]	博士論文演習ⅡA〔代表シラバス〕〔重定 如彦、大野 ロベルト〕春学期授業/Spring	91
[X2104]	博士論文演習ⅡB〔代表シラバス〕〔重定 如彦、大野 ロベルト〕秋学期授業/Fall	92
[X2105]	博士論文演習ⅢA〔代表シラバス〕〔重定 如彦、大野 ロベルト〕春学期授業/Spring	93
[X2106]	博士論文演習ⅢB〔代表シラバス〕〔重定 如彦、大野 ロベルト〕秋学期授業/Fall	94
[X2107]	博士論文演習ⅡA〔佐藤 千登勢〕春学期授業/Spring	95
[X2108]	博士論文演習ⅡB〔佐藤 千登勢〕秋学期授業/Fall	96
[X2109]	博士論文演習ⅡA〔浅川 希洋志〕春学期授業/Spring	97
[X2110]	博士論文演習ⅡB〔浅川 希洋志〕秋学期授業/Fall	98
[X2111]	博士論文演習ⅢA〔高柳 俊男〕春学期授業/Spring	99
[X2112]	博士論文演習ⅢB〔高柳 俊男〕秋学期授業/Fall	100
[X2113]	博士論文演習ⅢA〔森村 修〕春学期授業/Spring	101
[X2114]	博士論文演習ⅢB〔森村 修〕秋学期授業/Fall	102
[X2115]	博士論文演習ⅢA〔佐藤 千登勢〕春学期授業/Spring	103
[X2116]	博士論文演習ⅢB〔佐藤 千登勢〕秋学期授業/Fall	104
[X2131]	博士ワークショップⅠA〔重定 如彦、小川 敦〕春学期授業/Spring	105
[X2132]	博士ワークショップⅠB〔重定 如彦、小川 敦〕秋学期授業/Fall	106
[X2133]	博士ワークショップⅡA〔重定 如彦、小川 敦〕春学期授業/Spring	107
[X2134]	博士ワークショップⅡB〔重定 如彦、小川 敦〕秋学期授業/Fall	108
[X2135]	博士ワークショップⅢA〔重定 如彦、小川 敦〕春学期授業/Spring	109
[X2136]	博士ワークショップⅢB〔重定 如彦、小川 敦〕秋学期授業/Fall	110
[X2150]	修士論文〔国際文化専攻教員〕年間授業/Yearly	111
[X2180]	リサーチ・ペーパー〔国際文化専攻教員〕年間授業/Yearly	112
[X2190]	博士論文〔国際文化専攻教員〕年間授業/Yearly	113

OTR500G1 - 001 (その他 / Others 500)

国際文化研究A

森村 修

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この科目「国際文化研究A」は、新入生（修士課程1年生）が大学院生として必要とする文献調査および講読、講義ノートの作成や整理に必要な技術を身につけることに主眼を置く。

【到達目標】

- (1) 研究上必要な書誌情報にアクセスする方法を理解している。
- (2) 本研究科における研究の学際性について、本研究科に在籍する修士1年生にふさわしい認識を有している。
- (3) みずからの関心を研究成果につなげていくための方法論について、本研究科に在籍する修士1年生にふさわしい認識を有している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- (1) 第1回～第4回：大学院生として研究をおこなう上での基礎知識や、本研究科を取り巻く環境に慣れるための授業をおこなう。
- (2) 第5回～第13回：毎回異なるスピーカー（本研究科の専任教員）が、修士1年生向けに講義をおこなう。
- (3) 第14回：全体のまとめをおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	自己紹介・関心紹介、授業計画について説明を行う。
第2回	リサーチデザイン(第1回)	・大学院における学習・研究について解説する。 ・受講学生たちのこれまでの研究状況を確認する。
第3回	リサーチデザイン(第2回)	・引き続き、大学院における学習・研究について解説する。 ・研究計画作成の重要性について意識を高める。
第4回	図書館ガイダンス	図書館員による図書館ガイダンスを利用しつつ、法政大学図書館を介した文献調査のイロハを学ぶ。
第5回	オムニバス形式の講義（第1回）	松本悟先生（開発研究、メコン地域研究、環境社会配慮、NGO論）が講義を行う。
第6回	オムニバス形式の講義（第2回）	浅川希洋志先生（ポジティブ心理学、文化心理学）が講義を行う。
第7回	オムニバス形式の講義（第3回）	大野ロベルト先生（日本文学、文学理論に関する研究）が講義を行う。
第8回	オムニバス形式の講義（第4回）	張勝蘭先生（地域研究（中国南部の少数民族地域）、文化人類学、歴史学）が講義を行う。
第9回	オムニバス形式の講義（第5回）	小川敦先生（多言語社会研究、社会言語学、言語政策）が講義を行う。
第10回	オムニバス形式の講義（第6回）	石森大知先生（文化人類学、オセアニア地域研究）が講義を行う。

第11回	オムニバス形式の講義（第7回）	高柳俊男先生（朝鮮近現代史、在日朝鮮人史、日韓・日朝交流史。法政学、伊那谷研究）が講義を行う。
第12回	オムニバス形式の講義（第8回）	栗飯原文子先生（アフリカ文学）が講義を行う。
第13回	オムニバス形式の講義（第9回）	輿石哲哉先生（言語学、英語学、対照言語学）が講義を行う。
第14回	総括	これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

別途指示する。

【参考書】

別途指示する。

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、下記の①+②の提出物などを総合的に判断して行う。
①「リサーチデザイン」+②9つのオムニバス形式の講義ごとに「ミニ課題」にて採点：10%×10

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションをファシリテートする際に受講生をグループで分けて論点を示す必要があります。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出などは、主にLMS（HoppiiやGoogle Classroom）を通じて行う。ただし、社会人学生などで、日中の授業に参加することが継続的に難しいM1生がいる場合、Zoomで授業を録画し、当該のM1生と共有する。当該のM1生（社会人学生）の発表担当についても、動画やLMSを介した双方向のやりとりを行う。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【担当教員の専門分野等】

森村 修

<専門領域>

現代哲学（フッサール現象学・フランス現代思想）・現代倫理学（ケアの倫理学）・近代日本哲学・芸術哲学

<研究テーマ>

1. フッサール現象学を主として、その影響下にある数理哲学者オースカー・ベッカー哲学（存在論・美学）を研究している。
2. フーコー、ドゥルーズ、デリダを中心としたフランス構造主義以後のフランス哲学。最近では、カトリヌ・マラブーの哲学（社会的トラウマの問題）を研究している。
3. 京都学派（特に、西田幾多郎・田辺元・九鬼周造・和辻哲郎）の哲学研究

4. 美学理論・芸術哲学

5. 〈ケア〉の形而上学の構築と展開

<主要研究業績>

1. 『ケアの倫理』大修館書店、2000年
2. 『ケアの形而上学』大修館書店、2020年
3. オースカー・ベッカーの「パラ存在論」法政大学国際文化学部『異文化』24、2024年

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course introduces the foundations of the Graduate School of Intercultural Communication according to three domains of interdisciplinary research: multicultural interrelations, multiethnic coexistence, and multicultural informatics.

(Learning Objectives)

- (1) To understand how to access bibliographic information necessary for research.
- (2) To understand the interdisciplinary nature of research at the Graduate School of Intercultural Communication.
- (3) To understand the methodologies used at this Graduate School to translate one's interests into research results.

(Learning activities outside of the classroom)

Students are expected to read the reference material and prepare for each class meeting (one to three hours for each session).

(Grading Criteria /Policy)

Assignments for each topic: 100%(10%x10 topics)

OTR500G1 - 002 (その他 / Others 500)

国際文化研究 B

釜土 詳二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この科目「国際文化研究B」では、参加者の研究に寄与するような、発表・ディスカッションの実践を積み重ねていく。

【到達目標】

- (1) 研究発表に必要な資料を、大学院生にふさわしく、適切な仕方で作成することができる。
- (2) 研究テーマが異なる他の参加者に対して、みずからの研究の意義を適切なしかたで説明することができる。
- (3) アカデミックな表現や国際文化研究における基本的な概念を使って、学際的な場におけるディスカッションに参加することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- (1) 第1回：全体のイントロダクションを行う。
- (2) 第2回～第13回：「国際文化情報学会」などにおける研究発表を念頭に、授業参加者が口頭発表や資料作成の進捗報告を行う。ただし、履修者数により、口頭発表の方法や課題提出のあり方を変える。
- (3) 第14回：全体のまとめと授業内容の補足を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	自分の研究テーマを中心とした自己紹介、本授業の進め方とスケジュール決定。
第2回	学生による発表(1)	発表者1、2による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第3回	学生による発表(2)	発表者3、4による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第4回	学生による発表(3)	発表者5、6による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第5回	学生による発表(4)	発表者7、8による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第6回	学生による発表(5)	発表者9、10による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第7回	学生による発表(6)	発表者11、12による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第8回	学生による発表(7)	発表者1、2による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第9回	学生による発表(8)	発表者3、4による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。

第10回	学生による発表(9)	発表者5、6による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第11回	学生による発表(10)	発表者7、8による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第12回	学生による発表(11)	発表者9、10による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第13回	学生による発表(12)	発表者11、12による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第14回	総括	これまでの議論を踏まえて、授業を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

別途指示する。

【参考書】

別途指示する。

【成績評価の方法と基準】

自分の発表時の内容40%、討論での貢献度30%、平常点30%を目安に、総合的に評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

- ・活発な議論の場を築けるよう心掛けます。
- ・発表後のグループディスカッションや質疑応答を大切にします。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出などは、主にLMS（HoppiiやGoogle Classroom）を通じて行う。ただし、社会人学生などで、日中の授業に参加することが継続的に難しいM1生がいる場合、Zoomで授業を録画し、当該のM1生と共有する。当該のM1生（社会人学生）の発表担当についても、動画やLMSを介した双方向のやりとりを行う。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

倫理学、宗教哲学、哲学的人間学

<研究テーマ>

承認論などの人間存在をめぐる倫理的問題の研究。例えば、西田幾多郎の宗教哲学等を参照しつつ、人間存在の基底から、「人間の尊厳」「他者に対する責任や義務」「自己と他者の承認関係」等について考察する。

<主要研究業績>

【単著】釜土詳二『愛と承認をめぐる闘争—チャールズ・テイラーと西田幾多郎の宗教哲学』株式会社インプレス、2020年

【論文】釜土詳二「愛と承認をめぐる闘争—承認論の原型をめぐって—」、『法政大学大学院紀要』第81号、2018年

【論文】釜土詳二「自己と善——チャールズ・テイラーと西田幾多郎」、比較思想学会編『比較思想研究』第43号、2017年

【論文】釜土詳二「バーリンとテイラーにおける「自由」概念の差異：多元性を擁護する「自由」にかんする比較思想的考察」、法政大学国際文化学部編『異文化 論文編』第17号、2016年

【Outline (in English)】

This course is a continuation from the spring semester and is mandatory for all first-year graduate students. It offers opportunities for practicing presentations and engaging in discussions to enhance students' studies.

Students are expected to dedicate a total of 4 hours to reviewing and preparing for each class meeting.

The grading criteria are as follows: 40%for presentations, 30%for contribution, and 30%for participation. Students who successfully achieve 60%or more of the course goals will earn a passing grade.

OTR600G1 - 003 (その他 / Others 600)

国際文化共同研究A

松本 悟

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本研究科では、「多文化相関」、「多文化共生」、「多文化情報空間」の三領域が今日的な研究課題のスコープの中で深く関連することを学んでいきますが、本科目は、テーマ設定・リサーチ等を共有しながら、それが自らの研究で達成できているか確認していくことを目的とします。受講者は、自らの研究発表を蓄積し、それを共有・公開することにより、問題意識や研究成果を外に発信して共有していく研究スタイルを身につけていきます。その上で、上記の研究スタイルを身につけることを通じて、各自の研究の中に、本研究科の特色である「学際的志向の強みを編み込んでいく」ことを目指します。

【到達目標】

上記のテーマを念頭におきながら、受講者各自が修士論文を完成させることが第一の到達目標です。

その中で、特に、既存の学問の枠組みから飛び出して学際的なアプローチをしていくこと、「今、ここ、自分」といった切実な問題として、研究対象を捉えていくことを目指します。

また、「部屋にこもって、一人でしつとりと学級を極める」タイプの研究から踏み出し、自ら外に発信しつつ、他者の研究テーマについても一緒に考えていく中で、発信すること、研究と一緒にやっていくことの意義を実感していくことも、到達目標として掲げます。「共同研究」と敢えて謳っているのは、そういう意味があるのです。

さらに、プレゼンテーション（プレゼン、発表）には**delivery**（表出の仕方）のテクニクがありますし、論文には引用、注の付け方などの規則がありますが、そういうことについても再度確認しながら身につけていくことも、目標の一つです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

大学と研究科の授業実施方針に則して授業を行います。基本的に教室での対面授業としますが、必要に応じてオンラインでの受講を可とするように処置します。本授業の基本的な授業計画はシラバスに沿って進めますが、変更がある場合には、「学習支援システム」で提示いたします。本授業の開始日までに具体的な授業方法などを同システムで提示します。

発表者（プレゼンター）は自分のプレゼンに関するレジュメ等を作成し、プレゼンを行い、出席者皆で討論していきます。プレゼンター以外の受講生は、疑問点・意見等を準備した上で、討論に参加します。

修士論文構想発表会を大きな節目と捉え、それに向けて進捗状況や、研究上の悩み・問題点などを受講者・教員間で共有していきます。

上記の節目を意識しながら、受講者の「書く行為による成果物」（例えば、報告書・論文など）についても、その内容、論の提示の仕方、形式などについて、随時指導していきます。

受講者の質問等には、授業時、あるいは授業後に「学習支援システム」あるいは個人メール等を用いてフィードバックを行います。そのようなかたちで、毎回の授業の成果の共有・蓄積を図ります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	・授業の進め方について周知する。 ・発表のスケジュールを立てる。 ・受講者の研究の進捗状況について報告してもらう。
第2回	論文の書き方について	・事前課題に基づいて論文を書くことの意味と書き方について自らの研究テーマを踏まえて確認する。
第3回	データベース・ガイダンス	図書館のデータベースへの理解を深め、自らの研究に必要な使い方を習得する。
第4回	院生による授業1	学生が自らの研究テーマに関して事前課題を出し、発表し、グループ討議をファシリテートする授業を行う。
第5回	院生による授業2	学生が自らの研究テーマに関して事前課題を出し、発表し、グループ討議をファシリテートする授業を行う。
第6回	院生による授業3	学生が自らの研究テーマに関して事前課題を出し、発表し、グループ討議をファシリテートする授業を行う。
第7回	院生による授業4	学生が自らの研究テーマに関して事前課題を出し、発表し、グループ討議をファシリテートする授業を行う。

第8回	院生の研究進捗発表1	構想発表会に向けて、各自が自らの研究の進捗を発表し、お互いにコメントをし合う。
第9回	院生の研究進捗発表2	構想発表会に向けて、各自が自らの研究の進捗を発表し、お互いにコメントをし合う。
第10回	院生の研究進捗発表3	構想発表会に向けて、各自が自らの研究の進捗を発表し、お互いにコメントをし合う。
第11回	院生の研究進捗発表4	構想発表会に向けて、各自が自らの研究の進捗を発表し、お互いにコメントをし合う。
第12回	構想発表会の振り返り	構想発表会での発表や質疑応答を通して考えたことや疑問点を共有する。
第13回	担当教員の論文を題材にした授業	これまでの授業を踏まえながら、担当教員が書いた論文をもとに、修士論文作成に向けた課題を議論する。
第14回	総括	KJ法 を使ってこの授業の学びを振り返り、夏休みや秋学期の計画に繋げる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・発表者は、各自レジュメ、プレゼン・スライド等を作成し、自らの発表を用意する。
・発表回のみならず、常に修士論文の執筆を念頭に置き、意味をかみしめながら、「書くという行為」を積極的に行う。
・発表者以外の受講者は、発表者の内容を可能な限り授業で検討できるよう、発表の内容に関する事柄を調べておく。さらに、発表者に対する質問・コメント等を用意しておく。
・修士論文のよりよい完成を目指すために、本授業を積極的に活用する。
・授業後に、指摘された点を見直したり、関連文献等を積極的に読んだりすることで、自分の視点を広げていく。
・本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

随時指定しますが、取りあえずは、以下のものを用意してください。
・斉藤孝・西岡達裕 (2005).『学術論文の技法』[新訂版]. 東京：日本エディタースクール出版部。（論文の基本的な形式等については、この本を中心に解説します。）
・刈谷武彦 (2002).『知的複眼思考法 誰でも持っている想像力のスイッチ』. 東京：講談社。（通読することで、読む・書くという行為の意味を再確認させてくれます。）

【参考書】

授業において適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

発表70％、討論への参加度・貢献度30％。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

発言しやすい場を作ることに留意します。

【学生が準備すべき機器他】

辞書・パソコンなど。

【その他の重要事項】

1) 受講者数により、発表の回数が増減することがあります。
2) 修士課程2年目の春学期の科目であることを、特に意識して運営していきます。従って、修士論文の基本方針等を固めていくことを念頭に置き進めていきます。
3) 発信していくことは、それだけでも意味があることです。それを意識し、同時に自分と異なった意見を受け入れていく姿勢を身につけます。
4) 問題と同次元で「ベタに」（あるいは「ガチに」といってもいいかも）問題に取り組むだけでなく、より高い次元で、自分の研究の意味に括弧を付けてその意味を問いかけていく、「メタな」取り組みを取り入れる必要があります。是非、ある時点で立ち止まって考えてみてください。
5) 「論文を書く」というのは、自分の研究してきたことに自分自身で「区切りをつける」仕事でもあります。そのことを意識し、必要な文献等をしっかり読み込み、執筆に向けての準備をしてください。

【担当教員の専門分野等】

松本 悟

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際機構論、国際協力学

<主要研究業績>『国際協力と想像力』（共編著、日本評論社、2021年）、『調査と権力』（単著、東京大学出版会、2014年）、『NGO から見た世界銀行』（共編著、ミネルヴァ書房、2013年）、『映画で学ぶ国際関係II』（分担執筆、法律文化社、2013年）、『人々の資源論』（分担執筆、明石書店、2008年）、『シリーズ国際開発 生活と開発』（分担執筆、日本評論社、2005年）

【カリキュラム上の位置づけ】

修士論文を完成される年度の前半に配当され、「国際文化研究A、B」の延長線上で、かつ秋学期の「国際文化共同研究B」の直前の科目です。この科目は修士1年目での研究の上に、いよいよ修士論文執筆を視野に入れる点で、極めて重要な意味を持ちます。

【Outline (in English)】

【Course outline】

With respect to our Graduate School, it is of fundamental importance to study how the three fields —'Intercultural Correlation Studies', 'Multiculturalism Studies', and 'Multicultural Information Space Studies' — are intertwined with each other in the scope of today's research enquiries. The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.

By the end of course, you should be able to acquire a research style, wherein you disseminate your own problem awareness and research results by accumulating, sharing and publicising your own research results.

Besides that, through this acquisition process, you are expected to go up to the stage where you can make this 'strong point of our graduate school interwoven' with your own research.

[Learning Objectives]

The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.

[Learning activities outside of classroom]

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

[Grading Criteria /Policy]

Final grade will be calculated according to presentation(70%) and contribution in each class meeting(30%).

OTR600G1 - 004 (その他 / Others 600)

国際文化共同研究 B

張 勝蘭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、修士論文あるいはリサーチペーパーの完成に向けて、受講する2年次の院生と教員で切磋琢磨する授業で、1年次の「国際文化研究A」「国際文化研究B」、2年次春学期の「国際文化共同研究A」の延長線上にある。

「共同研究」というと、通常は共通テーマのもと、複数人が分担しながらともに研究することを意味するが、この場合の「共同」には、修士論文作成という共通の課題に向けて、それぞれ知恵を出し合い、協力し合う意味が込められている。

研究科の3領域、すなわち「異文化相関関係」「多文化共生」「多文化情報空間」に目配りしつつ、自分の研究の位置づけや方法論などを他者のそれと比較し、再検証することを通して、より完成度の高い論文を目指す。

とりわけ、本研究科の特色である学際的思考を組み込んでいく。

【到達目標】

上記の「授業の概要と目的」を念頭に置き、受講者各自がそれに見合った修士論文を完成させることを、本科目の最大の到達目標とする。

一定の構成・分量と主張をもつ論文の執筆は、誰にとってもたやすいことではない。一人で悩んだり、壁にぶつかって立ち往生することなく、同様の課題に直面している他の受講生からアドバイスをもらい、この道の先輩である教員の体験を聴くことで、困難な作業を順調に進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文の進捗状況に関する受講者の発表を中心に進めていく。発表者はレジュメもしくはパワーポイントを作成して発表を行い、他の出席者からの疑問・意見・助言等をまじえ、全員で討論していく。

修士論文中間発表会、修士論文の提出を二つの大きな節目と捉え、それに向けての進捗状況や研究上の悩み・問題点を受講者・教員間で共有していく。

社会情勢や受講生の状況により、オンライン授業に変更する場合もある。授業方法や進め方の変更については、学習支援システムの「お知らせ」により適宜連絡する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	自分の研究テーマを中心とした自己紹介、本授業の進め方とスケジュール決定。
2	修士論文中間発表(1)	発表者1、2、3による1回目の発表。 7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変わられたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
3	修士論文中間発表(2)	発表者4、5、6による1回目の発表。 7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変わられたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
4	修士論文中間発表(3)	発表者7、8、9による1回目の発表。 7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変わられたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
5	修士論文中間発表(4)	発表者10、11、12による1回目の発表。 7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何が変わられたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
6	修士論文中間発表(5)	発表者13による1回目の発表および発表者1による2回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
7	修士論文中間発表(6)	発表者2、3による2回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
8	修士論文中間発表(7)	発表者4、5による2回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。

9	修士論文中間発表(8)	発表者6、7による2回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
10	修士論文中間発表(9)	発表者8、9による2回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
11	修士論文中間発表(10)	発表者10、11による2回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
12	修士論文中間発表(11)	発表者12、13による2回目の発表。 研究の過程で直面している問題や課題を明確にしながら、進捗状況を報告する。
13	論文提出前ディスカッション	修士論文提出を間近に控え、各自が直面している問題や課題について議論し、その解決策等を検討する。
14	まとめ	提出した修士論文を振り返り、反省会を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- (1) 自分の発表時に出された質問・批判・助言などを参考にし、常に自分の論文の質を高めるよう努めること。
 (2) 他者の発表時に得られたヒントや着想を、常に自らの論文に活かし、質の向上をはかること。
 (3) 自分の研究テーマを常に頭の片隅におき、アイデアを遊ばせながら日常生活を送ること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

自分の発表時の内容40%、他者の発表時の貢献度30%、平常点30%を目安に、総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

受講生が論文執筆について疑問や不安に感じていることを、できるだけ授業内で共有し、適切なアドバイスを得られるようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パワーポイントなどを使って報告する場合は、パソコンを持参し、対面授業の場合は教室でプロジェクターの準備をしておくこと。
 学習支援システムの「掲示板」「お知らせ」などを滞りなく確認・利用できる環境を準備すること。

【その他の重要事項】

・この授業は対面授業であるが、適宜ハイブリッド・オンラインも併用する予定。また受講生の人数によって、授業計画が変更される場合もある。

【Outline (in English)】

The seminar is designed to enhance participants' knowledge and methodologies in three key areas of study - intercultural correlation studies, multiculturalism studies, and multicultural information space studies.

At the end of the course, participants are expected to improve their interdisciplinary thinking and to write up the Master's thesis/the Research paper.

【Learning Objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper by providing feedback and support from other students, seniors and instructors. Students may update on their progress and discuss tasks they accomplish for the thesis. Based on 【Outline】 of the seminar, students are expected to prepare for interim presentation and to complete the thesis.

【Learning activities outside of classroom】

- (1) Students should develop the Master's thesis/the Research paper based on questions, comments and advice given in the class.
 (2) Students should develop the Master's thesis/the Research paper by discussing and reviewing other students' work.
 (3) Students are expected to refine their research subject.

The standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

Presentation (40%) , Contribution(30%), Participation (30%)

Students are required to take more than 60%score in total to pass.

LIN500G1 - 101 (言語学 / Linguistics 500)

多言語相関論 I A

栗飯原 文子

サブタイトル：アフリカ文学概論 I

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代アフリカ文学のさまざまな作品に触れ、歴史的・社会的文脈をふまえてつづ、主題、手法、表現を学ぶ。いくつかのトピックに分けて、作家と作品へのアプローチをおこない、アフリカ文学の主要なテーマを学び、その全体像と魅力をとらえる。またテキストにあわせて研究論文や批評の抜粋を読み、分析の手がかりにする。

【到達目標】

- ・アフリカ文学についての基礎的な知識を身につける。
- ・アフリカ（出身）の作家が書いた短篇・中篇小説（日本語訳）を歴史的・社会的文脈と関連づけて読み解く力を養う。
- ・文学テキストを精読し、研究論文をあわせて読むことで、分析・批評の方法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・基本的には講義とディスカッションを組み合わせて進めていく。
- ・アフリカ文学を理解するために必要な知識や背景は講義形式で解説。作品の歴史・社会的文脈についても、そのつど説明する。映像作品を用いることもある。
- ・毎週または隔週で、日本語訳のある小説を配布するので、事前にしっかりと読んでくること。
- ・受講者全員が文献を精読し、積極的にディスカッションに参加すること。
- ＊「授業計画」の内容はあくまで予定であり、受講者の理解や関心にもとづいて適宜変更する可能性がある。
- ＊春学期と秋学期の授業を連続して受講することが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション～文学をどう読むか～	(1) 授業の進め方、予習の方法について説明。 (2) テキストを読んで分析する方法を学ぶ。
第2回	アフリカ文学小史	アフリカ文学のこれまでの歩みを概観する。
第3回	歴史① 歴史へのアプローチ	アフリカ文学ではどのように歴史が扱われてきたか。初期から現在までを振り返る。
第4回	歴史② 女性の視点から描き直す歴史	(女性) 作家たちが女性の経験を歴史に位置付け直す試みについて学ぶ。
第5回	移動① 大陸から外への移動	アフリカから外に出ていく人びとの経験がいかに描かれているか。複数の作品を通じて理解する。
第6回	移動② 大陸内部の移動	農村部から都市部へ、出生地から別の地域への移動など、大陸内部の人びとの往来の描写について学ぶ。
第7回	言語① 何語で書くかという問い	アフリカの作家たちは作品を執筆する言語についてどのように考えているか。代表的な見解と現在の試みを紹介する。
第8回	言語② アフリカ諸語の表現	アフリカ諸語の表現や語彙が英語やフランス語のテキストにいかに関用いられているかを考える。
第9回	戦争① ヨーロッパの戦争に巻き込まれること	アフリカの人びとは第一次・第二次世界大戦にさまざまな形で駆り出された。その歴史と経験を扱った作品を見ていく。
第10回	戦争② 植民地解放闘争の経験	独立を賭けた武装闘争、植民地支配を脱するための闘いを描いた作品について学ぶ。
第11回	ジェンダー① フェミニズム文学の先駆者たち	1970年代・80年代初期の「フェミニズム文学」作品について背景と主題を理解する。
第12回	ジェンダー② 現在進行形のアプローチ	現在活躍している作家たちがジェンダーにどのようにアプローチしているかを探る。
第13回	文学と映像① 文学作品の映画化	アフリカ映画の歴史を概観し、小説をもとにした映像作品について学ぶ。

第14回 文学と映像② 映画鑑賞
春学期のまとめ (1) 前週に学んだことをもとに、実際の映像作品を観て、ディスカッションをおこなう。
(2) 春学期で学んだことを振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・次週のための準備・予習は必ずおこなうこと。
- ・授業で扱うテキスト以外にも、その他の参考文献を積極的に読むことが望ましい。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

毎回コピーかデータで配布する。

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表（60％）、授業への貢献（40％）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

- ・さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
- ・今年度から授業の進め方と内容を大幅に変えることになるが、引き続き受講生の自主的な学習、積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】

アフリカ文学、アフリカ地域研究

<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html>

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course will introduce students to a wide range of literary texts from Africa and the African diaspora. The goal is for students to acquire a general understanding of some of the most important issues in African literature. The course will also serve as an introduction to literary studies, and thus will focus on reading and writing skills, as well as basic techniques of literary analysis.

[Learning objectives]

Students will be expected to develop skills of critical reading of literary texts with attention to their historical and social contexts.

[Learning activities outside of classroom]

Before each session, students will be expected to have read the assigned materials. The required study time is at least four hours for each class session.

[Grading policy]

Final grade will be decided based on the following: presentation 60% and in-class contribution 40%.

LIN500G1 - 102 (言語学 / Linguistics 500)

多言語相関論 I B

栗飯原 文子

サブタイトル：アフリカ文学概論 II

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代アフリカ文学のさまざまな作品に触れ、歴史的・社会的文脈をふまえてつづ、主題、手法、表現を学ぶ。いくつかのトピックに分けて、作家と作品へのアプローチをおこない、アフリカ文学の主要なテーマを学び、その全体像と魅力をとらえる。またテキストにあわせて研究論文や批評の抜粋を読み、分析の手がかりにする。

【到達目標】

- ・アフリカ文学についての基礎的な知識を身につける。
- ・アフリカ（出身）の作家が書いた短篇・中篇小説（日本語訳）を歴史的・社会的文脈と関連づけて読み解く力を養う。
- ・文学テキストを精読し、研究論文をあわせて読むことで、分析・批評の方法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・基本的には講義とディスカッションを組み合わせて進めていく。
- ・アフリカ文学を理解するために必要な知識や背景は講義形式で解説。作品の歴史・社会的文脈についても、そのつど説明する。映像作品を用いることもある。
- ・毎週または隔週で、日本語訳のある小説を配布するので、事前にしっかりと読んでくること。
- ・受講者全員が文献を精読し、積極的にディスカッションに参加すること。
- ＊「授業計画」の内容はあくまで予定であり、受講者の理解や関心にもとづいて適宜変更する可能性がある。
- ＊春学期と秋学期の授業を連続して受講することが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション～アフリカ文学を読むために～	(1) 授業の進め方、予習の方法について説明。 (2) アフリカ文学を読むために必要な前提知識を学ぶ。
第2回	歴史① 歴史への応答	植民地支配以前から現代に至るまでの歴史への取り組み方について、いくつかの例をもとに考察する。
第3回	歴史② イスラームの歴史を描くこと	大陸のイスラームの歴史・文化を扱ったテキストを通じて、その特徴や背景を理解する。
第4回	移動① 21世紀の新しい移動	移動の目的地や理由はますます多様化している。21世紀の文学で「新しい移動」がどのように描かれているかを学ぶ。
第5回	移動② 出立と帰還	移動を主題とした初期から現在の作品までを比較し、旅立ちと帰郷の描き方の変遷について考える。
第6回	多様な語り手	人間以外の語り手と視点が用いられた作品を読み、その役割と意味を把握する。
第7回	戦争① ルワンダの経験	1994年のルワンダ虐殺とその前後の歴史を扱った複数の作品を比較・考察する。
第8回	戦争② 内戦と子ども兵	多数の文学作品や映像作品において、子ども兵の存在が描かれてきた。代表的な例を紹介する。
第9回	クィア① LGBTQ+の登場人物	近年の「クィア文学」隆盛の背景を概観してから、1970年代まで遡り、「クィア」な登場人物を考察する。
第10回	クィア② トランスジェンダーの表象	トランスジェンダーを扱った作品を取り上げて、どのような試みがなされているかを学ぶ。
第11回	アフリカン・ノワール	都市を舞台にしたミステリーや犯罪小説について。都市と人間関係の描き方を考える。
第12回	スペキュラティブ・フィクション① 「ファンタスティック」の系譜	2010年代以降のSFの流行について理解したうえで、神話やファンタジー、不可思議な現象を扱った作品の系譜を見ていく。

第13回	スペキュラティブ・フィクション② 2020年代のSF作品	近年発表された代表的なSF作品をいくつか取り上げて、その傾向をつかむ。
第14回	秋学期のまとめ	秋学期で学んだことを振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・次週のための準備・予習は必ずおこなうこと。
- ・授業で扱うテキスト以外にも、その他の参考文献を積極的に読むことが望ましい。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

毎回コピーかデータで配布する

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表（60％）、授業への貢献（40％）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

- ・さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
- ・今年度から授業の進め方と内容を大幅に変えることになるが、引き続き受講生の自主的な学習、積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】

アフリカ文学、アフリカ地域研究

<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html>

【Outline (in English)】

[Course outline]

This course will introduce students to a wide range of literary texts from Africa and the African diaspora. The goal is for students to acquire a general understanding of some of the most important issues in African literature. The course will also serve as an introduction to literary studies, and thus will focus on reading and writing skills, as well as basic techniques of literary analysis.

[Learning objectives]

Students will be expected to develop skills of critical reading of literary texts with attention to their historical and social contexts.

[Learning activities outside of classroom]

Before each session, students will be expected to have read the assigned materials. The required study time is at least four hours for each class session.

[Grading policy] Final grade will be decided based on the following: presentation 60% and in-class contribution 40%.

LIN500G1 - 103 (言語学 / Linguistics 500)

多言語相関論Ⅱ A

大野 ロベルト

サブタイトル：パロディと文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

パロディという概念を軸に、主に20世紀の文学理論を逍遙したうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析や比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】

文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテキストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはありません。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内に随時行う。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編 1	ソシュールをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編 2	レヴィ＝ストロースをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編 3	バルトをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編 4	ジュネットをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編 5	デリダをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編 1	小説とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編 2	映画とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編 3	舞台とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編 4	音楽とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編 5	サブカルチャーとパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマとなるテキストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】

リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】

発表と議論への貢献 50 %、レポート 50 %

成績評価は100点満点とし、60点以上が合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学

<研究テーマ>

古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究

<主要研究業績>

『吉田健一に就て』（共著）国書刊行会、2023

『Butoh 入門』（共編）文学通信、2021

『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019

【Outline (in English)】

This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages.

While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each participant. Students are encouraged to provide topics they can honestly relate to, including various genres of so-called subculture.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.

The grading criteria is as follows: 50%presentation and participation in discussions, 50%final paper. Students that successfully achieve 60%or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIN500G1 - 104 (言語学 / Linguistics 500)

多言語相関論Ⅱ B

大野 ロベルト

サブタイトル：パロディと文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

パロディという概念を軸に、主に20世紀の文学理論を逍遥したうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析や比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】

文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテキストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはあり得ない。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内に随時行う。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編1	エーコをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編2	バフチンを取りあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編3	バンヴェニストを取りあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編4	サイードを取りあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編5	フーコーを取りあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編1	政治とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編2	教育とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編3	経済とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編4	司法とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編5	科学とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマとなるテキストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】

リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】

発表と議論への貢献50%、レポート50%
成績評価は100点満点とし、60点以上が合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学

<研究テーマ>

古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究

<主要研究業績>

『吉田健一に就て』（共著）国書刊行会、2023

『Butoh入門』（共編）文学通信、2021

『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019

【Outline (in English)】

This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages.

While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each participant. Students are encouraged to provide topics they can honestly relate to, including various genres of so-called subculture.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.

The grading criteria is as follows: 50%presentation and participation in discussions, 50%final paper. Students that successfully achieve 60%or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

多言語相関論Ⅲ A

興石 哲哉

サブタイトル：言語の研究方法を学ぶ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが、言語の研究法についてはテクニカルなところがあり、なかなか理解が難しいのが現実です。本授業では、それを克服すべく、基本的な文献を読みながら言語研究の基本である音声研究を学んでいきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に対面での開講となります。各回の授業計画は変更はありませんが、もし変更がある場合には、「学習支援システム」で提示します。
授業は演習形式で行います。授業では学生にどんどん意味を問いかけていき、教材を日本語に訳していただき説明を加えます。この際、重要なのは、
1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
2) 分からない場合、積極的に質問したり、意見を申し出ること、
の2点です。
課題や授業内容については、「学習支援システム」を用いて、基本的に事後に詳細なコメントを担当者が出しますので、それをさらなる研究等に活かしてください。
最終授業だけでなく、中途でも、折を見て、フィードバックの時間を設けますので、内容についての質問等には随時対処していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Introduction	本科目の概略、学習の仕方等についての説明。その上で、教材を読み始める。
2	Organs of Speech	発話に用いられるところの器官について学ぶ。
3	Speech Sounds, Classification of Vowels	言語音、母音の分類について学ぶ。
4	Classification of Vowels	母音の分類について学び、様々な言語の母音を概観する。
5	Further Classification of Vowels	母音の分類についてさらに見る。
6	Classification of Consonants	子音の分類について学ぶ。
7	Classification of Consonants	子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。
8	Classification of Consonants	子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。
9	Classification of Consonants, Further Analysis of Consonants	子音の発音について見た後、副次的調音について学ぶ。
10	Combination of Sounds	音の連続について学ぶ。
11	Syllables	言語の音声記述で重要な概念である音節という概念について学ぶ。
12	Quantity, Accent	音長、アクセントについてその概略を学ぶ。
13	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について、学ぶ。
14	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について、引き続き学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、必ず内容について質問しますので、必ず読んできてください。さらに関与する概念で新しいものについては、先にご自身で調べておくと、非常に理解が深まります。

まず、文献を読むべく、英語に習熟することが非常に重要です。常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで、発表の準備を怠りなくすること、他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること、の2点が大切です。
大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

Takebayashi, Shigeru (1976). *A Primer of Phonetics*. Tokyo: Iwasaki Linguistic Circle.[入手困難なため、授業支援システム等により配布します。]

【参考書】

- 以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。一般的なのですが、役に立ちます。
 - ・高橋作太郎（編集）。『リーダーズ英和辞典』。第三版。東京：研究社。
 - 学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むのには必須です。
 - ・Janssen, S. (ed.) (2024). *The World Almanac and Book of Facts 2025*. New York: The World Almanac Books.
 - ・Philip's Maps (2024). *Philip's Modern School Atlas*. (101st edition.) London: Philip's.
- 以上の2冊は、英語の文献を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表（50％）、討論への参加（50％）、欠席は基本的に認めません。この評価法をもとに、本授業の到達目標の60％以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用しますので、パソコンなどの情報端末を用意してください。

【その他の重要事項】

言語研究の基礎として、音声に関する研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です。今回のテキストは、とても基礎的なテキストですので、初歩から言語学・音声学の考え方が分かるような構成になっています。授業では、教材の内容を理解するだけではなく、その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように、一緒に議論しながら解説を加えていきます。言語の研究の基礎固めをしたい方、構造主義を基本から理解したい方には、特にオススメの内容になっています。言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します。なお、進め方などについては、履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります。

【担当教員の専門分野等】

言語学、英語学（形態論、統語論、音声学）、英語史など。

【カリキュラム上の位置づけ】

言語・文化に関して、比較・対照するということを軸に学んでいく2単位の科目です。（今年度は言語の研究法の基本をを学んでいきます。）

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key for understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading a textbook on phonetics, which constitutes the foundation of linguistic studies.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three-fold:

1. to familiarise yourself with basic concepts and methodology of language studies,
 2. to pursue generalisations through applying them,
 3. to get accustomed to reading literature in foreign language(s).
- 【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You should read in advance and be ready for being asked various questions, or being asked for giving comments. According to the MEX regulation, the course of this type expects you to spend 4 hours for preparation and reviewing.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Basically, no absence allowed. Active participation in class sessions 50%, presentations 50%.
Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LNG500G1 - 106

多言語相関論Ⅲ B

興石 哲哉

サブタイトル：言語の研究方法を学ぶ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが、言語の研究法についてはテクニカルなところがあり、なかなか理解が難しいのが現実です。本授業では、それを克服すべく、基本的な文献を読みながら、主に音声研究以外の言語研究の基本を固めていきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は対面で行います。授業では学生にどんどん意味を問いかけていき、教材を日本語に訳していただき、説明を加えます。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
 - 2) 分からない場合、積極的に質問したり、意見を出し合うこと、
- の2点です。

課題や授業内容については、「学習支援システム」を用いて、基本的に事後に詳細なコメントを担当者が出しますので、それをさらなる研究等に活かしてください。

最終授業だけでなく、中途でも、折を見て、フィードバックの時間を設けますので、内容についての質問等には随時対処していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入、音声学と音韻論について	本科目の概略、学習の仕方等についての説明。その上で、教材を読み始める。
第2回	音韻論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第3回	音韻論について	担当者に順次発表してもらい、第2回の次の部分を読み進め、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第4回	形態論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第5回	形態論について	担当者に順次発表してもらい、第4回の次の部分を読み進め、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第6回	統語論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第7回	統語論について	担当者に順次発表してもらい、第6回の次の部分を読み進め、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第8回	統語論について	担当者に順次発表してもらい、第7回の次の部分を読み進め、関連トピックをより詳細に議論、考察していく。
第9回	意味論について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第10回	語用論について	担当者に順次発表してもらい、第9回の次の部分を読み進め、関連トピックをさらに議論、考察していく。
第11回	言語と文化について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第12回	社会言語学について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第13回	言語接触について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。
第14回	言語変化について	担当者に順次発表してもらい、関連トピックを議論、考察していく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、必ず内容について質問しますので、必ず読んできてください。さらに関与する概念で新しいものについては、先にご自身で調べておくと、非常に理解が深まります。

まず、文献を読むべく、英語に習熟することが非常に重要です。常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで、発表の準備を怠りなくすること、他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること、の2点が大切です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

基本的に、*Language Files*, 12th edition (2016 年版, Department of Linguistics, The Ohio State University, Columbus: The Ohio State University Press) を用いますが、内容は選択します。その他を用いる場合には、授業で指示します。いずれも、「学習支援システム」等を通じ配布します。

【参考書】

- 以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。一般的なのですが、役立ちます。
 - ・高橋作太郎（編集）。『リーダーズ英和辞典』。第三版。東京：研究社。
 - 学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むのには必須です。
 - ・Janssen, S. (ed.) (2024). *The World Almanac and Book of Facts 2020*. New York: The World Almanac Books.
 - ・Philip's Maps (2024). *Philip's Modern School Atlas*. (101st edition.) London: Philip's.
- 以上の2冊は、英語の文献を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

報告、発表（50％）、討論への参加（50％）。場合によっては、小論文を課すこともあります（その場合、「討論への参加」に代えて、「小論文」が50％となります）。欠席は基本的に認めません。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用しますので、パソコンなどの情報端末を用意することが望ましいです。

【その他の重要事項】

言語研究の基礎として、様々な領域の研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です。今回のテキストは非常に基礎的なテキストで、初歩から言語の研究についての考え方が分かるように書かれています。授業では、教材の内容を理解するだけでなく、その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように、一緒に議論しながら解説を加えていきます。言語の研究の基礎固めをしたい人には、特にオススメの内容になっています。言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します。なお、進め方など、履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 英語学、音声学、言語学
<研究テーマ> 英語の形態論を中心とする領域。
<主要研究業績>

Koshiishi, Tetsuya (2011). *Collateral Adjectives and Related Issues*. Bern: Peter Lang.

【カリキュラム上の位置】

言語・文化に関して、比較・対照するということを軸に学んでいく2単位の科目です。（今年度は言語の研究法の基本をを学んでいきます。）

【オフィスアワーについて】

基本的に、水曜日の昼休みに設定していますが、担当者宛にメールをいただければ、随時設定することが可能です。

【進行に関しての注記】

2021年度がそうでしたが、受講者の理解を見て、進路を遅らせます。昨年度の場合には、具体的には、11月半ばまでを、音韻論に費やし、その後形態論に入っただけで、統語論には入りませんでした。

これは、言語学の考え方そのものに、時間をかけて慣れていただくためです。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key to understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading some of the basic literature related to the fields other than phonetics.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three-fold:

1. to familiarise yourself with basic concepts and methodology of language studies,
 2. to pursue generalisations through applying them,
 3. to get accustomed to reading literature in foreign language(s).
- 【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
You should read in advance and be ready for being asked various questions, or being asked for giving comments. According to the MEX regulation, the course of this type expects you to spend 4 hours for preparation and reviewing.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Basically, no absence allowed. Active participation in class sessions 50%, presentations 50%.

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LNG500G1 - 107

多言語相関論Ⅳ A

副島 健作

サブタイトル：多文化共生のための日本語言語学

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない学習者に日本語を教えるという視点から、日本語に関する知識を深め、日本語学習者の母語と他の言語との相違点を理解する。また、コミュニケーションのための文法や語彙について考察し、多文化共生社会における日本語の役割とその言語学的側面について理解を深める。

【到達目標】

- 1) 言語の実態と、一般的な母語話者が持っている言語的知識を区別し、広く相対的な観点から日本語を捉える方法を身につける。
- 2) 言語資料から言語的事象を取り出す方法を身につける。
- 3) 相手の感情を害する誤用とはどのようなものか、発話スタイルなど、誤用以外にも相手の感情に影響するものがあるか、考える。
- 4) 日本語教育のための日本語学の研究動向について、自分の言葉で説明できる。
- 5) 日本語学に関する研究と日本語教育実践の関係性について、自分の意見を具体的に述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業は講義および受講者の発表から成ります。講義では、身近な日本語がどのような成り立っているかを分析し、無意識に使っている日本語の背後にある法則性を見つけ出します。受講者には、トピックに関する論文を選び要約し、討論することを求めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション 具体的エピソード	テキストの紹介・配布。 授業の進め方の確認。 外国人の日本語使用から「気づく」日本語の使用上の問題点を確認する
第2回	日本語の音	日本語の音声や音韻の構造について理解し、知識を深める
第3回	形態素・接辞、活用	形態素・接辞や活用形について理解し、知識を深める
第4回	品詞と文の成分	品詞と文の構成要素について理解し、知識を深める
第5回	格と述語	格と述語の役割について理解し、知識を深める
第6回	動詞の自他とヴォイス（受身文・使役文）	動詞の自他とヴォイス（受身文・使役文）について理解し、知識を深める
第7回	テンス・アスペクト・モダリティ	テンス・アスペクト・モダリティについて理解し、知識を深める
第8回	条件表現	条件表現の使い分けについて理解し、知識を深める
第9回	複文	複文について理解し、知識を深める
第10回	副詞	副詞の機能と用法について理解し、知識を深める
第11回	省略・主題と主格	省略や主題と主格の使い分けについて理解し、知識を深める
第12回	授受表現	授受表現について理解し、知識を深める
第13回	のだ文、終助詞・とりたて助詞	「のだ」文や終助詞・とりたて助詞について理解し、知識を深める
第14回	学期末試験	今学期の内容に関する試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各トピックに関する日本語の現象について、身近な例をたくさん集め、意識的に観察し、自分なりに真剣に考えてくる。
本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

教科書及び参考文献は初回授業で指示する。

【参考書】

庵功雄(2012)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第2版』スリーエーネットワーク
高橋太郎(2005)『日本語の文法』ひつじ書房
日本語文法学会(編)(2014)『日本語文法辞典』大修館書店
益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法・改訂版』くろしお出版
ブラウン&レヴィンソン/田中典子監訳(2011)『ポライトネス』研究社

滝浦真人(2005)『日本の敬語論』大修館書店
井出祥子(2006)『わきまの語用論』大修館書店
三宅和子(2011)『日本語の対人関係把握と配慮表現行動』ひつじ書房
トマス/浅羽亮一監修(1998)『語用論入門』研究社
オーティエ編/浅羽亮一監修(2004)『異文化理解の語用論』研究社
他多数

【成績評価の方法と基準】

本授業の到達目標がどれくらい達成できているかを以下の方法により合計100点で評価する。

レポート(40%)=(興味のある研究論文について紹介し、自分の意見を述べる)

発表のパフォーマンス(20%)

課題(20%)

平常点(受講態度など)(20%)

この成績評価の方法をもとに総合的に判定し、60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません

【その他の重要事項】

受講生の発表やディスカッションが中心になるため、積極的な参加を歓迎します。

少しでも日本語教師に興味があるならば、適宜相談に乘ります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語文法、言語学、日本語教育

<研究テーマ>

コミュニケーション重視の日本語教育、文法構造を中心とした「日本語らしさ」の通言語的研究

<主要研究業績>

副島健作(2024)「音声言語における結果表現の使い分け」『社会言語科学』27(1), 127-136.

副島健作(2023)「受身や自動詞とその周辺構文による結果の表現－日本語、韓国語、ロシア語、エストニア語を対象に－」『異文化』24, 104-128.

副島健作(2021)「日本語の五十音図再考－新たに作られたつづめる音節を求めて－」『東北大学大学院 国際文化研究科論集』29, 63-76.

【Outline (in English)】

【Course outline】

The aim of this course is to introduce the perspective of teaching Japanese to non-native learners, deepen knowledge of the Japanese language, and understand the differences between the learners' native languages and Japanese. Additionally, the course examines grammar and vocabulary for communication to enhance understanding of the role of the Japanese language and its linguistic aspects in a multicultural society.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to:

- (1) Distinguish between the reality of language and the linguistic knowledge possessed by native speakers in general, and learn to perceive the Japanese language from a broad and relative perspective.
- (2) Learn how to extract linguistic phenomena from linguistic materials.
- (3) Reflect on what kinds of misuses are harmful to the feelings of others, and consider whether factors such as speech style affect the feelings of others.
- (4) Explain research trends in Japanese linguistics for Japanese language education in one's own words.
- (5) State one's own opinions concretely about the relationship between research on Japanese linguistics and the practice of Japanese language education.

【Learning activities outside of classroom】

Students will be expected to be sure to access the assignments that are mentioned in each case, and try to develop your own areas to handle. The contents will be the subject of question-and-answer sessions and discussions, if necessary.

Your required study time is at least four hours for each class meeting.

【Grading Criteria /Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following:

Report (40%) = (Introduce a research paper of your interest and state your opinion)

Performance of the presentation (20%)

Assignments to check for understanding (20%)

Attitude and others (20%)

CUA500G1 - 107 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

多文化相関論 I A

LETIZIA GUARINI

サブタイトル：ジェンダー理論から現代文化を読み解く

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、デラルド・ウィン・スー『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』（明石書店、2020年）を読んで、ジェンダー理論やクィア理論の視点から文化を考察する力を養う。

【到達目標】

- 1) ジェンダー理論やクィア理論についての基礎的な知識を身につける。
- 2) クィアの視座から表象文化について論じることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

デラルド・ウィン・スー『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』（明石書店、2020年）を読む。毎回、1名の発表者が、担当する章の内容をまとめ、論点整理やディスカッションのための問題提起を行う（発表時間は20分程度）。また、文学作品や映像作品を取り上げ、グループでディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	受講者の自己紹介。授業計画について説明を行う。発表の順番を決める。『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』『序文』についてディスカッションを行う。
第2回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第1章	第1章「第1章 マイクロアグレッションとは何か」についてディスカッションを行う。
第3回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第2章	第2章「マイクロアグレッションの分類」についてディスカッションを行う。
第4回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第3章	第3章「マイクロアグレッションにより生じる心理的ジレンマとそのダイナミクス 人種的リアリティの衝突」についてディスカッションを行う。
第5回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第4章	第4章「マイクロアグレッションのプロセスモデル——発生から結果まで」についてディスカッションを行う。
第6回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第5章	第5章「マイクロアグレッションが引き起こすストレス——身体および精神の健康に与える影響」についてディスカッションを行う。
第7回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第6章	第6章「マイクロアグレッションの加害者と抑圧——野獣の本性」についてディスカッションを行う。
第8回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第7章	第7章「人種／民族に関するマイクロアグレッションとレイシズム」についてディスカッションを行う。
第9回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第8章	第8章「ジェンダーに関するマイクロアグレッションと性差別」についてディスカッションを行う。
第10回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第9章	第9章「性的指向に関するマイクロアグレッションと異性愛主義」についてディスカッションを行う。
第11回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第10章	第10章「職場と雇用におけるマイクロアグレッションの影響」についてディスカッションを行う。
第12回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第11章	第11章「教育とマイクロアグレッション——教室での人種に関する困難な対話の促進」についてディスカッションを行う。
第13回	『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』第12章	第12章「心理支援におけるマイクロアグレッションの影響」についてディスカッションを行う。
第14回	まとめ	全体のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

課題のテキストを必ず事前に読む。

発表者は、テキストの内容をまとめ、議論を喚起する形で発表できるように準備する。

【テキスト（教科書）】

デラルド・ウィン・スー『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション 人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』（明石書店、2020年） 価格 ¥ 3,850

【参考書】

- 岩淵功（編）『多様性との対話 ダイバーシティ推進が見えなくするもの』（青弓社ライブラリー、2021年）
 菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 1』（晃洋書房、2019年）
 菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 2』（晃洋書房、2022年）
 菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 3』（晃洋書房、2023年）
 森山至貴『LGBTを読みとく：クィア・スタディーズ入門』（ちくま新書、2017年）

【成績評価の方法と基準】

研究発表とグループワーク 60 %、学期末レポート（2000字程度） 40%で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

引き続き受講生のニーズに合わせてオンラインで授業参加を可とする。

【学生が準備すべき機器他】

発表やレポートを準備するためのパソコンなど。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論
 ＜研究テーマ＞現代日本社会における家族、とりわけ父親や父娘関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳や現代文学とに焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。トランスカルチュラルイズムの研究も行っている。

＜主要研究業績＞

Guarini, Letizia. "Breast-Is-Best" and Care in Fukazawa Ushio's Chibusa no kuni de." Japanese Language and Literature no. 58-2 (2024): 253-283. doi.org/10.5195/jll.2024.323

Guarini, Letizia. "Dismantling the Family Ideology in Contemporary Japanese Literature: Hatred and Disgust in Three Family Stories by Kakuta Mitsuyo." In The Asian Family in Literature and Film : Changing Perceptions in a New Age-East Asia, Volume I, edited by Bernard Wilson and Sharifah Aishah Osman. Palgrave Macmillan, 2024.

グアリーニ・レティツィア「『アンソール・ディスタンス』—コロナ文学が語る脆弱性とケアの倫理」『金原ひとみ（現代女性作家読本22）』（鼎書房、2025年）

グアリーニ・レティツィア「異国の共同体で居場所を見つける—一須賀敦子の越境性をめぐって—」『昭和文学研究89号』（2025年）

【Outline (in English)】

(Course outline)

In this class, we will discuss "Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation" by Derald Wing Sue (Wiley, 2010). Students will learn about gender and queer theory applied to the analysis of culture and representation.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1) Acquire basic knowledge about gender and queer theory.
- 2) Read literary and cultural works from the perspective of gender and queer studies.

(Learning activities outside of the classroom)

Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session). They are also expected to be prepared to deliver presentations in class.

(Grading Criteria /Policy)

The final grade will be decided based on the following:

Involvement during discussion and presentation: 60%

Final essay: 40%

CUA500G1 - 108 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

多文化関連論 I B

LETIZIA GUARINI

サブタイトル：ジェンダー史から文化を読み解く

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、弓削尚子『はじめての西洋ジェンダー史 家族史からグローバル・ヒストリーまで』（山川出版社、2021年）を読んで、歴史学の観点からジェンダーについて考える。またジェンダー研究の観点から表象文化を分析する力を養う。

【到達目標】

1. ジェンダー・セクシュアリティ理論の知識を身につける。
2. 幅広くメディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象を分析する能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

弓削尚子『はじめての西洋ジェンダー史 家族史からグローバル・ヒストリーまで』（山川出版社、2021年）を読む。毎回、発表者が担当する章の内容をまとめ、論点整理やディスカッションのための問題提起を行う（発表時間は20分程度）。また、様々なメディアを分析しながらグループでディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	受講者の自己紹介。授業計画について説明を行う。発表の順番を決める。『はじめての西洋ジェンダー史』「はじめに」についてディスカッションを行う。
第2回	『はじめての西洋ジェンダー史』第1章	第1章「『古き良き大家族』は幻想家族史」についてディスカッションを行う。
第3回	家族の表象	具体的な作品を取り上げて、家族の表象についてディスカッションを行う。
第4回	『はじめての西洋ジェンダー史』第2章	第2章「女性の歴史が歴史学を変えた ―女性史」についてディスカッションを行う。
第5回	女性の表象	具体的な作品を取り上げて、女性の表象についてディスカッションを行う。
第6回	『はじめての西洋ジェンダー史』第3章	第3章「女らしさ・男らしさは歴史の変数 ―ジェンダー史」についてディスカッションを行う。
第7回	『はじめての西洋ジェンダー史』第4章	第4章「男女の身体はどうとらえられてきたか ―身体史」についてディスカッションを行う。
第8回	身体の表象	具体的な作品を取り上げて、身体の表象についてディスカッションを行う。
第9回	『はじめての西洋ジェンダー史』第5章	第5章「男はみな強いのか ―男性史」についてディスカッションを行う。
第10回	男性の表象	具体的な作品を取り上げて、男性の表象についてディスカッションを行う。
第11回	『はじめての西洋ジェンダー史』第6章	第6章「『兵士であること』は「男であること」なのか ―『新しい軍事史』」についてディスカッションを行う。
第12回	『はじめての西洋ジェンダー史』第7章	第7章「西洋近代のジェンダーを脱構築する ―グローバル・ヒストリー」についてディスカッションを行う。
第13回	個人研究発表	修士論文についての個人研究発表をしよう。
第14回	まとめ	授業全体のまとめを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。
課題のテキストを必ず事前に読む。
発表者は、テキストの内容をまとめ、議論を喚起する形で発表できるように準備する。

【テキスト（教科書）】

弓削尚子『はじめての西洋ジェンダー史 家族史からグローバル・ヒストリーまで』（山川出版社、2021年）¥ 2,530

【参考書】

加藤秀一『はじめてのジェンダー論』（有斐閣、2017年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 1』（見洋書房、2019年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 2』（見洋書房、2022年）
菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 3』（見洋書房、2023年）
三橋順子『これからの時代を生き抜くためのジェンダー&セクシュアリティ論入門』（辰巳出版、2023年）

【成績評価の方法と基準】

研究発表とグループワーク 60 %、学期末レポート（2000字程度）40%で総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

引き続き受講生の状況に合わせてオンラインで授業参加を可とします。

【学生が準備すべき機器他】

発表やレポートを準備するためのパソコンなど。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論
<研究テーマ>現代日本社会における家族、とりわけ父親や父親関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳や現代文学とに焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。トランスカルチュラルイズムの研究も行っている。

<主要研究業績>

Guarini, Letizia. "Breast-Is-Best' and Care in Fukazawa Ushio's Chibusa no kuni de." Japanese Language and Literature no. 58-2 (2024): 253-283. doi.org/10.5195/jll.2024.323

Guarini, Letizia. "Dismantling the Family Ideology in Contemporary Japanese Literature: Hatred and Disgust in Three Family Stories by Kakuta Mitsuyo." In The Asian Family in Literature and Film : Changing Perceptions in a New Age-East Asia, Volume I, edited by Bernard Wilson and Sharifah Aishah Osman. Palgrave Macmillan, 2024.

グアリーニ・レティツィア「『アンソシヤル ディスタンス』―コロナ文学が語る脆弱性とケアの倫理」『金原ひとみ（現代女性作家読本22）』（鼎書房、2025年）

グアリーニ・レティツィア「異国の共同体で居場所を見つける―須賀敦子の越境性をめぐって―」『昭和文学研究89号』（2025年）

【Outline (in English)】

(Course outline)

In this course, we will discuss "History of Gender in the West: From Family History to Global History" by Yuge Naoko (Yamakawa shuppansha, 2021).

This course is designed to enhance students' understanding of the construction and representation of gender within Western societies. Students will learn to analyze literary and cultural texts from a gender/sexuality perspective.

(Learning objectives)

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1) Understand concepts in gender and sexuality theory.
- 2) Analyze representations of gender and sexuality issues in a wide range of media.

(Learning activities outside of the classroom)

Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session). They are also expected to be prepared to deliver presentations in class.

(Grading Criteria /Policy)

The final grade will be decided based on the following:

Involvement during discussion and presentation: 60%

Final essay: 40%

CUA500G1 - 109 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

多文化相関論Ⅱ A

小川 敦

サブタイトル：多言語社会を考える

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多言語社会や移民社会における言語と教育や言語と格差についての文献を読み、考え、議論します。

ここでいう「多言語社会」とは、シンガポールやカナダのような複数の公用語が存在する国や社会だけを指すものではありません。母語（母方言）と標準語を使う場合、話し言葉と書き言葉が異なる場合、外国語として様々な言語を学ぶ場合も広く「多言語」として考え、広い視野で考えるようにしたいと思います。

【到達目標】

- ・複数の言語が用いられる社会にもさまざまな形があることを理解する。
- ・多言語社会における社会のありよう、とくに言葉と教育、社会の格差のありようについて理解し、自らの研究の糧とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業で扱う文献の候補を初回授業に提示します。受講生の希望によっては社会言語学の基本書を読むこともあります。

受講生は必ずレジュメを作って発表していただきます。

受講者が少ない場合、毎回発表という形式にはせず、課題としている論文等についてディスカッションポイントを受講者各人に提示していただき、議論を展開します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業で扱う資料を選定し、担当者を決めます
第2回	授業テーマに関する文献講読-1	文献について発表し、議論を行います
第3回	授業テーマに関する文献講読-2	文献について発表し、議論を行います
第4回	授業テーマに関する文献講読-3	文献について発表し、議論を行います
第5回	授業テーマに関する文献講読-4	文献について発表し、議論を行います
第6回	授業テーマに関する文献講読-5	文献について発表し、議論を行います
第7回	授業テーマに関する文献講読-6	文献について発表し、議論を行います
第8回	授業テーマに関する文献講読-7	文献について発表し、議論を行います
第9回	授業テーマに関する文献講読-8	文献について発表し、議論を行います
第10回	授業テーマに関する文献講読-9	文献について発表し、議論を行います
第11回	授業テーマに関する文献講読-10	文献について発表し、議論を行います
第12回	授業テーマに関する文献講読-11	文献について発表し、議論を行います
第13回	授業テーマに関する文献講読-12	文献について発表し、議論を行います
第14回	授業のまとめ	授業のまとめを行います

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当する章や論文のレジュメを準備します。充実した議論にするため、他の受講生は次回扱われる章や論文をよく読んで自分なりのディスカッションポイントを考えてきてください。

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に教科書は指定しません。授業で選んだものについて、PDFまたは紙で配布します。

【参考書】

授業初回に提示します。授業で読む文献をいくつかの候補から選びます。

【成績評価の方法と基準】

最終レポート50%、授業への積極的な参加50%とします。

【学生の意見等からの気づき】

学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。

【学生が準備すべき機器他】

PCやタブレット端末があると便利です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

社会言語学、言語政策（主にドイツ語圏）

<研究テーマ>

多言語社会研究、移民社会の言語教育政策、ルクセンブルク研究

<主要研究業績>

小川敦（2022）「ルクセンブルク語振興戦略」とその成立背景に関する一考察」『エネルギー』47号、29-50頁

小川敦（2021）「多言語社会ルクセンブルクにおける言語イデオロギーの「対抗」」柿原武史・仲潔・布尾勝一郎・山下仁（編著）『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』（三元社）37-66頁

大澤麻里子・小川敦・境一三「イタリア・南チロルにおけるCLIL - ドイツ語系学校への導入を巡って -」『言語政策』16号、29-52頁

【Outline (in English)】**【Course outline】**

The issues of language and education and language and inequality in multilingual and migrant societies will be the subject of discussion and debate.

【Learning Objectives】

Students will understand that there are various forms of societies in which more than one language is used.

Students will develop an understanding of the different forms of multilingual societies, particularly in relation to language, education and social inequalities.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

【Grading Criteria /Policy】

Final report 50%

Active participation 50%

CUA500G1 - 110 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

多文化相関論Ⅱ B

小川 敦

サブタイトル：言語の政策を考える

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献を読みながら、多言語社会や移民社会における言語と教育、格差、権利、言語政策について考え、議論します。

ここでいう「多言語社会」とは、シンガポールやカナダのような複数の公用語が存在する国や社会だけを指すものではありません。母語（母方言）と標準語を使う場合、話し言葉と書き言葉が異なる場合、外国語として様々な言語を学ぶ場合も広く「多言語」として考え、広い視野で考えるようにしたいと思います。

【到達目標】

- ・複数の言語が用いられる社会にもさまざまな形があることを理解する。
- ・言語に関する政策を体系的に理解する。
- ・多言語社会における社会のありよう、とくに言葉と教育、社会の格差のありようについて理解し、自らの研究の糧とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業で扱う文献の候補を初回授業に提示します。テーマはあまり変わりませんが、春学期からの連続で受講することも考慮して、春学期とは別の文献を扱います。

受講生は必ずレジュメを作って発表していただきます。

受講者が少ない場合、毎回発表という形式にはせず、課題としている論文等についてディスカッションポイントを受講者各人に提示していただき、議論を展開します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業で扱う資料を選定し、担当者を決めます
第2回	授業テーマに関する文献講読-1	文献について発表し、議論を行います
第3回	授業テーマに関する文献講読-2	文献について発表し、議論を行います
第4回	授業テーマに関する文献講読-3	文献について発表し、議論を行います
第5回	授業テーマに関する文献講読-4	文献について発表し、議論を行います
第6回	授業テーマに関する文献講読-5	文献について発表し、議論を行います
第7回	授業テーマに関する文献講読-6	文献について発表し、議論を行います
第8回	授業テーマに関する文献講読-7	文献について発表し、議論を行います
第9回	授業テーマに関する文献講読-8	文献について発表し、議論を行います
第10回	授業テーマに関する文献講読-9	文献について発表し、議論を行います
第11回	授業テーマに関する文献講読-10	文献について発表し、議論を行います
第12回	授業テーマに関する文献講読-11	文献について発表し、議論を行います
第13回	授業テーマに関する文献講読-12	文献について発表し、議論を行います

第14回 授業のまとめ 授業のまとめを行います

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当する章や論文のレジュメを準備します。充実した議論にするため、他の受講生は次回扱われる章や論文をよく読んで自分なりのディスカッションポイントを考えてきてください。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に教科書は指定しません。授業で選んだものについて、PDFまたは紙で配布します。

【参考書】

授業初回に提示します。授業で読む文献をいくつかの候補から選びます。

【成績評価の方法と基準】

最終レポート50%、授業への積極的な参加50%とします。

【学生の意見等からの気づき】

学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。

【学生が準備すべき機器他】

PCやタブレット端末があると便利です。春学期とは別の文献を扱います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

社会言語学、言語政策（主にドイツ語圏）

<研究テーマ>

多言語社会研究、移民社会の言語教育政策、ルクセンブルク研究

<主要研究業績>

小川敦（2022）「ルクセンブルク語振興戦略」とその成立背景に関する一考察」『エネルゲイア』47号、29-50頁

小川敦（2021）「多言語社会ルクセンブルクにおける言語イデオロギーの「対抗」」柿原武史・仲潔・布尾勝一郎・山下仁（編著）『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』（三元社）37-66頁
大澤麻里子・小川敦・境一三「イタリア・南チロルにおけるCLILードイツ語系学校への導入を巡ってー」『言語政策』16号、29-52頁

【Outline (in English)】

【Course outline】

The issues of language and education and language and inequality in multilingual and migrant societies will be the subject of discussion and debate.

【Learning Objectives】

- Students will understand that there are various forms of societies in which more than one language is used.
- Students will develop a systematic understanding of language-related policies.
- Students will develop an understanding of the different forms of multilingual societies, particularly in relation to language, education and social inequalities.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

【Grading Criteria /Policy】

Final report 50%

Active participation 50%

HIS500G1 - 111 (史学/History 500)

多文化相関論Ⅲ

佐々木 一恵

サブタイトル：歴史学の諸アプローチ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、歴史学における方法論的展開の概要を理解することを目指します。また、歴史学の方法論に基づき研究論文を執筆していけるようになることを目的とします。

今年度はプロパガンダをテーマとして議論していきます。

【到達目標】

1. 歴史学におけるこれまでの方法論の特徴とその展開について理解できるようにする。
2. 歴史学の方法論に基づき一次史料を用いて研究論文を書いていけるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の前半は、発表者が文献に関する説明をレジュメに沿って行うと共に、教員が必要に応じて補足説明を行う。授業の後半では、文献をベースにディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	イントロダクション	授業概要の説明
2回	東ドイツのプロパガンダ	【テキスト】 ◎塩崎隆敏「冷戦時代のプロパガンダの内情～旧東ドイツ・RBIの調査から～」
3回	戦前の日本のプロパガンダ	【テキスト】 ◎田島奈都子「戦前期日本のデザイン界における第一次世界大戦ポスターの受容と影響2」
4回	宣伝から生まれたマス・エンパシー 1	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第1章前半
5回	宣伝から生まれたマス・エンパシー 2	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第1章後半
6回	映画と共感 1	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第2章前半
7回	映画と共感 2	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第2章後半
8回	ラジオと共感 1	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第3章前半
9回	ラジオと共感 2	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第3章後半
10回	苦しみを社会化する 1	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第4章前半

11回	苦しみを社会化する 2	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第4章後半
12回	喜びを社会化する 1	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第5章前半
13回	喜びを社会化する 2	【テキスト】 ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史』第5章後半
14回	総括	今学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめてGoogle Classroomに授業が始まる1時間前までにアップロードしてください。
- ・文献の発表者はレジュメをパワー・ポイントで作成してください。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

- ◎塩崎隆敏「冷戦時代のプロパガンダの内情～旧東ドイツ・RBIの調査から～」『放送研究と調査』74巻、2号、2024年。
- ◎田島奈都子「戦前期日本のデザイン界における第一次世界大戦ポスターの受容と影響2」『非文字資料研究』20号、2020年。
- ◎亀田真澄『マス・エンパシーの文化史—アメリカとソ連がつくった共感の時代』（東京大学出版会、2023年）。

【参考書】

A・プラトカニス、E・アロンソン（社会行動研究会訳）『プロパガンダ』（誠信書房、1998年）。

【成績評価の方法と基準】

授業への貢献度・参加度（50点）、提出物（50点）で、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【学生が準備すべき機器他】

この授業ではGoogle Classroomを使用します。初回の授業の後に、Google Classroomへの登録をお願いします。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

アメリカ合衆国史 思想史 ジェンダー

＜研究テーマ＞

- ・アメリカ革新主義思想の宗教・ジェンダー・セクシュアリティからの再考
- ・20世紀転換期アメリカにおける個人主義・リベラリズム・資本主義に抗する信仰運動としての米国聖公会のアングロ・カトリシズム＜主要研究業績＞
- 「『神に奉獻した生』とプロテスタントの女性主体—19世紀後半のアメリカにおける聖マリア修女会の実践から—」『異文化』24号、2023年。
- 「善き生の回復を求めて—ラルフ・アダムズ・クラムの教会建築論に見る革新主義期アメリカに抗するアングロ・カトリシズムの想像力(イマジネリー)—」『年報アメリカ研究』第56号、2022年。
- 「プロテスタンティズムの倫理と革新主義期アメリカの精神—アングロ・カトリシズムの視点から見る生政治—」『異文化』23号、2022年。
- 「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動——生と活動の様式としてのアングロ・カトリシズム」『ジェンダー史学』16号、2020年。
- 「『第三者』性のポリティクス—19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編—」『アメリカ史研究』42号、2019年。
- 「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー—女子教育とジャンヌ＝ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イベロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリー—ナショナルを超えて』上智大学出版、2018年。
- Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).
- “Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” The Japanese Journal of American Studies (no.23, 2012).

【Outline (in English)】

The course introduces basic historiographical issues in the discipline of history. Students are expected to develop the ability to apply historical methods of inquiry to the analysis of their Master's theses/Research papers.

By the end of the course, students are expected to be able to: 1) understand the methodological developments in the discipline of modern history and 2) write research papers based on historical methodology using primary sources.

Students will be expected to read assigned materials and upload one-page summary of the assigned text and the points of interest to Google Classroom before class begins. Presenters of assigned materials should prepare presentations in PowerPoint format.

The final grade is determined by presentations (50%) and assignments (50%).

ART500G1 - 112 (芸術学 / Art studies 500)

多文化芸術論 I

佐藤 千登勢

サブタイトル：映画を読む

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、芸術テキストを審美的快楽の体験の場としてのみならず、社会批判の装置として捉え直し、その表現、表象の語る多義性と重層性について考え、議論します。ロシア（ソ連）、チェコ（チェコスロバキア）、ポーランドの文学作品や映画を用いながら、それぞれの国々の社会、経済、文化、歴史、国家間の勢力均衡を解説する作業を通して、多義的記号体系を分析・洞察する力を養います。

【到達目標】

映画作品を中心に、芸術言語が担う審美的機能と社会批判の機能という一見相反する多義的な表現の読解を重ねることで、これを自身の見解や思考の組み立て方に役立てて、論理的に議論やプレゼンテーションを展開する力を獲得することが目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

旧社会主義国家で創造された芸術テキストは、その国の文化や社会構造、イデオロギー、歴史的背景、国家間の関係を濃厚に映し出す、いわば、体制と人間社会の縮図モデルです。しかし、多義的で重層的な言語（映画言語、音楽言語を含む）により、それは、多様な解釈を許容するとともに、作者の真の意図やメッセージを解説すべき錯綜した迷宮のような作品となっていることも少なくありません。私たちは、手法や表象、形式といった審美的観点に着目すると同時に、《抑圧》《イデオロギーによる民族統合》《民族差別》《冷戦》《ソ連邦崩壊と離散》《ナショナリズム》といった社会学的・歴史的キーワードを基に、二重構造の芸術テキストを分析・批評していきます。授業でなされた議論や自身の見解をA4一枚程度にまとめたリアクションペーパーを毎回、提出してもらいます。リアクションペーパーは、次週の授業にてコメントを加えるかたちでフィードバックします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	芸術の機能について―― シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ（1）	ロシア・フォルマリズム宣言としても名高いシクロフスキーの『手法としての芸術』を基に、「異化＝自動化」「日常＝非日常」「手法＝素材」等の二項対立の芸術上の、また日常における意義を考える。
第2回	芸術の機能について―― シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ（2）	ロシア・フォルマリズムの主導者シクロフスキーが提唱した「異化」の概念について具体例を確認しつつ、理解を深める。
第3回	煽動と挑発―― モンタージュ派：エイゼンシュテイン	エイゼンシュテイン『ストライキ』、『戦艦ポチョムキン』、『十月』の煽動的なモンタージュについて概説。
第4回	煽動と挑発―― モンタージュ派：ジガ・ヴェルトフ	都市化と複製技術の発達を背景としたヴェルトフの手法としてのモンタージュについて考察。

第5回	プロパガンダー―― ブドフキンの映画言語『アジアの嵐』	ブドフキン『アジアの嵐』における多様なモンタージュを分析して審美的側面を確認しながら、同時にこの作品が呈示する多民族併合や社会主義革命の正当化という多層的テーマを読む。
第6回	プロパガンダー―― トゥーリンの映画言語『トゥルクシブ』	プロパガンダの煽動性の記号や表象を現前化させずに、宗教的煽動とも言える超越的力の存在と崇高さの創出、サブリミナル的手法によるプロパガンダの力を分析していく。
第7回	面従腹背の二重構造―― エイゼンシュテイン『イワン雷帝』	エイゼンシュテインの世界的影響力を配下におくためにスターリンが制作依頼した『イワン雷帝』。この作品にはスターリンを批判・揶揄する記号や表象、表現が構造化されている。作品をめぐるスターリンとエイゼンシュテインとの闘争という背景も交えつつ、概説。
第8回	面従腹背の二重構造―― アンジェイ・ワイダの映画言語（1）	ポーランドがソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、映画テキストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。『灰とダイヤモンド』、『地下水道』を扱う。
第9回	検閲からの解放の果て―― アンジェイ・ワイダの映画言語（2）	東欧革命、ソ連邦崩壊の後、歴史は、再評価、書き換え、名誉回復を迫られ、表現に検閲は消滅した。その時、「カティンの森事件」をワイダはどう描いたかを検証する。
第10回	抵抗と挑発―― ヴェラ・ヒティロヴァの映画言語	旧チェコスロバキアの統制から自由になろうとする国民の意志を、二人の自由闊達な少女たちを通してスタイリッシュに描出するセンス、そして映画言語の二重性、台詞と映像の不一致や台詞の重みについて考察。
第11回	寓話的諷刺と不条理―― シャフナザーロフ『ゼロ・シティ』	ソ連社会を幾重にもパロディ化した不条理作品の珠玉『ゼロ・シティ』を基に、終末期のソ連の表象、シャフナザーロフの映画言語を考察する、また、父親（国家）とは何ものか？ について考える。
第12回	寓話的諷刺不条理―― アブラーゼ『懺悔』	ソ連で社会現象となった映画『懺悔』。スターリンとヒトラーを融合させたような支配者、彼に両親を粛清された少女。支配者の一族のその後の償いの物語は、史実とシュールな感覚やユーモアを交えて表現される。その寓話的表象に着目しつつ、史実、記憶、不条理について考察していく。
第13回	国家と個人1―― パーヴェル・チュフライ『パパって何？』	ソ連崩壊後のロシア国民のメンタリティを、『父親』に裏切られた「義理の息子」の回想に重ね合わせた寓話的手法とその重みについて検討。《父殺し》の伝統についても考察。

- 第14回 国家と個人 ― イ ナチスドイツやソ連に支配を受
ジー・メンツェル けたチェコスロバキア。その悲
『英国王給仕人に乾 劇は小男ヤンを象徴として軽妙
杯！』 かつユーモラスに、しかし深み
をもって重層的に描かれる。こ
の描写と語りについて検討し、
喜劇の可能性について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

レジュメの内容や視聴した映像資料に対する自身の見解をA4一枚程度にまとめたリアクションペーパーを次週回の前日（木曜の正午）までに提出する（学習支援システムを利用）。リアクションペーパー作成に要する時間は1.5時間程度。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。教員の作成した資料を、教場もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】

参考書は使用しませんが、参考文献は、随時、レジュメに掲載します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（50％）、リアクションペーパー（50％）として総合的に判断します。本授業の到達目標の60％以上を達成した学生を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

とくにありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを通して資料配付、課題提示を行うことがありますので、ネットの通信環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

20世紀ロシア文学。ロシア・フォルマリズムを中心とした芸術理論。ソ連およびロシアの映画。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002283/profile.html>

【Outline (in English)】

● Course outline

We consider artistic texts not only as a place for experiencing aesthetic pleasures but also as a device of social criticism, and discuss the polysemy and multiplicity of their expressions and representations.

● Learning Objectives

The aim is to acquire the ability to logically develop discussions and presentations by repeatedly watching movie works and using them to formulate one's own views and thoughts.

● Learning activities outside of classroom

After each class meeting, you will be expected to submit a reaction paper that summarizes your own views on the video materials you watched by the next week. It takes about 1 hour to create the reaction paper.

● Grading Criteria/Policy

Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(50 %) and short reports(50 %). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

ART500G1 - 113 (芸術学 / Art studies 500)

多文化芸術論Ⅱ

廣松 勲

サブタイトル：フランコフォニー文学と社会

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

複数文化に広がる社会文化的現象を分析するために、この授業では「カナダ・ケベック州」と「カリブ海域諸島のフランス海外県」という、2つの「フランス語圏（フランコフォニー）」に注目する。いずれの地域もアメリカ大陸の一部であり、「英語圏（アングロフォニー）」とも密接に関わる地域でもある。これらの地域の芸術は、作品の形式に集中した「内在分析」だけではとらえ切れない豊饒な問題系を抱えている。そのため、文学・映画テキストに「社会学的なテキスト分析」を施すことで、テキストとコンテキストとの繋がりを、各地域の作品をもとに分析する。

このような具体的な作品分析を行うため、事前に各地域の社会文化的・言語学的状況を紹介することになる。

【到達目標】

この授業では、複数の言語・文化が併存する地域において生産される芸術作品（主に文学と映画）を分析対象として、いかに社会文化的現象が芸術作品に書き込まれるのかを検討する。

とりわけ、英語文化とフランス語文化が併存する「カナダ・ケベック州」、そしてフランス語文化とクレオール語文化が併存する「カリブ海域諸島」を分析対象にしつつ、学生には文学・映画テキストの「社会学的なテキスト分析」の方法を身に付けてもらうことを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

日本語による講義を行う。受講者は関心のあるテーマまたは作品について調査・分析を行い、それを基にした期末レポートを提出してもらう。

なお、期末レポートについては、フランスまたはフランス語圏に少しでも関連するならば、自らの研究テーマに即した発表を行うこともできる（比較分析など）。

さらに、毎回の授業においてコメントシートを提出してもらうことで、学生の理解度・考えなどを把握しておきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：フランス語圏とは何か？	「フランコフォニー」や「アングロフォニー」の歴史・地理
第2回	カリブ海域諸島のフランス語圏①	カリブ海域諸島の社会文化的・言語学的状況
第3回	カリブ海域諸島のフランス語圏②	エメ・セゼールの長編詩『帰郷ノート』
第4回	カリブ海域諸島のフランス語圏③	エドゥアル・グリッサンの小説『レザルド川』
第5回	カリブ海域諸島のフランス語圏④	パトリック・シャモワゾーの小説『素晴らしきソリボ』
第6回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑤	カリブ海域諸島の思想
第7回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑥	カリブ海域諸島の映画：『マルチニクの少年』
第8回	カナダ・ケベック州のフランス語圏①	カナダ・ケベック州の社会文化的・言語学的状況
第9回	カナダ・ケベック州のフランス語圏②	ジャック・ゴドブーの小説『やあ、ガラルノー！』
第10回	カナダ・ケベック州のフランス語圏③	エミール・オリヴィエの小説『パッサージュ』（邦訳なし）
第11回	カナダ・ケベック州のフランス語圏④	ダニエル・ラフエリエール的小説『吾輩は日本作家である』
第12回	カナダ・ケベック州のフランス語圏⑤	カナダ・ケベック州の思想
第13回	カリブ海域諸島からケベック州へ	カリブ海域とケベック州とのつながり：セゼールのドキュメンタリーを介して
第14回	総括	社会と芸術とのつながり方

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本講義で扱う文学作品については、一作を除いて、ほぼ全て邦訳が存在する。受講生には、できるだけ翻訳文献にも触れてほしい。

・授業で扱うアメリカ大陸のフランス語圏については、それぞれ自分自身でも社会状況などを事前に調べておいて欲しい。

・本授業の準備学習・復習時間は、合計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

・毎回資料を配布します。

【参考書】

・平野千香子著『フランス植民地主義の歴史』人文書院、2002年。

・鳥羽美鈴著『多様性のなかのフランス語』関西学院大学出版会、2012年。

・秋田茂著『イギリス帝国の歴史』中公新書、2012年。

・井野瀬久美恵著『興亡の世界史 大英帝国という経験』講談社学術文庫、2017年。

【成績評価の方法と基準】

・平常点と期末レポートに基づき、総合的に評価する。

①平常点（コメントシートなど）：30%

②期末レポート：70%

【学生の意見等からの気づき】

・講義科目ではあるが、できるだけ学生が自らの考え・反応などを講義中に述べられるような雰囲気づくりに努めたい。

・内容について、学生の関心に合わせて調整する必要があるため、学生とよく相談したい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> フランコフォニー文学

<研究テーマ> 脱植民地化以後のメランコリー、トランスカルチャー等

<主要研究業績> "Mélancolie postcoloniale : relecture de la mémoire collective et du lieu d'appartenance identitaire chez Patrick Chamoiseau et Émile Ollivier"（モントリオール大学提出博士論文）

【Outline (in English)】

This course introduces the foundations of literature of French speaking world (especially in the Americas) to students taking this course. They can learn also the methodology of literary research while reading literary text and social context at the same time.

The goals of this course are to understand and explain the socio-cultural situation of francophone literature.

Before and after each class meeting students will be expected to spend four hours reading the relevant documents.

Your overall grade in the class will be decided based on the followings: in-class contributions (discussion, reaction paper, etc): 30%, term-end report: 70%.

POL500G1 - 114 (政治学 / Politics 500)

異文化社会論 I A

今泉 裕美子

サブタイトル：地域と国際関係：植民地社会からのアプローチ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

植民地社会（植民地的な状況にある社会も含む）を、異なる文化をもつ人及びその集団同士の関係、移動によって形成される「地域」として捉え、それらが国際関係をいかに構成し、変化させているのかを学ぶ。植民地支配が宗主国と植民地に生み出した移民社会、植民地を手放した後の旧植民地宗主国に新たな形で表れている植民地主義も対象とし、現代世界の諸地域に多様な形であらわれる脱植民地化をめぐる問題を理解し、解決への考察につなげる。2025年は第二次世界大戦終結・日本敗戦80周年にあたるため、本年度は第二次世界大戦を中心に上記の内容を扱う。

【到達目標】

1. 植民地社会を人および人の集団の移動、運動、くらし、経験などから考察し、これに必要な基本的な概念、理論、思想について理解できる。
2. 植民地支配体制と植民地社会の相互の連関、この連関から国際関係の動態を把握し、植民地支配が過去にもたらした／形を変えて今なお再生産される問題を、諸地域の人びとの取り組みから理解し、解決への手がかりを見出すことができる。
3. 一見、自身の研究課題と異なるテーマであっても、自らの関心や研究課題とのつながりを「発見」することを通じて、広領域学としての国際関係学 (International Studies)、および地域研究を理解し、自身の研究に用いることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 毎回報告者を決め、割り当てられたテキストあるいは資料に関する報告、報告者以外は、質問やコメントを準備し、ディスカッションを行うことを基本とする。必要に応じて講義を行う場合もある。
2. 本授業に関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。
3. 対面で行うことを原則とするが、オンラインで実施する回がある可能性がある（【その他の注意事項】を確認して下さい）。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の内容の説明、受講生の関心をもとに進め方を調整する。
2	二つ目の総力戦としての第二次世界大戦 1	文献(b)を中心に、第一次世界大戦に現れた戦争観の転換（兵士の戦争体験、総力戦と民衆）から第二次世界大戦の特徴を学ぶ。
3	二つ目の総力戦としての第二次世界大戦 2	文献(b)を中心に、第一次世界大戦の講和会議から始まる「戦争責任問題」を中心に、第二次世界大戦の特徴を学ぶ。
4	第二次世界大戦の特徴 1	文献(a)を中心に、反ファシズム戦争、帝国主義戦争、民族解放戦争としての特徴を学ぶ。
5	第二次世界大戦の特徴 2	文献(c)を中心に、帝国主義戦争としての特徴を、第二次世界大戦後の問題との関連から学ぶ。
6	第二次世界大戦における日常生活のなかの総力戦	文献(d)第6巻の「日常と非日常の間」を中心に学ぶ。
7	第二次世界大戦における戦場の諸相	文献(d)第5巻の「兵士たちの戦争」を中心に学ぶ。
8	中間のまとめ	第7回までの論点と課題の整理。
9	第二次世界大戦における戦場の諸相	文献(d)第5巻の「戦場と戦闘」を中心に学ぶ。
10	第二次世界大戦における植民地をめぐる経験 1	文献(d)第4巻の「帝国解体という経験」を中心に学ぶ。
11	第二次世界大戦における植民地をめぐる経験 2	文献(d)第4巻の「帝国の残滓・帝国の痕跡」を中心に学ぶ。
12	第二次世界大戦と現代世界の諸問題の関係 1	文献(a)の「戦後史の展開と戦争責任問題」、「平和秩序の模索と人権」を中心に学ぶ。
13	第二次世界大戦と現代世界の諸問題の関係 2	受講生の関心があるトピックスをとりあげて学ぶ。
14	まとめ	本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

(a) 木畑洋一『第二次世界大戦—現代世界への転換点』吉川弘文館、2001年。
(b) 荒井信一『戦争責任論—現代史からの問い』岩波書店、2005年。
(c) 歴史学研究会編『帝国への新たな視座』青木書店、2005年。
(d) 倉沢愛子他編『岩波講座アジア・太平洋戦争 1－8、戦後篇』岩波書店、(1－8) 2005－2006年、(戦後篇) 2015年。

【参考書】

木畑洋一『イギリス帝国と帝国主義』有志舎、2008年。
内海愛子他『戦後責任』岩波書店、2014年。
岡真理他「「非戦争化」する戦争」『現代思想 特集：戦争の正体』vol.42、青土社、2014年。
歴史学研究会編『第4次 現代歴史学の成果と課題1』續文堂出版、2017年。
荒川正晴他編『岩波講座世界歴史20 二つの大戦と帝国主義I』岩波書店、2023年。
荒川正晴他編『岩波講座世界歴史21 二つの大戦と帝国主義II』岩波書店、2023年。
その他、随時提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業での討論、参加度など30%、報告30%、レポートなどの提出物40%。以上の成績評価をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【学生が準備すべき機器他】

オンラインライブで授業を行う場合は、パソコンやタブレットなどの通信機器、安定的な接続、通信容量に制限がない環境を各自で準備する。

【その他の重要事項】

・第1回目授業に参加する受講生（本登録するか未定でも参加は可能）は、学習支援システム（Hoppii）に必ず仮登録し、第1回目授業に関する情報を確認して下さい。
・第2回以後の授業でも、連絡やレジュメの共有はHoppiiにて行うため、随時確認すること。
・やむを得ない事情で欠席する場合は事前に連絡すること。事前に連絡出来ないタイミングでやむを得ない事情が生じて欠席した場合は、事後に速やかに連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

国際文化研究科教員紹介 (https://www.hosei.ac.jp/gs/kokusaibunka/kyoin/IMAIZUMI_Yumiko/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54)、法政大学学術研究データベース (<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html>) を参照。
・およそ30年にわたって日本国内、ミクロネシアでの聞き取りを行い、沖縄県県史・市史などの編さん、執筆に関わって来た。また米国議会図書館のNan'yo Collectionや琉球大学付属図書館矢内原忠雄文庫など複数の機関で、旧南洋群島関係の史料の発掘、整理、公開に関わった。「大文字の歴史」と「小文字の歴史」の関係を、史資料の発掘・分析と同時に、地域住民の経験をどう記録し、歴史として同時代で共有、次世代に継承するか、そのための聞き取りの方法、地域外の研究者として地域にいかに関わるのか、に組み組み続けている。この経験に基づく「地域研究」の方法を紹介し、受講生とともに考えてゆきたい。

【Outline (in English)】

【Course outline】

This course will introduce students to understand colonial society consisting of diverse cultural backgrounds under colonial system of international relations. As we focus on WWII, students will seek to understand the war through themes including anti-fascism, imperialism, and national liberation, which deeply affected international order and decolonization after the war. Students will be also familiar with International Studies and Regional Studies.

【Learning Objectives】

Students will be able to:

- ① Understand “region” as an actor to develop and change international relations.
- ② Analyze the issues of colonial societies in the evolution of international relations with understanding of relevant concepts, theories, and thought.
- ③ Critically analyze information and documents pertaining to Okinawa, setting them in historical context and in interdisciplinary perspective.

【Methods】

- ① Students are expected to read assigned readings and related material to be able to engage in active discussion prior to the class. Presenter should upload resume or Power Point of summary and discussion topics of assigned reading via Hoppii until 24-hour before the class. Other students should prepare for comments and questions.
- ② Students are expected to discuss the topics based on students' research field and subject.
- ③ Each student should submit presentation feedback or essay via Hoppii when they are required.
- ④ Schedule is subject to change depending on present situation both at home and abroad related Okinawa or students' interests and understanding.

【Learning activities outside of classroom】

Based on the 【Methods】, the standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.

[Grading Criteria /Policy]

Participation and contribution:30%; Presentation :30 %; Essay and
feedback:40%

Students are required to take more than 60%score in total to pass.

POL500G1 - 115 (政治学 / Politics 500)

異文化社会論 I B

今泉 裕美子

サブタイトル：国際関係学（International Studies）：植民地社会研究から発展したアプローチを学ぶ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際〇〇研究/論/学とは、専門分化した学問が、世界の複雑な事象を分析することを通じて発展してきた。なかでも、国際関係に関する研究の発展過程では、対象を国内から国外へと変化させたことに留まらず、その時々国際関係とこれを構成する行為体をどう捉え、その相互の関係をいかに特徴づけるかを分析し、また国内と国外の事象の相互連関も対象としてきた。

日本の高等教育機関が「国際関係論」を掲げた教学組織を設け、本格的に取り組み始めたのは、第二次世界大戦後であった。この取り組みは以後、国際政治学との一体的性格を強めるアメリカの **International Relations (IR)** にはほぼ対応しつつも、広領域学として構成されたことや地域研究を附随させた点にオリジナリティがみられた。そしてこのオリジナリティをいかした国際関係研究は、日本の高等教育の各教学組織で、より内実を深め、発展していく。

本授業では、敗戦後日本の高等教育機関が、国際関係研究を取り入れるうでの問題意識や方法、特に社会や文化をも対象とし、歴史的な視点を重視するようになったことに着目する。そこで、広領域学として成立した国際関係学を、その系譜のひとつである植民地社会(正確には植民及び植民政策)研究からの発展を確認したうえで、学としての方法論を考察し、現在の国際（あるいはグローバル）〇〇研究/論/学への理解につなげる。

【到達目標】

- ①国際関係研究の進展のなかで、国際関係学の特徴を理解できる。
- ②関連する基本的な概念、理論、思想を理解できる。
- ③国際関係学の方法論、特に「関係性」をめぐる視点や方法、学際的アプローチのなかでの専門分野の追究、を自分の研究テーマや専門分野での取り組みにひきつけて理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ①毎回報告者を決め、文献や資料についてレジュメもしくはパワーポイントを作成し、授業開始4時間まえまでに学習支援システムの指定された掲示板にアップロードする。報告者は議論するトピックを選び、非報告者も質問やコメントを準備する。
- ②自分の研究テーマや専門分野に引き付けて考え、議論する。
- ③プレゼンテーションに対するフィードバックやレポートを文書にて提出することを求めることがある。提出は学習支援システムを通じて指示された方法で提出する。
- ④授業テーマに関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の目的と内容の説明、受講生の関心を共有する。
2	国際関係学とは何か	テキスト(a)を中心に学ぶ。
3	植民及び植民政策研究、地域研究から「国際関係論」へ：矢内原忠雄	テキスト(c)(d)を中心に学ぶ。
4	出発点としての「国際関係論」：川田侃	テキスト(e)を中心に学ぶ。

5	もう一つの出発点としての「国際関係論」：斉藤孝	テキスト(f)を中心に学ぶ。
6	「広義の国際関係論」：社会・文化への広がり歴史への視点	テキスト(a)(g)を中心に学ぶ。
7	中間のまとめ	ここまでの授業の内容を整理し、後半の授業につなげる。
8	国際関係学の方法論	テキスト(b)を中心に学ぶ。
9	国際関係のなかで専門分野を問い直す ①－政治・経済	テキスト(a)(b)を中心に学ぶ。
10	国際関係のなかで専門分野を問い直す ②－社会・文化	テキスト(a)(b)を中心に学ぶ。
11	「学際的国際関係論」？	テキスト(h)を中心に学ぶ。
12	国際関係学と地域研究	テキスト(b)(i)を中心に、国際関係の行為体としての「地域」、地域研究の視点と方法を学ぶ。
13	現代世界を国際関係学の方法論から分析する	テキスト(b)を中心に議論する。
14	まとめ	本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

- (a) 百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。
- (b) 百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年。
- (c) 木畑洋一「植民政策論・国際関係論」鴨下重彦他編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011年。
- (d) 今泉裕美子「矢内原忠雄の国際関係研究と植民政策研究—講義ノートを読む」『国際関係学研究』23、1996年。
- (e) 川田侃『国際関係概論』東京大学出版会、1958年。
- (f) 斉藤孝『国際関係論入門』（新版）有斐閣、1981年。
- (g) 南塚信吾他編『国際関係論基礎研究』福村出版、1976年。
- (h) 岩田一政『国際関係研究入門(増補版)』東京大学出版会、2003年。
- (i) 大島美穂他編『「国際化」する地域研究』文化書房博文社、2009年。

【参考書】

- 武者小路公秀他編『国際学-理論と展望』東京大学出版会、1976年。
 衛藤濤吉他編『国際関係論』東京大学出版会、1982年。
 フレッド・ハリディ（菊井禮次訳）『国際関係論再考』ミネルヴァ書房、1997年。
 島根國士編『国際文化学への招待』新評論、1999年。
 平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年。
 進藤藤一『現代国際関係学』有斐閣、2001年。
 『地域研究（特集：地域研究方法論）』vol.12, No.2, 2012年。
 酒井啓子編『グローバル関係学とは何か』岩波書店、2020年。
 鈴木基史他編『国際関係研究の方法』東京大学出版会、2021年。

【事典など】

- 松原正毅他編『世界民族問題事典（新訂増補版）』平凡社、2002年。
 川田侃他編『国際政治経済事典（改訂版）』東京書籍、2003年。

【成績評価の方法と基準】

【授業の進め方と方法】に基づき以下の配分で評価する。
 授業への参加度・貢献度30%、報告30%、レポートなどの提出物40%。

【学生の意見等からの気づき】

受講生から、「国際〇〇」はわかりづらい学問、なんとか「国際」と捉えてきたが、自身の関心ある具体的なテーマに引きつけながら学ぶことで、「国際〇〇」学／研究の方法論を知り、また受講生の専門分野やテーマの明確化にもなったとの意見を受け、本年度もそのような内容になるよう心掛けたい。

【学生が準備すべき機器他】

オンラインライブで授業を行う場合は、パソコンやタブレットなどの通信機器、安定的な接続、通信容量に制限がない環境を各自で準備する。

【その他の重要事項】

- ・第1回目授業に参加する受講生（本登録するか未定でも参加は可能）は、学習支援システム（Hoppii）に必ず仮登録し、第1回目授業に関する情報を確認して下さい。
- ・第2回以後の授業でも、連絡やレジュメの共有はHoppiiにて行うため、随時確認すること。
- ・やむを得ない事情で欠席する場合は事前に連絡すること。事前に連絡出来ないタイミングでやむを得ない事情が生じて欠席した場合は、事後に速やかに連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

国際文化研究科教員紹介 (https://www.hosei.ac.jp/gs/kokusaibunka/kyoin/IMAIZUMI_Yumiko/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54)、法政大学学術研究データベース (<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html>) を参照。

・およそ30年にわたって日本国内、ミクロネシアでの聞き取りを行い、沖縄県史・市史などの編さん、執筆に関わって来た。また米国議会図書館のNan'yo Collectionや琉球大学付属図書館矢内原忠雄文庫など複数の機関で、旧南洋群島関係の史料の発掘、整理、公開に関わった。「大文字の歴史」と「小文字の歴史」の関係を、史資料の発掘・分析と同時に、地域住民の経験をどう記録し、歴史として同時代で共有、次世代に継承するか、そのための聞き取りの方法、地域外の研究者として地域にいかに関わるのか、に取り組み続けている。この経験に基づく国際関係学及び地域研究の方法を紹介し、受講生とともに考えてゆきたい。

【Outline (in English)】

The aim of this course is to review the Japanese features of International Studies in institutionalization in Japanese Universities after WWII and to understand of its academic discipline. After WWII, Tokyo University inaugurated “kokusai kankei ron” as a system of education and research of international relations introducing Anglo-American International Relations (IR) with a kind of acculturation. “Kokusai kankei ron” came to prevail in postwar Japan and have its specific feature in the method. This class explore the development of the International Studies originated from colonial studies in the variety of approaches. It will lead to understanding of transformation of traditional disciplines into “International so and so.”

【Learning Objectives】

Students will be able to:

- ① Comprehend the Japanese features of International Studies in institutionalization in Japanese Universities after WWII and its academic discipline.
- ② Understand key concepts, theory, and thought of International Studies.
- ③ Comprehend International Studies based on students' research field and topics.

【Methods】

- ① Students are expected to read assigned readings and related material to be able to engage in active discussion prior to the class. Presenter should upload resume or Power Point of summary and discussion topics of assigned reading via Hoppii until 4-hour before the class. Other students should prepare for comments and questions.
- ② Students are expected to discuss the topics based on students' research field and subject.
- ③ Each student should submit presentation feedback or essay via Hoppii when they are required.
- ④ Schedule is subject to change depending on present situation both at home and abroad related the objects of the class or students' interests and understanding.

【Learning activities outside of classroom】

Based on the 【Methods】 , the standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

Participation and contribution:30%; Presentation :30 %; Essay and feedback : 40%

Students are required to take more than 60%score in total to pass.

PSY500G1 - 116 (心理学 / Psychology 500)

異文化社会論Ⅱ A

浅川 希洋志

サブタイトル：文化はどのように人の心を形成するのか

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際社会で生きるとき、私たちは様々な文化的背景を持つ人々との相互理解を通して責任のある判断と行動を期待される。ところが、異文化間理解ということを考えるとき、私たちは異文化に見られる行動様式や思想を理解することが国際社会における他者理解のすべてであると考える傾向にあるように思われる。では、心の働きは文化と関係のない普遍的なものなのだろうか。

本授業では、文化心理学や心理人類学に関わる文献（特に、河合隼雄著『日本文化のゆくえ』、東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』、恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』、斎藤環著『ひきこもり文化論』等）を読み解きながら、心の働きと文化の関連性について学んでいく。

【到達目標】

心の働きと文化の関連性、特に家庭でのしつけや学校教育が子どもたちに何を期待し、そのような期待と文化の間にどのような関連があり、そのような期待を内在化した教育システムの中で、子どもたちがどのような心の働きを身につけていくのか、を理解する。また、私たちが普段普遍的と考えている人間観、発達観、家族観、そしてそれらと深い関わりを持つ心理的機能（心の働き）がいかに特殊な文化に根ざしたものであるかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式（文献の輪読）で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もあり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第1章「『私』さがし」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第7章「異文化体験の軌跡」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	東洋『日本人のしつけと教育』第1章「意欲の構造」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	東洋『日本人のしつけと教育』第2章「役割社会と受容的勤勉性」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	東洋『日本人のしつけと教育』第3章「内在モデルとしての『いい子』」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	東洋『日本人のしつけと教育』第4章「『気持ち』への関心」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	東洋『日本人のしつけと教育』第5章「滲み込み型のしつけと教育」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	東洋『日本人のしつけと教育』第6章「道徳意識と道徳判断」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
10	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第1章「リサの疑問」、第2章「かくれたカリキュラム」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
11	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第3章「集団の中の個人」、第4章「小さな選民たち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。

- 12 恒吉僚子『人間形成の日米比較』第5章「キング先生の戦い」、第6章「内なるアメリカ、内なる日本」を読む
- 13 『ひきこもり文化論』第4章「『甘え文化』と『ひきこもり』—比較文化的考察」を読む
- 14 授業の総括 授業のまとめを行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備しておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるよう準備しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

- ①河合隼雄著『日本文化のゆくえ』（岩波書店、2000年）
- ②東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』（東京大学出版会、1994年）
- ③恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』（中公新書、1992年）
- ④斎藤環著『ひきこもり文化論』（ちくま学芸文庫、2016年）
- *テキストはできる限りPDF化し、授業支援システムにアップする。

【参考書】

必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

「評価基準」：（1）授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論（討論への参加）と（2）報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表（担当日の発表）により、下記の配分で評価する。

「配分（%）」：討論への参加（50%）＋担当日の発表（50%）

【学生の意見等からの気づき】

受講生が自身の研究を進展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれに与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ポジティブ心理学、文化心理学

<研究テーマ> （1）フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、（2）文化と心理機能の関連性について、（3）フロー経験と生理指標の関連性について。

<主要研究業績>

『フロー理論の展開』世界思想社（2003年）、「フロー経験の諸側面」島井哲志編『ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版（2006年）、「Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?» Journal of Happiness Studies（2010年）、「フロー理論にもとづく「学びたる」授業の創造」学文社（2011年）、「楽しさと最適発達の現象学—フロー理論」鹿毛雅治編『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版（2012年）、「クリエイティヴィティ」チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社（2016年）、「Universal and cultural dimensions of optimal experiences." Japanese Psychological Research（2016年）、「持続的な幸福（マーティン・セリグマン）—ポジティブ心理学と感情」『臨床心理学』（第20巻第3号）金剛出版（2020年）、「心理学者ミハイ・チクセントミハイが残したものの『心と社会』（第53巻第2号）日本精神衛生会（2022年）、「Factor Associated with Flow in Fulfilling and Enjoyable Situations in Japanese." The European Conference on Positive Psychology 2024（学会発表、2024年）、「Co-variability of Psychological Flow Intensity and Heart Rate during Startup Weekend, an Entrepreneurial Education Program." The 46th Annual Conference of the IEEE Engineering in Medicine & Biology Society（学会発表、2024年）。

【Outline (in English)】

(1) Course Outline

In this seminar, students will explore issues related to culture and psychological functioning by reading more like anecdotal books and articles, and discuss how culture shapes psychological processes of people. Each student's own experiences they have had in different cultures will be welcomed to deepen class discussions.

(2) Learning Objectives

One of the main objectives of this seminar is to understand how educational practices in a culture are intended to bring up children as culturally desired and also expected adults through the educational process of the culture.

(3) Learning Activities Outside of Classroom

Students will be expected to spend 4 hours to understand the course content (2 hours each for before/after class meeting). Besides, students will be expected to spend their daily lives having course topics in the back of their mind.

(4) Grading Criteria/Policy

Final grade will be decided based on following:

In-class contribution (50%), Class-presentation (50%).

PSY500G1 - 117 (心理学 / Psychology 500)

異文化社会論Ⅱ B

浅川 希洋志

サブタイトル：文化はどのように人の心を形成するのか

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

異文化社会論ⅡAでは文化の違いから生じる教育システムの違いやそれによって培われる心のあり方に関する文献を読み、心の働きと文化の関連について考察していくが、本授業ではそのような「文化と心」にまつわる事象を文化心理学の枠組み、つまり文化心理学における理論として捉えなおすことを主たる目的とする。授業では、北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』、リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』等をテキストとして用い、掘り下げた議論の必要なトピックスに関しては適宜、英語論文を含めた原著にあたっていく。また、授業全般を通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを考えていく。

【到達目標】

心の働きと文化の関連性を文化心理学の枠組みの中で捉えることができる。特に、Markus & Kitayama が提唱した文化的自己観のモデルに注目し、人々の持つ文化的自己観が彼らの認知、感情、モチベーションなどどのように関連しているのかが理解できること。また、授業で扱ったトピックスを通して、異文化社会における適応とはどういうことなのか理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式（文献の輪読）で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もあり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第1章「古代ギリシャ人と中国人は世界をどう捉えたか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第2章「思考の違いが生まれた社会的背景」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第3章「西洋的な自己と東洋的な自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第4章「目に映る世界のかたち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第5章「原因推測の研究から得られた証拠」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第6章「世界は名詞の集まりか、動詞の集まりか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第7章「東洋人が論理を重視してこなかった理由」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第8章「思考の本質が世界共通でないとしたら」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。

10	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第2章「自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
11	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第3章「感情」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
12	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第4章「欧米における自己高揚と日本における自己批判」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
13	ディスカッション	授業で扱った文化心理学的知見が、受講者の修士論文のテーマを発展させる上で、何らかの新しい視点を与え得るものだったかどうかを討論する。授業のまとめを行なう。
14	授業の総括	

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備しておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるよう準備しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

①北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』（共立出版、1998年）
②リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』（ダイヤモンド社、2004年）
＊テキストはできる限りPDF化し、授業支援システムにアップする。

【参考書】

増田貴彦著『ボスだけを見る欧米人みんなの顔まで見る日本人』（講談社＋a新書、2010年）。また、必要に応じて適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「評価基準」：（１）授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論（討論への参加）と（２）報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表（担当日の発表）により、下記の配分で評価する。
「配分（％）」：討論への参加（50％）＋担当日の発表（50％）

【学生の意見等からの気づき】

受講生が自身の研究を発展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれに与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ポジティブ心理学、文化心理学

<研究テーマ> （１）フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、（２）文化と心理機能の関連性について、（３）フロー経験と生理指標の関連性について。

<主要研究業績>

『フロー理論の展開』世界思想社（2003年）、「フロー経験の諸側面」島井哲志編『ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版（2006年）、“Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?” Journal of Happiness Studies (2010年)、「フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造」学文社（2011年）、「楽しさと最適発達現象学—フロー理論」鹿毛雅治編『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版（2012年）、『クリエイティビティ』チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社（2016年）、「Universal and cultural dimensions of optimal experiences.” Japanese Psychological Research (2016年)、「持続的な幸福（マーティン・セリグマン）—ポジティブ心理学と感情」『臨床心理学』（第20巻第3号）金剛出版（2020年）、「心理学者ミハイ・チクセントミハイが残したもの」『心と社会』（第53巻第2号）日本精神衛生会（2022年）、「Factor Associated with Flow in Fulfilling and Enjoyable Situations in Japanese.” The European Conference on Positive Psychology 2024（学会発表、2024年）、「Co-variability of Psychological Flow Intensity and Heart Rate during Startup Weekend, an Entrepreneurial Education Program.” The 46th Annual Conference of the IEEE Engineering in Medicine & Biology Society（学会発表、2024年）。

【Outline (in English)】

(1) Course Outline

This seminar will read theory-oriented books and articles in cultural psychology and try to understand relevant issues with a theoretical framework of cultural psychology. Main topics of this seminar will be on how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships. In addition, what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies will be argued throughout the course.

(2) Learning Objectives

By the end of the course, students are expected to understand (a) how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships, and (b) what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies.

(3) Learning Activities Outside of Classroom

Students will be expected to spend 4 hours to understand the course content (2 hours each for before/after class meeting). Besides, students will be expected to spend their daily lives having course topics in the back of their mind.

(4) Grading Criteria/Policy

Final grade will be decided based on following:

In-class contribution (50%), Class-presentation (50%).

CUA500G1 - 203 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

マイノリティ社会論A

張 勝蘭

サブタイトル：日本とイギリスにおける中国系移民の教育とアイデンティティ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、日本とイギリスにおける中国系移民集団の変遷を辿りながら、トランスカルチュラルイズム概念に基づく移民研究について考察し、ホスト社会での共生の可能性と課題を検討する。

【到達目標】

中国系移民を事例に、マイノリティとしてそのコミュニティと文化の変遷、特に定着後のアイデンティティの形成と変容に関する知見を獲得し、多文化共生について深く考えることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

グローバル化した移民現象は、個人が主体となって国境を越えて移動するという特徴を持つ。移民たちはホスト社会でどのように定着し、社会全体にどのような影響をもたらしているのか。本授業では、四大移民の一つである中国系移民（華僑）について、日本とイギリスにおける移住プロセス、コミュニティの形成、ホスト社会との関係、アイデンティティの変容を取り上げる。特に第二世代以降の教育に焦点を当て、それによる言語やアイデンティティの継承と変容を考察する。具体的には選定したテキストを講読し、議論を行う形で授業を進めていく。課題へのフィードバックは授業内、学習支援システム及びメールにて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業のアウトラインと進め方について説明する、受講者の自己紹介（研究テーマ、この授業を選んだ理由など）、教材の配布（分担を決める）
第2回	講義1	移民研究、エスニシティ、トランスカルチュラルイズムについて講義する。
第3回	講義2	日本への移住過程について説明してから関連映像を視聴し、討論を行う。
第4回	講読と討論1-1	中華学校における歴史的変遷に関する文献を講読し、多文化教育について議論を行う。
第5回	講読と討論1-2	日本の華僑社会と中華学校教育の変容に関する文献を講読し、議論を行う。
第6回	講読と討論1-3	中華民国系の東京中華学校と横浜中華学院に関する文献を講読し、議論を行う。
第7回	講読と討論1-4	中華人民共和国系の横浜山手中華学校、神戸中華同文学校に関する文献を講読し、議論を行う。
第8回	関連映像鑑賞と討論	神戸、横浜、東京の中華学校の関連映像を視聴し、日本の華僑学校について議論を行う。

第9回 講義3

前半を振り返り、文化境界とアイデンティティについて講義する。

第10回 講読と討論2-1

イギリスへの移住過程、学校教育の展開について文献を読み、討論する。

第11回 講読と討論2-2

コミュニティ、家庭、補習校などの側面から教育の現状を論じる文献を講読し、議論を行う。

第12回 講読と討論2-3

第二世代の立場から彼らのアイデンティティの形成を考察する文献を講読し、議論を行う。

第13回 講読と討論2-4

教育とアイデンティティの形成にフォーカスした文献を読み、討論する。

第14回 まとめと考察

日本とイギリスにおける中国系移民の文化とアイデンティティの変遷を比較し、全体を振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。具体的な文献リストなどは初回の授業で説明する。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テーマごとにテキストを配布する。

【参考書】

白璐、柳本雄次「日本の中華学校における歴史的変遷からみた多文化教育の展開とその要因：横浜山手中華学校を中心に」『東京福祉大学・大学院紀要』10(1・2) p.121-131、2020年
 陳天璽「長崎から横浜へ・横浜中華街の変貌：広東系老華僑から福建系新華僑へ（特集 華僑華人：グローバルとローカルのダイナミズム）」『多文化社会研究』4 p.193-216、2018年
 陳天璽「虹のメタファー」から多文化共生を再考する：移動する華人やチャイナタウンを事例として（特集 東アジアにおける人の移動と多文化共生）」『21世紀東アジア社会学』(7) p.50-61、2015年
 石川朝子「日本の華僑社会と中華学校教育の変容：華僑教育から華文教育へ」『帝京大学宇都宮キャンパス研究年報、人文編』(21) p.23-50、2015年
 S.カースルズ/M. J. ミラー（関根正美・関根薫監訳）『国際移民の時代【第4版】』名古屋大学出版会、2011年（1993年）
 張建国「東京中華学校の現状から日本の教育の明日を考える」（特集 華人とは誰か：教育とアイデンティティ）日本華僑華人学会編『華僑華人研究』((8)p.49-54、2011年
 潘民生「横浜山手中華学校の過去、現在、未来」『華僑華人研究』((8)p.55-61、2011年
 李慈満「百年の華僑学校の見証」『華僑華人研究』((8)p.62-70、2011年
 陳來幸「神戸中華同文学校にみる多文化共生とアイデンティティ」『華僑華人研究』((8)p.71-74、2011年
 杉村美紀「変容する中華学校と国際化時代の人材育成」『華僑華人研究』((8)p.75-77、2011年
 山本須美子『文化境界とアイデンティティーロンドンの中国系第二世代』九州大学出版会、2002年
 裘曉蘭『多文化社会と華僑・華人教育 - 多文化教育に向けての再構築と課題』青山ライフ出版、2012年
 朱慧玲『華僑社会の変貌とその将来』日本僑報社、1999年
 江淵一公編『トランスカルチュラルイズムの研究』明石書店、1998年
 また授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加度：70%、期末レポート：30%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

発言しやすい雰囲気づくりに努めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域研究（中国南部の少数民族地域）、文化人類学、歴史学

＜研究テーマ＞中国少数民族の歴史・社会・文化、アイデンティティの変遷、少数民族社会と漢族（華人）社会との関係、苗（ミャオ・Hmong）族研究

＜主要研究業績＞

「『改装』政令にみる苗族服飾の変遷と苗族アイデンティティ—清朝期及び民国期の貴州省を中心に—」『21世紀アジア学研究』第20号（国土舘大学21世紀アジア学会）2021年

「土司統治の変遷から見る高坡苗族の伝統文化—中曹長官司長官謝氏を中心に—」工藤元男教授退休記念論集編集委員会編『中国古代の法・政・俗』汲古書院、2019年

「貴州高坡苗族「敲牛祭祖」について—高坡郷一帯を中心に—」『WASEDA RILAS JOURNAL』NO.6、（早稲田大学総合人文科学研究センター）2018年、など。

【Outline (in English)】

【Course Outline】

This course deals with education and ethnic identity of Chinese migrant in Japan and the United Kingdom.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students are expected to (1) obtain basic knowledge about the relationship between education and ethnic identity of Chinese migrant in Japan and the United Kingdom, (2) enhance the basic concept of transculturalism.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, participants will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text and prepared a resume. Your required study time is two hours for each class meeting. Your study time will be two hours.

【Grading Criteria/Policy】

Final grade will be calculated according to the following process: in-class contribution (70 %) and term-end report (30 %).

CUA500G1 - 204 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

マイノリティ社会論B

張 勝蘭

サブタイトル：北アメリカの先住民・難民と中国の少数民族

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

北アメリカと中国の事例を通して、国民国家の構築と先住民、少数民族、難民の問題について検討し、エスニック・マイノリティの文化とそのアイデンティティの変遷に関する理解を深めていく。

【到達目標】

現代世界における先住民・少数民族及び難民問題に関する知見を広げ、異文化理解・多文化共生について多角的な視点から考察する姿勢を養うことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

17世紀以降のヨーロッパにおいて国民国家が誕生し、世界中に広がっていくなか、絶対数や政治力・軍事力の上で支配的な民族が、自民族を中心とした国家を作り上げたケースが多くあった。マイノリティの位置にある少数民族、先住民そして難民たちにとって、国家の中でマジョリティとどのような距離をとるべきか、差別や偏見にさらされながら、如何に自らの伝統文化とアイデンティティを維持するか、が深刻な問題である。本授業は、北米（アメリカ、カナダ）の先住民、難民及び中国の少数民族を事例に、マイノリティの伝統文化とアイデンティティの維持・変遷及びその課題について考察する。課題へのフィードバックは授業内、学習支援システム及びメールにて行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業のアウトラインと進め方について説明する、受講者の自己紹介（研究テーマ、この授業を選んだ理由など）、教材の配布（分担を決める）
第2回	講義1	民族・エスニック集団・エスニシティについて講義する。
第3回	講義2	北アメリカの先住民・難民（主にHmong）と中国の少数民族の現状と課題について概観する。
第4回	政治・経済に関する講読と討論①	アメリカのモン難民を取り上げ、モン族出身の女性議員の誕生など関連文献を講読し、議論を行う。
第5回	政治・経済に関する講読と討論②	中国のオロチョン族の定住と社会変容に関する文献を講読し、議論を行う。
第6回	文化に関する講読と討論①	アメリカのプエブロ族の文化継承戦略に関する文献を講読し、議論を行う。
第7回	文化に関する講読と討論②	台湾のプユマ族の伝統文化とエスニック・アイデンティティに関する文献を講読し、議論を行う。
第8回	言語教育に関する講読と討論①	カナダの先住民デネーの教育に関する文献を講読し、議論を行う。

第9回	言語教育に関する講読と討論②	中国の少数民族（チベット族・モンゴル族・イ族）の三言語教育の現状に関する文献を講読し、議論を行う。
第10回	観光化と先住民に関する講読と討論①	観光開発と先住民について、世界の事例をいくつか読み、討論する。
第11回	観光化と先住民に関する講読と討論②	中国の西南地域におけるエスニック・ツーリズムに関する文献を講読し、議論を行う。
第12回	精神世界に関する講読と討論①	アメリカの先住民ナバホの伝統的な生活様式などを通して、その精神世界を読み解き、議論を行う。
第13回	精神世界に関する講読と討論②	中国の少数民族ミャオ族の祖先祭祀—鼓社節に関する文献を講読し、討論する。
第14回	まとめと議論	北アメリカの先住民・難民と中国の少数民族における伝統文化とアイデンティティを比較し、全体を振り返り、議論を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。具体的な文献リストなどは初回の授業で説明する。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テーマごとにテキストを配布する

【参考書】

新保敦子・阿古智子『勃興する「民」』（『超大国・中国のゆくえ』（5）（天児慧編『超大国・中国のゆくえ』（全5巻）東京大学出版会、2016年
吉川太恵子『ディアスポラの民—時空を超える絆』めこん、2013年
鈴木正崇『ミャオ族の歴史と文化の動態—中国南部山地民の想像力の変容』風響社、2012年
綾部恒雄編『世界の先住民：ファースト・ピープルズの現在 10失われる文化・失われるアイデンティティ』明石書店、2007年
富田虎男、スチュアートヘンリ編『世界の先住民：ファースト・ピープルズの現在 07北米』明石書店、2005年
末成道男、曾士才編『世界の先住民：ファースト・ピープルズの現在 01東アジア』明石書店、2005年
初瀬龍平『エスニシティと多文化主義』同文館出版、1996年
青柳こまち編・監訳『「エスニック」とは何か—エスニシティ基本論文選』新泉社、1996年
綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂、1993年
綾部恒雄編『アメリカの民族：ルツボからサラダボウルへ』弘文堂、1992年

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加度：70%、期末レポート：30%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

発言しやすい雰囲気づくりに努めたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞地域研究（中国南部の少数民族地域）、文化人類学、歴史学
＜研究テーマ＞中国少数民族の歴史・社会・文化、アイデンティティの変遷、少数民族社会と漢族（華人）社会との関係、苗（ミャオ・Hmong）族研究
＜主要研究業績＞
「[改裝] 政令にみる苗族服飾の変遷と苗族アイデンティティ—清朝期及び民国期の貴州省を中心に—」『21世紀アジア学研究』第20号（国士舘大学21世紀アジア学会）2021年
「土司統治の変遷から見る高坡苗族の伝統文化—中曹長官司長官謝氏を中心に—」工藤元男教授退休記念論集編集委員会編『中国古代の法・政・俗』汲古書院、2019年
「貴州高坡苗族「敲牛祭祖」について—高坡郷一帯を中心に—」『WASEDA RILAS JOURNAL』NO.6、（早稲田大学総合人文科学研究センター）2018年、など。

【Outline (in English)】

(Course Outline)

This course deals with the basic concepts of nation-state and ethnic minority. It also deals with the relationship between culture and identity of ethnic groups, indigenous people, refugees in the United States, Canada, Mainland China and Taiwan.

(Learning Objectives)

At the end of the course, students are expected to (1) obtain basic knowledge about ethnic groups, indigenous people, refugees of North America and China, (2) enhance the concept of cross-cultural understanding and multicultural coexistence.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, participants will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text and prepared a resume. Your required study time is two hours for each class meeting. Your study time will be two hours.

(Grading Criteria/Policy)

Final grade will be calculated according to the following process: in-class contribution (70 %) and term-end report (30 %).

GDR500G1-205 (ジェンダー / Gender 500)

ジェンダー論

佐々木 一恵

サブタイトル：ジェンダー史の展開

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ジェンダーの視点から歴史を捉えていきます。これまでのジェンダー史の取り組みや成果をたどるとともに、方法論としてのジェンダー史学について考察していきます。そこから、国際文化学におけるジェンダー史の研究論文を書いていけるようになることを目指します。今年度はジェフリー・ウィークスの『セクシュアリティの歴史』を読み、セクシュアリティを多様な視点から議論していきます。

【到達目標】

1. ジェンダー史の視点や方法論について基礎的な理解ができるようになること。
2. ジェンダー史の視点や方法論を、自分自身の研究に応用できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の前半では、文献の概要を発表者がレジュメに沿って説明します。適宜、教員が補足説明を行います。授業の後半では、各自がGoogle Classroomにアップロードしたコメントをベースにディスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要に関する説明 *できれば、ウィークス『セクシュアリティの歴史』イントロダクションに目を通してきてください。
第2回	・性の歴史を組み立てる	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第1章 ・批判的な性の歴史に向けて ・理論的迂回路 ・身体 ・主観性と情動 ・世代 ・現在の時間、過去の時間、未来の時間
第3回	・性の歴史の発明	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第2章 ・言葉の魔力 ・セクシュアリティの自然史 ・新しい歴史学 ・社会構築主義の登場
第4回	・同棲関係の歴史を問い直し、クィア化する1	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第3章 ・同性愛の歴史とは ・レズビアン、ゲイの、過去と歴史的現在を回復する ・同性愛者を脱構築し、再構築する

第5回	・同棲関係の歴史を問い直し、クィア化する2	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第3章 ・クィアの挑戦 ・二元論を超えて ・つながりをつくる
第6回	・ジェンダー、セクシュアリティ、権力1	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第4章 ・危険と快楽 ・性暴力と性の歴史 ・女性のセクシュアリティを歴史化する ・セクシュアリティと理論戦争
第7回	・ジェンダー、セクシュアリティ、権力2	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第4章 ・権力を再考する ・交差性 ・男性であること、男性性、男性について
第8回	・性の歴史の主流化1	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第5章 ・メインストリームへ ・現代的な性の誕生？ ・異性愛の正常化
第9回	・性の歴史の主流化2	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第5章 ・大転換 ・エイズと歴史に課せられた重荷 ・同性婚と新しい様式の親密性
第10回	・性の歴史のグローバル化1	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第6章 ・性の歴史をグローバル化する ・歴史化とトランスナショナルな性の歴史 ・性の歴史のパタン
第11回	・性の歴史のグローバル化2	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第6章 ・植民地の遺産とポストコロニアル批判 ・性のレジーム、性生活 ・歴史と人間の性の権利
第12回	・記憶、コミュニティ、声1	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第7章 ・非公式の知識、そして対抗の歴史学 ・記憶のコミュニティ
第13回	・記憶、コミュニティ、声2	【テキスト】 ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティの歴史』第7章 ・性のアーカイヴ ・声 ・性の歴史を生きる
第14回	・ジェフリー・ウィークスの理論的変容	【テキスト】 赤川学「構築された性から構築する性へ」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめてGoogle Classroomに授業が始まる1時間前までにアップロードしてください。
- ・文献の発表者はレジュメを作成してください。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

○ジェフリー・ウィークス（赤川学監訳）『セクシュアリティの歴史』（ちくま学芸文庫、2024年）。（＊各自、購入するようにしてください。定価1,400円＋税）

=====

出版社による本書の概要説明

性の歴史とは何か。それはいかにして書かれ、何について語ってきたか。19世紀から現在までの展開を簡潔に記した、第一人者による画期的概説書。時代や地域、身体や感情、言説といった諸要素により形作られる性の、単一かつ普遍的な歴史は存在しない。本書では同性愛／異性愛、クィア、ジェンダー、国家、グローバル化等のテーマを取り上げ、性の歴史がフェミニズム、レズビアン・ゲイ運動や、社会学、文学、哲学等の諸理論により問い直される道程を示した。アーカイヴといったコミュニティの歴史実践にも焦点をあて、複雑で多様な仕方では性が形成される様を示す「批判的な性の歴史」をここに開く。

【参考書】

授業の中で紹介していきます。

【成績評価の方法と基準】

・授業への貢献度・参加度（50％）、提出課題（50％）

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

アメリカ合衆国史 思想史 ジェンダー

＜研究テーマ＞

・アメリカ革新主義思想の宗教・ジェンダー・セクシュアリティからの再考

・20世紀転換期アメリカにおける個人主義・リベラリズム・資本主義に抗する信仰運動としての米国聖公会のアングロ・カトリシズム

＜主要研究業績＞

○『「神に奉献した生」とプロテスタントの女性主体—19世紀後半のアメリカにおける聖マリア修女会の実践から—』『異文化』24号、2023年。

○「善き生の回復を求めて—ラルフ・アダムズ・クラムの教会建築論に見る革新主義期アメリカに抗するアングロ・カトリシズムの想像力（イマジェリー）」『年報アメリカ研究』第56号、2022年。

○「プロテスタンティズムの倫理と革新主義期アメリカの精神—アングロ・カトリシズムの視点から見る生政治—」『異文化』23号、2022年。

○「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動——生と活動の様式としてのアングロ・カトリシズム」『ジェンダー史学』16号、2020年。

○『「第三者」性のポリティクス—19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編—』『アメリカ史研究』42号、2019年。

○「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー—女子教育とジャンヌ＝ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イベロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリー—ナショナルを超えて』上智大学出版社、2018年。

○Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).

○“Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” The Japanese Journal of American Studies (no.23, 2012).

【Outline (in English)】

The course introduces an overview of the standpoints and methodologies of gender history so that students can develop the ability to examine issues of gender cross-culturally and inter- racially.

By the end of the course, students are expected to be able to: 1) acquire a basic understanding of the perspectives and methodologies of gender history and 2) use the perspectives and methodologies of gender history to their own research.

Students will be expected to read assigned materials and upload one-page summary of the assigned text and the points of to Google Classroom before class begins. Presenters of assigned materials should prepare presentations in PowerPoint format.

The final grade will be decided by contribution to class discussion (30%) and presentation (70%).

ARSa500G1 - 206 (地域研究 (ヨーロッパ) / Area studies(Europe) 500)

多言語社会論 A

大中 一彌

サブタイトル：青の政治学 I ～現代ヨーロッパの基礎研究～

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

・この科目「多言語社会論 A」では、色彩と文化のつながりについて考えます。

・とりあげる事例は、主にヨーロッパ史のさまざまな局面で《青》という色彩がもつ意義です。

・本研究科の特色である、学際的なアプローチにもとづき、この事例に近づいていきます。

・なお、この科目「多言語社会論 A」には、作品を鑑賞する時間帯も含まれています。

・2024年度には、授業時間内に、都内の美術館を見学しました。

・ヨーロッパ地域の文化に詳しくない人も、研究のうえでの刺激やヒントを得られるよう心がけています。

・この授業を紹介する動画 (約6秒) をご覧ください https://youtube.com/shorts/3UOSE5N_uD0

【到達目標】

コースの終わりまでに、参加者の皆さんは次のことができるようになるでしょう：

- 1) 「青」のような色彩の認識を、ただ自然の特徴を映し出す視覚の問題としてだけ考えるのではなく、色を分類し表現する言葉をもった人類の文化や社会に由来する現象として考えることができる。
- 2) 文章や画像、映像など、人間が創り出す表現を検討する際に、単に表現を感覚的に捉えるだけでなく、そうした表現に影響をおよぼす政治・経済的な条件について想像をめぐらせることができる。
- 3) 検討する時代や、社会階級が異なれば、ヨーロッパ地域における「青」のような、ひとつの文化要素についても、それがもつ意味合いに、さまざまな違いやニュアンス、価値の逆転などが生じるという前提に立って、研究上の問い (リサーチ・クエスチョン) を練り上げることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

- (ア) この科目は基本的に「対面」です。
- (イ) 体調不良などの理由により、リアルタイム・オンラインやオンデマンド (録画) の形で授業に参加する場合、柔軟に対応します。
- (ウ) 学生の皆さんの都合や関心によりますが、美術展などを学外で見学する可能性があります。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり /Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】
あり /Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	はじめまして！	シラバスの説明や自己紹介、美術館見学に興味があるかどうか、など
2	色を言葉でどう表現するか	鳥々が連なる青いエーゲ海は絶景というほかない。しかし、西洋文明の源流に位置づけられ、古代ギリシアを代表するとされる、詩人ホメロスがエーゲ海を描くとき、「青」という言葉は使われなかった。目の前に青い海が思いっきり広がっていたはずなのに…なぜ？

3	色彩語によるスペクトルの分割	人間は経験を言葉で表現する。色彩の分類は言語や文化ごとに異なるのか、それとも言語や文化の垣根を超えて、色彩にかんする人類共通の分類がありうるのか？
4	光の波長と、ヒトが知覚する色は (ある程度) 対応する。	ニュートンはプリズムを使った分光実験により、スペクトルを赤、橙 (だいだい)、黄、緑、青、藍 (あい)、堇 (すみれ) の7色に分けた。だがなぜ7色？
5	陰翳 (いんえい) のなかでほのかに浮かび上がる色彩	ゲーテが色彩論の冒頭で扱うのは、薄明りのなかで残像として立ち現れる、想像的・空想的な色彩だ。暗い北方のドイツから見た、アルプスの彼方の鮮やかな色彩？
6	ブルーは寒色ではないのか	映画化もされたジュリー・マロのバンド・デシネ『ブルーは熱い色』。ゲーテの色彩論では青は寒色に分類されるが、『青の歴史』を書いた歴史家パストゥローは逆のゲーテ解釈を示す。思春期の女性の同性に対する愛を繊細に描くマロの作品内容と関係は？
7	古代から中世にかけての青	古代エジプト人は人類初の合成顔料となるエジプト青を開発。ケルト人やゲルマン人は身体を青く染めたとされる。ローマ人は？
8	青く染めることの政治経済学	諸説あるが、ケルト人やゲルマン人が身体を青く染めるのに使ったのは、ホソバタイセイといわれる。タイセイ産業は中世～近世、フランス南西部に繁栄をもたしたが、インド藍 (インディゴ) の普及により壊滅。イギリス植民地においてインディゴ産業が発展する。
9	色は光なのか？ — 青と信仰 —	シャルトルの青に代表され、中世に花開いたステンドグラス芸術。だが人間の技巧が作り出す多彩な色は、ほんとうの神の光なのか？ 「黒いマリア」信仰や、2019年の火災以降のノートルダム寺院をめぐる現状にも触れる。
10	王権と青	12世紀末以降、カペー王家は「青地に金色のユリの花の散らし模様」の紋章を使うようになった。王冠や王笏、戴冠式の衣装、ルイ14世が購入したブルー・ダイヤモンドについても触れる。
11	中間ふりかえり	作品鑑賞
12	色彩と社会的排除①	中世ヨーロッパにおける芸人、娼婦、ユダヤ人の服装と多色嫌悪 [クロモフォビア]
13	色彩と社会的排除②	中世ヨーロッパのキリスト教社会において罪は暗い色をしていたのか
14	まとめ	第13回までの内容がこなせなかった場合には予備日

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

日本語やその他の言語の習熟度が異なる多様な学生が、このセミナーに参加します。そのため、一律の時間の長さは定めません。しかし、大学設置基準によれば、2単位の講義及び演習の準備・復習時間は1回につき4時間以上とされています。

【テキスト (教科書)】

教科書を購入する必要はありません。

【参考書】

下記【その他の重要事項】にあるリンク先をご覧ください。

【成績評価の方法と基準】

1. 授業への毎週の参加（平常点）50%（※1）
2. 授業中における発言や、掲示板等への書き込み 50%（※2）
3. 【希望者のみ】この授業に関連する作品の鑑賞や話題提供など（※3）

（※1）この科目「多言語社会論」は対面の授業とカリキュラム上位置づけられています。そのため、教室で授業に出席することが基本となりますが、1学期14回のうち、7回まではZoomでのリアルタイム・オンラインによる授業参加をすることができます。Zoomで参加する場合は、Zoomで参加する授業回ごとに、事前に担当教員までメールで連絡をください。ただし、Zoomで参加する場合、対面授業（教室）において共有されている資料を共有できない場合があります。

（※2）項目2.は、授業内容に対する学生さんひとりひとりの反応を主に念頭においています。

（※3）項目3.は、100%の枠外で5～20%程度の加点をします。学外の美術展を訪問し、その内容についてこの科目「多言語社会論」で運用しているGoogle ClassroomやHoppiiに、学生さんひとりひとりが投稿する場合を主に想定しています。また、その学生さんにとって第1言語（その人が受けてきた学校教育で最も長い期間使ってきた言語）ではない言語を参照した場合、基本的に加点します。

【学生の意見等からの気づき】

- ・ヨーロッパ地域のさまざまな文化をめぐる学びは、必要そうではあるけれど、わかりづらそうで敬遠したくなるという方もいるようです。
- ・この多言語社会論Aは、「青」という、多くの人が知る色を軸とした組み立てとすることにより参加のハードルを下げ、そうした方が、必要な学びにアクセスできる場となることを目指しています。
- ・致所有中国留学生：我日用日了解欧洲文化（谷歌翻）

【学生が準備すべき機器他】

スマートフォンやタブレット、ノートパソコンのような情報端末が必要です。なお、市販されている映像作品の公衆送信は行いません。

【その他の重要事項】

- ・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
- ・留学や進学、就職などの相談もOKです。
- ・問い合わせ先や、取り上げる作品、参考文献についての詳しいことは、次のリンク先をご覧ください。<https://x.gd/YxvxA>

【担当教員の専門分野等】

- < 専門領域 > 政治学、政治思想
- < 研究テーマ > 言語や文化のはざまにいる人たちや、そうした人たちがどのように主体になっていくのかについて関心があります。
- < 主要研究業績 > 法政大学学術研究データベースをご覧ください。
<https://x.gd/BbudE>

【Outline (in English)】

【Course Outline】

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

【Learning Objectives】

- 1) By taking this course, students, including those who have not necessarily studied modern Europe in a specialized way, will acquire the knowledge necessary to conduct independent research at the graduate level.
- 2) Textbook readings will provide students with a basic knowledge of French history and culture.
- 3) Students will watch video clips in class to help them relate historical knowledge from the textbook readings to contemporary political, social, and cultural topics in Europe.

【Learning activities outside of classroom】

- (a) Read the textbook assigned each session.
- (b) Post a link and a text for your topic in the classroom on the designated LMS (Learning Support System - Hoppii or Google Classroom) before each session.

(c) The study time required for preparation and review for this course will be the time required to do (a) and (b) above. Since this course is taken by students with different levels of proficiency in Japanese and other languages, a uniform length of time will not be indicated. However, according to the Standards for the Establishment of Universities, the preparation and review time for a two-credit lecture or seminar should be at least four hours per session.

【Grading Criteria/Policy】

1. Class participation 50%
2. Remarks and questions in class 50%
3. [For those who wish to do so] Presentation of a topic involving preparation outside of class (*)
4. Contribution to class management (*)

(*) Items 3. and 4. will be added as an extra 10% outside of the total of items 1. and 2. for each topic or contribution.

ARSa500G1 - 207 (地域研究 (ヨーロッパ) / Area studies(Europe) 500)

多言語社会論 B

大中 一彌

サブタイトル：青の政治学Ⅱ ～現代ヨーロッパの基礎研究～

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・この科目「多言語社会論B」では、色彩と文化のつながりについて考えます。

・とりあげる事例は、主にヨーロッパ史のさまざまな局面で《青》という色彩がもつ意義です。

・本研究科の特色である、学際的なアプローチにもとづき、この事例に近づいていきます。

・なお、この科目「多言語社会論B」には、作品を鑑賞する時間帯も含まれています。

・2024年度には、「多言語社会論A」の授業時間内に、都内の美術館を見学しました。

・ヨーロッパ地域の文化に詳しくない人も、研究のうえでの刺激やヒントを得られるよう心がけています。

・この授業を紹介する動画（約6秒）をご覧ください <https://youtube.com/shorts/r3tgZKGFHAM>

【到達目標】

コースの終わりまでに、参加者の皆さんは次のことができるようになるでしょう：

- 1)「青」のような色彩の認識を、ただ自然の特徴を映し出す視覚の問題としてだけ考えるのではなく、色を分類し表現する言葉をもった人類の文化や社会に由来する現象として考えることができる。
- 2) 文章や画像、映像など、人間が創り出す表現を検討する際に、単に表現を感覚的に捉えるだけでなく、そうした表現に影響をおよぼす政治・経済的な条件について想像をめぐらせることができる。
- 3) 検討する時代や、社会階級が異なれば、ヨーロッパ地域における「青」のような、ひとつの文化要素についても、それがもつ意味合いに、さまざまな違いやニュアンス、価値の逆転などが生じるという前提に立って、研究上の問い（リサーチ・クエスチョン）を練り上げることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

（ア）この科目は基本的に「対面」です。ただし、参加者の皆さんの個別の事情や状況により、Zoomを使った参加を積極的に認めています。

（イ）毎回、教員から授業内容の説明があり、これに対し、学生から質問や意見を出す時間帯があります。

（ウ）【希望者のみ】ひとりひとりの参加者が今関心をもっていることについて、話題提供した場合、加点をいたします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめまして！	シラバスの説明や自己紹介、美術館見学に興味があるかどうか、など
第2回	サマルカンドの青	ドームを建築する文化を中央アジアとヨーロッパは共有しています。ウズベキスタン、なかでもサマルカンドは、寺院や廟にあざやかな青をもちいた装飾が多いことで世界的に有名です。

第3回	ヴェネツィア：商人貴族たちがまとう黒服とアラブ・イスラム世界	14世紀まで、最高級の布は黒ではなく、赤、青、紫の染料で染められていた。しかし、高品質の黒染料が登場し、色彩に富む衣服は貴族のみに限る法律（奢侈禁止法）が施行されたことで、イタリアの裕福な銀行家たちは、重要性の証として黒い服を着るようになった。
第4回	「満ちたりし時」と豪華さの嫌悪	16世紀初頭、ローマにおける盛期ルネサンスと、北方ヨーロッパにおける宗教改革が相次いで発生します。色彩への見方に、これらの出来事はどうかわるのでしょうか。
第5回	17世紀：カメラ・オブスカラとラピス・ラズリ	小説や映画でとりあげられて有名な画家フェルメール。しかし残された作品は謎めいており、さまざまな解釈をすることができます。
第6回	18世紀：プルシアン・ブルーと江戸時代の日本	葛飾北斎《富嶽三十六景》中の《神奈川沖浪裏》をとりあげます。太平洋の波に翻弄される船と、遠景にどっしりと安定した富士山。青が印象的な絵ですが、この青は「日本の浮世絵に独特の神秘的な青」なのでしょうか？
第7回	中間ふりかえり①	作品鑑賞
第8回	ドイツ・ロマン派の夢と青	カスパー・ダーヴィット・フリードリヒの風景画と後ろ姿の人物たち
第9回	革命とナショナリズム	革命とナショナリズム共和主義（青）とその敵たち（白、赤）
第10回	マネの青	～表層の美しさと「スキャンダル」～
第11回	グローバル化する青①	～「デニム」とは何か～
第12回	中間ふりかえり②	作品鑑賞
第13回	グローバル化する青②	～ドガからクラインへ～
第14回	音楽と色	まとめ。シラバス第13回までの内容がこなせなかった場合には予備日

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本語やその他の言語の習熟度が異なる多様な学生が、このセミナーに参加します。そのため、一律の時間の長さは定めません。しかし、大学設置基準によれば、2単位の講義及び演習の準備・復習時間は1回につき4時間以上とされています。

【テキスト（教科書）】

教科書を購入する必要はありません。

【参考書】

下記【その他の重要事項】にあるリンク先をご覧ください。

【成績評価の方法と基準】

1. 授業への毎週の参加（平常点）50%（※1）
 2. 授業中における発言や、掲示板等への書き込み 50%（※2）
 3. 【希望者のみ】この授業に関連する作品の鑑賞や話題提供など（※3）
- （※1）この科目「多言語社会論」は対面の授業とカリキュラム上位置づけられています。そのため、教室で授業に出席することが基本となりますが、1学期14回のうち、7回まではZoomでのリアルタイム・オンラインによる授業参加をすることができます。Zoomで参加する場合は、Zoomで参加する授業回ごとに、事前に担当教員までメールで連絡をください。ただし、Zoomで参加する場合、対面授業（教室）において共有されている資料を共有できない場合があります。
- （※2）項目2は、授業内容に対する学生さんひとりひとりの反応を主に念頭においています。

(※3) 項目3は、100%の枠外で5～20%程度の加点をします。学外の美術展を訪問し、その内容についてこの科目「多言語社会論」で運用しているGoogle ClassroomやHoppiiに、学生さんひとりひとりが投稿する場合を主に想定しています。また、その学生さんにとって第1言語（その人が受けてきた学校教育で最も長い期間使ってきた言語）ではない言語を参照した場合、基本的に加点します。

【学生の意見等からの気づき】

- ・ヨーロッパ地域のさまざまな文化をめぐる学びは、必要そうではあるけれど、わかりづらそうで敬遠したくなるという方もいるようです。
- ・この多言語社会論Bは、「青」という、多くの人が知る色を軸とした組み立てとすることにより参加のハードルを下げ、そうした方が、必要な学びにアクセスできる場となることを目指しています。
- ・致所有中国留学生：我日用日了解欧洲文化（谷歌翻）

【学生が準備すべき機器他】

スマートフォンやタブレット、ノートパソコンのような情報端末が必要です。なお、市販されている映像作品の公衆送信は行いません。

【その他の重要事項】

- ・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
- ・留学や進学、就職などの相談もOKです。
- ・問い合わせ先や、取り上げる予定の映像作品、参考書については、次のリンク先をご覧ください。<https://x.gd/bC0dV>

【担当教員の専門分野等】

- < 専門領域 > 政治学、政治思想
- < 研究テーマ > 言語や文化のはざまにいる人たちや、そうした人たちがどのように主体になっていくのかについて関心があります。
- < 主要研究業績 > 法政大学学術研究データベースをご覧ください。
<https://x.gd/BbudE>

【Outline (in English)】

[Course Outline]

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

[Learning Objectives]

- 1) By taking this course, students, including those who have not necessarily studied modern Europe in a specialized way, will acquire the knowledge necessary to conduct independent research at the graduate level.
- 2) Textbook readings will provide students with a basic knowledge of French history and culture.
- 3) Students will watch video clips in class to help them relate historical knowledge from the textbook readings to contemporary political, social, and cultural topics in Europe.

[Learning activities outside of classroom]

- (a) Read the textbook assigned each session.
- (b) Post a link and a text for your topic in the classroom on the designated LMS (Learning Support System - Hoppii or Google Classroom) before each session.
- (c) The study time required for preparation and review for this course will be the time required to do (a) and (b) above. Since this course is taken by students with different levels of proficiency in Japanese and other languages, a uniform length of time will not be indicated. However, according to the Standards for the Establishment of Universities, the preparation and review time for a two-credit lecture or seminar should be at least four hours per session.

[Grading Criteria/Policy]

1. Class participation 50%
 2. Remarks and questions in class 50%
 3. [For those who wish to do so] Presentation of a topic involving preparation outside of class (*)
 4. Contribution to class management (*)
- (*) Items 3. and 4. will be added as an extra 10% outside of the total of items 1. and 2. for each topic or contribution.

HIS500G1 - 210 (史学 / History 500)

多民族共生論Ⅱ A

高柳 俊男

サブタイトル：人物でたどる日本近現代史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「多民族共生論Ⅱ」は、春学期と秋学期で学ぶ内容を変えている。春学期のⅡAでは、朝鮮やアジアと関係の深い日本人個人に関する伝記的著作を読んで、アジアをめぐる近現代日本の思想や社会運動の潮流を振り返っている（秋学期のⅡBは、在日朝鮮人をめぐる日本の多民族共生について考察）。

ⅡAではこれまで、鶴見俊輔・和田春樹・石田雄・富山妙子・岡部伊都子・日高六郎・松本昌次・上田正昭・茨木のり子・柳瀬正夢などを扱ってきた。今年度は、ロシア史研究者でありながら、韓国・朝鮮関係の研究と実践活動で大きな功績を挙げた和田春樹（1938年生まれ）を、2012年度に続けて再度取りあげたい。

- ①和田春樹という一個人の歩んだ道や、その中で身につけた思想・ものの見方を知る
- ②和田春樹や彼と関わりのあった他の人物を通して、近現代日本の社会・思想・文化などの潮流をたどる
- ③とくに、アジアとの関わりの中で、どのような社会運動・思想潮流があったかに着目する
- ④特定の個人に関する伝記的著作の中から追究すべき課題を見出し、調査・探求する
- ⑤これまでの各人の研究や関心に応じて、受講者相互間に有益な討論を成立させる

【到達目標】

上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。

具体的には、歴史の中を生きる個人の伝記的記述を読むことを通して、日本近現代史をアジアとの関わりの中で再検証するための契機をつかめるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

今回のテキストは、和田春樹による自伝的回想である。学問研究上の内容と同時に、ベトナム戦争反対運動や日韓連帯運動など、社会運動との関わりに比重が置かれている。

2段組で約300頁あるので、1回につき約30頁のペースで読み進めていく。レポーターの報告と全員の討論により、ゼミのような形で進める。レポーターは、登場する人物や事件などの事象のうち、大切と思われる点や関心のある点を中心に事実調べをし、授業で議論すべき論点を提出すること。近年格段に検索が容易になった各種のデータベースを駆使し、当時の新聞・雑誌記事などにも目配りをしながら、時代を実証的に再現するよう努めることが大事である。

受講者数が少ない場合は、負担が極端に多くなることを避け、レポーター無しで進める回も設ける。

毎回、冒頭に前回の振り返りを入れることでフィードバックとする。また、関連する映像を観ながら既習事項を定着させる回も、数回設ける。

もし可能なら、最後に著者の和田春樹氏と交流する機会を設けることも考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入（その1）	受講者各自の自己紹介、授業計画の解説、参考文献の紹介などのガイダンス
第2回	導入（その2）	年譜や各種新聞記事などを使いながら、和田春樹の伝記的な事項をあらかじめ整理する
第3回	テキスト 「はじめに」、第1章	本書の基本的な性格と、1960年代後半の時代状況
第4回	テキスト 第2章①	ベトナム戦争反対運動と東大闘争
第5回	テキスト 第2章②	ベトナム戦争反対運動の一環としての反戦脱走米兵救援の活動
第6回	関連映像の上映①	反戦脱走米兵救援活動の映像を観る
第7回	テキスト 第2章③	ベトナム反戦運動のその後の展開と、キム・ジハとの「出合い」
第8回	テキスト 第3章	歴史家としての出発
第9回	テキスト 第4章①	金大中拉致事件と在日韓国人政治犯
第10回	テキスト 第4章②	ベトナム戦争終結とキム・ジハ救援ハンスト
第11回	テキスト 第4章③	日韓連帯運動としての『日韓調査』ほか

第12回	関連映像の上映②	日韓連帯運動に関する映像の視聴
第13回	テキスト 第5章	ソ連に滞在してのソ連研究
第14回	全体のまとめ	和田春樹と韓国・朝鮮について、その後の展開も含めて総括する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指示する関連文献の講読、関連映像視聴、関連箇所への訪問など。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

和田春樹『回想 市民運動の時代と歴史家：1967-1980』（作品社、2023年）

【参考書】

今回のテキストは、和田春樹『ある戦後精神の形成：1938-1965』（岩波書店、2006年）の続編である。生い立ちから日韓国交正常化の1965年までの歩みを綴った本書を、前提として読むことを強く勧めたい。

そのほか、本書のなかで登場する本人の多数の著書や、関連する他の人物の著作類に適宜あたってみること。

【成績評価の方法と基準】

レポーター時の報告30%、普段の授業への貢献度40%、学期末に提出する授業総括報告書30%を目安とし、総合的に判断する。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。

近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生も、ともに意義を感じよう授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究

<研究テーマ>

在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。

<主要研究業績>

・「渡日初期の尹学準—密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第5号論文編、2004年）

・「短歌と在日朝鮮人—韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第26号、2007年）

・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実践から」（『学輪 IIDA』機関誌『学輪』第2号、2016年）

*詳細は、「学術データベース」をご参照のこと。

【Outline (in English)】

This class aims to study about the trends of contemporary Japanese thought and social movements over Asia, by reading of a biographical work on Japanese individual closely related to Korea or Asia. In this year, we read the book on Masamu Yanase.

Final grade will be calculated according to the following process. In-class presentation 30%, in-class contribution 40%, and term-end report 30%.

HIS500G1 - 211 (史学 / History 500)

多民族共生論ⅡB

高柳 俊男

サブタイトル：朝鮮・在日朝鮮人と日本社会

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本と朝鮮半島との関係史や、在日朝鮮人（総称）が経てきた歴史を明らかにする。その際、政治史や運動史のみならず、生活史・文化史・精神史の解明にも重点を置く。

日朝関係や在日朝鮮人の事例を追うことが、広く国際関係や日本国内の多民族・多文化共生全般について考える際、示唆が得られるようにしたい。

なお、一次資料を含めた各種文献に関して、当時と現在の2つの視点から丁寧な読解ができるよう努める。

【到達目標】

上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。

具体的には、日韓・日朝関係史や、文化史も含めた在日朝鮮人の歩みやその日本社会との関わりを、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解し、受け売りや図式的把握ではなく、自らの言葉で具体的・実証的に語れるようになることを目指す。

また、「研究」という自らの行為を、より客観的・多面的に眺める契機を得るようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

秋学期のこの授業では、日本社会に大きな比重を占める「異民族集団」である在日朝鮮人を素材に、日本における異文化摩擦や多民族共生の姿を具体的に考察している。

2012年度から8年間、戦後、各種の民族団体・政党・社会運動団体ないし日本政府関係機関などが出した朝鮮関係のパンフレット・小冊子を読み解きながら、戦後の朝鮮・在日朝鮮人をめぐる論調や運動の系譜を追う作業を行った。

定年前最後のサバティカルを経た2021年度からは、私自身が大学生以来、このテーマで執筆してきた各種の文章を取り上げている。研究者としての自己の歩みを祖上に載せるのは、必ずしも受講者に範を垂れる意味ではなく、その試行錯誤や紆余曲折の歩みを示すことで、同じく「研究」に携わる立場にいる受講生に、何らかの参考や示唆を与えることを期待するからである。

今年度は、前半は導入も含めて、近代日本が植民地を所有した事実と、それが現在に及ぼす影響や痕跡を考察する。後半は在日朝鮮人も含めた朝鮮民族のディアスポラ状況や、それがもつ意味を多角的な視野で考える。

取り上げるそれぞれの著作は、その時代の社会潮流や研究動向の産物であり、また当然のこととしてその後のことは書かれていないので、現在からみたら不十分な箇所もある。受講者は、テキスト内容を正確に読み解くとともに、それらを「当時」と「現在」という2つの文脈の中に置いて、客観的・学術的に分析していく。すなわち、なぜこのような主張がなされたか、「当時」の背景を明らかにすると同時に、「現在」の目から見た認識の問題点や、当該課題のその後の展開、さらには研究史の進展などもフォローしつつ報告するよう努めること。

授業の進め方としては、テキストをレポーターの報告と全員の討論で読んでいく。受講者が少なければ、レポーター無しの回も設けたい。毎回、冒頭で前回の振り返りを行うことでフィードバックとし、また関連する映像を観ながら既習事項を定着させる回も、数回設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	受講者の自己紹介、授業計画の解説、レファレンスブック紹介、当面のテキスト配付、など
第2回	近代日本と「外地」①	近代日本と「外地」＝植民地について（総論編）
第3回	近代日本と「外地」②	近代日本と「外地」＝植民地について（各論編）
第4回	映像による学習内容の振り返り①	学んだ内容の映像による振り返り（愛知大学、ほか）
第5回	東京にある朝鮮関係の史跡①	日韓合邦記念塔、北朝鮮帰国事業
第6回	東京にある朝鮮関係の史跡②	伊藤博文と安重根、歴代の朝鮮総督
第7回	東京にある朝鮮関係の史跡③	関東大震災、枝川町の集合住宅ほか
第8回	映像による学習内容の振り返り②	学んだ内容の映像による振り返り（関東大震災時の朝鮮人虐殺、ほか）

第9回	朝鮮民族のディアスポラ①	海峡を越えた在日朝鮮人の形成史
第10回	朝鮮民族のディアスポラ②	中国の朝鮮族、とくに金学鉄
第11回	朝鮮民族のディアスポラ③	旧ソ連の高麗人とその言論活動
第12回	映像による学習内容の振り返り③	学んだ内容の映像による振り返り（崔健、ほか）
第13回	朝鮮民族のディアスポラ④	SJ国内研修を振り返る
第14回	まとめ	SJ国内研修における「負の歴史」の語り継ぎも含めて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストに登場する文献や授業中に指示する関連文献の講読、関連映像の視聴、関連箇所への訪問など。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

その都度、紙媒体もしくはpdfで配付する。

【参考書】

『韓国朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『在日コリアン辞典』（明石書店）などの事典類で、韓国・朝鮮を本格的に研究したい人は購入すること。

【成績評価の方法と基準】

レポーター時の報告35%、普段の授業への貢献度30%、および学期末の授業総括報告書35%を目安に、総合的に判断する。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。

近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生とともに意義を感じ、自身の研究にも役立つような授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究、日朝関係史

<研究テーマ>

在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。

<主要研究業績>

・「渡日初期の尹学準—密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第5号論文編、2004年）

・「短歌と在日朝鮮人—韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第26号、2007年）

・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実践から」（『学輪IIDA』機関誌『学輪』第2号、2016年）

*詳細は、本学の「学術研究データベース」をご参照のこと。

【Outline (in English)】

This class aims to study about Japanese multicultural coexistence, by reading of my own papers on Japan-Korea relations or Korean minority in Japan.

This year, we plan to begin with satirical cartoon from newspapers, with a view to continuity from the spring semester, followed by tanka poems and other articles.

Final grade will be calculated according to the following process. In-class presentation 35%, in-class contribution 30%, and term-end report 35%.

SOC500G1 - 213 (社会学 / Sociology 500)

国際ジャーナリズム論

神林 毅彦

サブタイトル：国際社会におけるジャーナリズムの役割

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際社会が、戦争、気候危機、移民・難民問題、経済・貿易などグローバルな問題に直面するなか、国際ジャーナリズムの役割がますます重要視されている。国際ジャーナリズムの現状、影響、問題点、対策等を重点的に議論する。下記が主な内容となる。

1. 複雑化する国際情勢とジャーナリズム 2. 外交、国際政治とジャーナリズム 3. 報道にみられる政治的、経済的、社会的影響

【到達目標】

ジャーナリズムの役割、倫理、直面する問題、その対策や国際報道の背景などに理解を深めることができるようになる。また、効果的な情報発信ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国内外の問題に関する日本、海外メディアの報道を検証しながら、ジャーナリズムの本来の役割について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	ジャーナリズムの役割
第2回	メディアの特性（Ⅰ）	ジャーナリズムと倫理問題
第3回	メディアの特性（Ⅱ）	国際報道とその背景（Ⅰ）
第4回	メディアの特性（Ⅲ）	国際報道とその背景（Ⅱ）
第5回	メディアの特性（Ⅳ）	国際報道とその影響
第6回	メディアの特性（Ⅴ）	国際報道と倫理問題
第7回	国際ジャーナリズム（Ⅰ）	ジャーナリズム、プロパガンダ、PR
第8回	国際ジャーナリズム（Ⅱ）	戦争報道
第9回	フィールドワーク	インタビュー等
第10回	国際ジャーナリズム（Ⅲ）	環境問題、気候危機、自然災害等に関する報道
第11回	国際ジャーナリズム（Ⅳ）	世界的な経済、貿易問題の報道
第12回	国際ジャーナリズム（Ⅴ）	移民、難民問題と報道
第13回	フィールドワーク	インタビュー等
第14回	今後の国際報道	メディアの多様化、SNS、AIの影響

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際情勢に関する報道に目向け、批評を行う。また、報道の方法、問題点などを考える。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

とくになし。担当者が資料等を配布する。

【参考書】

ビル・コヴァッチ、トム・ローゼンステール「ジャーナリストの条件：時代を超える10の原則」新潮社 2024年（原書 The Elements of Journalism）The New York Times, The Atlantic, The Washington Post, The Christian Science Monitor, The Guardian, BBC, Yonhap News, NHK、他

【成績評価の方法と基準】

平常点 30%、授業での発表や議論 40%、レポート（内容評価）30%

【学生の意見等からの気づき】

学生は、The New York TimesやThe Atlanticなどの記事を積極的に読んでいた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ジャーナリズム論

<研究テーマ> 国際ジャーナリズム論、ジャーナリズム倫理

<主要研究業績>

- 1) “Japan’s new PM hoped snap elections would secure grip on power. They backfired,” 2024, The Christian Science Monitor.
- 2) “His own party calls him traitor. Can Japan’s new PM rebuild trust in politics?” 2024, The Christian Science Monitor.
- 3) 「DV問題を概観する ―支援者たちの証言から」「部落解放」2024年3月号、解放出版社

【Outline (in English)】

The theme of this course is theories of international journalism in the internet age. This course provides opportunities for students to critique news coverage in Japanese and foreign media outlets and discuss mainly the impact of social media; journalism and diplomacy; and political, economic and social factors influencing media content.

At the end of the course, students are expected to do the followings:

A. Have a clear understanding of the principles of journalism.

B. Have a clear understanding of the integral role of international journalism, especially in the face of complex global issues such as conflicts, migration, refugees and climate crisis.

C. Discuss the most pressing issues facing international journalism today.

Students will read articles in major Japanese and foreign media regularly about diplomatic and global issues.

Grading will be determined by 30% participation, 30% presentations, 40% writing assignments

HIS500G1 - 215 (史学 / History 500)

国際文化交流論Ⅱ A

木村 真

サブタイトル：人の移動現象にアプローチするさまざまな方法

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、さまざまな形態の人の移動が地域社会やさまざまな人間集団に与えた影響を考察します。人の移動は近現代の世界に限られた現象ではありませんが、とくに、19世紀以降の国民国家形成過程、都市化や近代化の過程、世界各地の紛争のなかで見られた出稼ぎ、国外・国内移住、強制的な住民交換、政治的亡命などの移動現象と人々のネットワーク、人々の帰属意識、さらに国家による政策の関係に注目します。それによって、現代社会で生じている多様な、多面的な移動現象の理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

- ①国民国家形成過程の人の移動について、多面的な理解を修得すること
- ②住民交換政策の地域社会に与える影響についての知見を得ること
- ③人々の多様な形態の移動にともなう送り出し地域、受け入れ地域の人々の文化的影響に関する知見を得ること
- ④以上のテーマについて、とくに歴史研究や地域研究の方法を学ぶこと

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近代バルカン、東欧の事例を中心に担当者が講義も行いますが、受講者全員で関連文献、論文を読み、発表をしてもらいます。また、受講者の専門地域もしくは関心を持つ地域の事例について報告発表もしてもらう予定です。各授業の内容について質問、意見をリアクションペーパーの形で提出してもらいます。なお、対面式を前提としますが、状況によってオンラインとなるかもしれません。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方について
第2回	近代の東欧、バルカン社会（1）	東欧、バルカン地域における国民国家形成以前の人の移動
第3回	近代の東欧、バルカン社会（2）	帝国内の各地、ならびに帝国内外を結ぶさまざまな人の移動
第4回	国民国家形成過程と人の移動（1）	バルカン地域における国民国家形成のプロセス
第5回	国民国家形成過程と人の移動（2）	国家形成にともなう人の移動（武装勢力、軍隊、住民移動など）
第6回	国民国家形成過程と人の移動（3）	国家形成にともなう人の移動（出稼ぎ、季節労働など）
第7回	国民国家形成過程と人の移動（4）	国家形成にともなう人の移動（さまざまな移民形態）
第8回	国民国家形成過程と人の移動（5）	国家形成にともなう人の移動（亡命など）
第9回	紛争と人の移動（1）	紛争にともなう人の移動と国家の対応（住民交換）
第10回	紛争と人の移動（2）	紛争にともなう人の移動と国家の対応（強制移住）
第11回	紛争と人の移動（3）	紛争にともなう人の移動と国家の対応（難民）
第12回	移動する人々の帰属意識（1）	帰属意識の構築
第13回	移動する人々の帰属意識（2）	重層的な帰属意識
第14回	人の移動をめぐる研究から得られる知見	人の移動をめぐる歴史的な研究アプローチの可能性と限界

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告発表に際しては、あらかじめ、関連する文献を読み、レジュメを作成準備することが求められます。また、発表者以外の参加者も、関連する概念、事象などについて調べることを期待されます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の関心に即して決めるつもりです。さしあたり、下記の文献を素材とする予定です。テキストはこちらでコピーを準備します。

Ulf Brunnbauer(ed.) Transnational Societies, Transnational Politics. Migration in the (Post-)Yugoslav Region, 19th-20th Century. Munchen, 2009.

【参考書】

授業において指示します。さしあたり、以下のものを挙げます。

ノーマン・M・ナイマーク『民族浄化のヨーロッパ史』刀水書房、2014年
山本明代、バブ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』刀水書房、2017年

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業における発表、ならびに議論への参加）（50％）、レポート課題（50％）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】

対面式、オンラインのどちらの場合でも、なるべくコミュニケーションを取り合うよう努力したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉バルカン近現代史、東欧地域研究
〈研究テーマ〉近現代東欧地域の強制的移動を含む人の移動、移民現象
ブルガリア史、南スラヴ地域を中心に、バルカン近現代史、東欧地域研究を専門としております。現在は授業のテーマでもある南東ヨーロッパ地域の近現代の人の移動を研究しています。また、東欧地域の史学史研究にも関心を持っております。
〈主要研究業績〉
『バルカン史と歴史教育』（共著）2008年 明石書店
『東欧地域研究の現在』（共著）2012年 山川出版社
『移動がつくる東中欧・バルカン史』（共著）2017年 刀水書房

【Outline (in English)】

【Course outline】 This course introduces a historical approach for a diversity of migrations after the 19th century to students taking this course.

【Learning Objectives】 At the end of the course, students are required to obtain knowledge about various patterns of migrations after the 19th century.

【Learning activities outside of classroom】 Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【Grading Criteria/Policy】 Final grade will be decided based on in-class contribution (50%) , and term-end report (50%) .

ARSk500G1-217 (地域研究(地域間比較) / Area studies(Interregional comparison) 500)

比較宗教文明論

臼杵 陽

サブタイトル：イスラームなどの一神教と日本

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

イスラム国（IS）は壊滅したものの、宗教・宗派・民族紛争は世界中で続いている。ウクライナ情勢は解決の見通しがついておらず、中東地域では大地震に襲われて先行きが見通せない状況が続いている。今後世界がどんな方向に向かうのか、見えてこない。授業では、日本社会で宗教がどんな意味をもっているのかを出発点として、世界の宗教紛争の現状、とりわけ現代中東の具体的な問題を取り上げながら検討していく。

【到達目標】

受講者がイスラーム世界を含む現代の宗教紛争を考える際に重要な点は、欧米社会に特徴的に見られる宗教を個人の信仰として捉えるのではなく、共同体あるいは社会における機能に注目して考えることである。文明として宗教を捉えるということはわれわれが現代社会における宗教現象を理解するうえでも重要な視点である。宗教文明における衝突はその教義のちがいがいいというよりも、それぞれの宗教文明がそれぞれの歴史的過程を経て、その現在が形成されてきたということでもある。したがって、宗教文明を比較の視点から捉えるということは、現在の状況を歴史的な観点からプロセスとして読み直す作業でもある。したがって、宗教の名の下でのテロなどをたんに野蛮で時代錯誤的としてみるのではなく、現代における歴史的過程の帰結という観点からも考え直してみようということである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

出席者数によるが、テキストを決めて演習の形式で進めていくことを原則としたい。必要に応じて、DVDなどの映像資料などを用いながら、「宗教」に関していったい何が問題なのかを含めて考えていくことにしたい。まずは「多神教」といわれる日本社会にとって「宗教」とは何かを考えていき、参加者の関心によってイスラームやユダヤ教などの「一神教」の世界へと話を移していきたい。毎回、授業に関する小レポートを書いて提出してもらう。授業冒頭で小レポートに対するフィードバックを行い、さらなる議論に活かす。本科目は、国際文化研究科の判断で可能となった場合は対面授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業で何を学んでいくのか。
第2回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ①日本人の宗教観	近現代に注目して日本人の宗教観がいかなるものなのかについて考える。
第3回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ②明治期から太平洋戦争まで	明治期から太平洋戦争までの日本人にとっての「宗教」とは何かを考える。
第4回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ③戦後日本	戦後日本の日本人にとっての「宗教」の変容について考える。
第5回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ④9・11事件後	9・11事件後の日本人のイスラーム観を考える。
第6回	日本と中東イスラーム世界の関係①明治・大正期	明治・大正期の日本・イスラーム関係史を考える。

第7回	日本と中東イスラーム世界の関係②戦前昭和期	戦前昭和期の日本・イスラーム関係史を考える。
第8回	日本と中東イスラーム世界の関係③大川周明の初期イスラーム研究	国家主義者の大川周明の青年期のイスラーム神秘主義研究について考える。
第9回	日本と中東イスラーム世界の関係④大川周明晩年のコーラン研究	国家主義者の大川周明の晩年のコーランの翻訳、その研究について考える。
第10回	日本人のユダヤ人観 ①戦前期	戦前日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義
第11回	日本人のユダヤ人観 ②戦後期	日本人のユダヤ人観②戦後期
第12回	日本人のユダヤ人観 ③欧米との相違	キリスト教徒の多い欧米と日本のユダヤ人観観はどのように違うのか？
第13回	欧米世界とイスラーム世界のユダヤ人観の相違	同じ一神教のイスラーム世界のユダヤ人観はキリスト教世界とどのように違うのか？
第14回	まとめ	総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

中東イスラーム世界、とりわけイスラーム主義あるいはテロはいつ起こるかわからない。したがって、毎日、新聞、テレビ、インターネットでニュースをチェックする習慣をつけてほしい。また、日々起こる事件の表層だけでなく、その底流に流れる事態の本質をきちんと見極める眼力を養ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996年。
島蘭進『国家神道と日本人』岩波新書、2010年。
臼杵陽『イスラームはなぜ敵とされたのか』青土社、2009年。
臼杵陽『大川周明－イスラームと天皇のはざま』2010年。

【参考書】

井筒俊彦『イスラーム文化』岩波文庫、1991年。
井筒俊彦『コーランを読む』岩波現代文庫、2013年。
大川周明『回教概論』ちくま学芸文庫、2008年。
大川周明『復興亜細亜の諸問題』中公文庫、2016年。

【成績評価の方法と基準】

授業内における報告および質疑応答など積極的な姿勢をもって参加しているかによって評価する（40％）。期末にはレポートを提出してもらう（60％）。

【学生の意見等からの気づき】

院生諸君との授業内でのコミュニケーションによって授業のあり方を検討する機会をもつことにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中東地域研究、宗教・エスニック問題
<研究テーマ>パレスチナ／イスラエル紛争、日本の対中東関係、とりわけ聖地問題
<主要研究業績>『見えざるユダヤ人』（平凡社）『原理主義』（岩波書店）、『大川周明』（青土社）、『イスラエル』（岩波新書）、『イスラームはなぜ敵とされたか』（青土社）、『アラブ革命の衝撃』（青土社）、『世界史の中のパレスチナ問題』（講談社現代新書）、『「中東」の世界史』（作品社）、『ユダヤの世界史』（作品社）など。

【Outline (in English)】

Learning activities outside of classroom

In the Muslim societies or Middle Eastern world, nobody can anticipate what would happen such as terror attacks. Therefore, students attending this class are asked to follow news in newspapers, television or internet so on. Students are also asked to improve their abilities to grab the underlying cause of what are happening every day. Preparation and review are needed for two hours as a standard.

Grading Criteria /Policy

Grading Criteria is to participate actively in reports and questions & answer in class (40%). Semester-end reports are needed to submit (60%).

FRI500G1 - 301 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報空間論 I A

森村 修

サブタイトル：現代哲学研究

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業の概要と目的】

本授業では、国内外の思想に多大な影響を及ぼしている哲学者・思想家のテキストを取り上げ、それを精読することを通じて、現代社会が置かれている状況を哲学的に考察することを目的とする。

【到達目標】

- ① 哲学テキストを精読することによって、哲学的思考を鍛錬することができる。
- ② 哲学テキストを通じて、私たちが生きている社会の深層構造を哲学的に考察することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・基本的に演習形式で授業を進める。

- ① 各回に発表担当者を決め、限られた箇所を精読し、レジュメを作成する。
- ② 発表者のレジュメをもとに、発表者がプレゼンテーションを行う。
- ③ 発表者と発表者以外の受講生は、発表者のプレゼンテーションに対して質疑を行い、議論を行う。
- ④ 質疑応答が終わったり、議論が紛糾したりした場合に、授業担当者が当該箇所について解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	・授業内容の概説 ・発表者の当番を決める ・レジュメの書き方などを説明する
第2回	柄谷行人『日本近代文学の起源』読解①	第一章 風景の発見
第3回	柄谷行人『日本近代文学の起源』読解②	第二章 内面の発見
第4回	柄谷行人『日本近代文学の起源』読解③	第三章 告白という制度
第5回	柄谷行人『日本近代文学の起源』読解④	第四章 病という意味
第6回	柄谷行人『日本近代文学の起源』読解⑤	第五章 児童の発見
第7回	柄谷行人『日本近代文学の起源』読解⑥	第六章 構成力について——二つの論争 その一 没理想論争 その二 「話」のない小説 論争
第8回	柄谷行人『日本近代文学の起源』読解⑦	第七章 ジャンルの消滅
第9回	浅田彰『構造と力——記号論を超えて』読解①	I 構造主義／ポスト構造主義のバースペクティブ 第一章 構造とその外部 あるいは EXCES の行方——構造主義の復習とポスト構造主義の予習のためのノート
第10回	浅田彰『構造と力——記号論を超えて』読解②	第二章 ダイアグラム——ヘーゲル／バタイユの呪縛から逃れ出るための
第11回	浅田彰『構造と力——記号論を超えて』読解③	II 構造主義のリミットを超える——ラカンとラカン以後 第三章 ラカン 構造主義のリミットとしての
第12回	浅田彰『構造と力——記号論を超えて』読解④	第四章 コードなき時代の国家——ドゥルーズ＝ガタリのテーマによるラフ・スケッチの試み
第13回	浅田彰『構造と力——記号論を超えて』読解⑤	第五章 クラインの壺 あるいはフロンティアの消滅
第14回	浅田彰『構造と力——記号論を超えて』読解⑥	第六章 クラインの壺からリゾームへ——不幸な道化としての近代人の肖像・断章

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各二時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

- ① 柄谷行人『日本近代文学の起源』講談社 1980 年／講談社文芸文庫 1988 年、改版 2009 年／岩波現代文庫（改訂版）2008 年
- ② 浅田彰『構造と力——記号論を超えて』勁草書房、1983 年／中公文庫、2023 年

【参考書】

開講時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 平常点 (50%) (レジュメを作成し、発表すること)
- (2) 期末レポート (50%)

【学生の意見等からの気づき】

2024 年度はサブタイトルのため、記すことができない。

【Outline (in English)】

Outline and Purpose of the Course

The purpose of this class is to read texts by philosophers and thinkers who have had a great influence on domestic and international thought. This is because learning about the thoughts of the philosophers who are leading contemporary thought will lead to a philosophical consideration of the contemporary society in which we live.

【Goals】

- (1) Through close reading of philosophical texts, students will be able to develop their philosophical thinking.
- (2) Through philosophical texts, students will be able to philosophically examine the deeper structure of the society in which we live.

FRI500G1 - 302 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報空間論 I B

森村 修

サブタイトル：現代哲学研究

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【授業の概要と目的】

本授業では、国内外の思想に多大な影響を及ぼしている哲学者・思想家のテキストを取り上げ、それを精読することを通じて、現代社会が置かれている状況を哲学的に考察することを目的とする。

【到達目標】

- ① 哲学テキストを精読することによって、哲学的思考を鍛錬することができる。
- ② 哲学テキストを通じて、私たちが生きている社会の深層構造を哲学的に考察することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

・基本的に演習形式で授業を進める。

- ① 各回に発表担当者を決め、限られた箇所を精読し、レジュメを作成する。
- ② 発表者のレジュメをもとに、発表者がプレゼンテーションを行う。
- ③ 発表者と発表者以外の受講生は、発表者のプレゼンテーションに対して質疑を行い、議論を行う。
- ④ 質疑応答が終わったり、議論が紛糾したりした場合に、授業担当者が当該箇所について解説を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	・授業内容の概説 ・発表者の当番を決める ・レジュメの書き方などを説明する
第2回	ジジエ『イデオロギーの崇高の対象』読解①	第I部 徴候 1. いかにしてマルクスは症候を発明したか 2. 症候からサントムへ
第3回	ジジエ『イデオロギーの崇高の対象』読解②	第II部 他者の欠如 3. 汝何を欲するか 4. 汝は二度死ぬ
第4回	ジジエ『イデオロギーの崇高の対象』読解③	第III部 主体 5. 〈現実界〉のどの主体か？ 6. 「実体としてだけでなく主体としても」
第5回	バトラ『欲望の主体——ヘーゲルと20世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』読解①	第一章 ヘーゲル『精神現象学』における欲望、修辭、承認
第6回	バトラ『欲望の主体——ヘーゲルと20世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』読解②	第二章 歴史的欲望——フランスにおけるヘーゲル受容
第7回	バトラ『欲望の主体——ヘーゲルと20世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』読解③	第三章 サルトル——存在の想像的探求
第8回	バトラ『欲望の主体——ヘーゲルと20世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』読解④	第四章 欲望の主体を賭けた闘争——ヘーゲルとフランス思想
第9回	バトラ『ジェンダートラブル』読解①	第一章 〈セックス／ジェンダー／欲望〉の主体
第10回	バトラ『ジェンダートラブル』読解②	第二章 禁止、精神分析、異性愛のマトリクスの生産
第11回	バトラ『ジェンダートラブル』読解③	第三章 攪乱的な身体行為
第12回	バトラ『問題=物質となる身体』読解①	第一章 問題=物質となる身体
第13回	バトラ『問題=物質となる身体』読解②	第二章 レズビアン・ファルスと形態的想像界
第14回	バトラ『問題=物質となる身体』読解③	第三章 〈幻想〉の同一化とセックスの引き受け 第四章 ジェンダーは燃えている——我有化と転覆の問い

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

- ① S・ジジエ『イデオロギーの崇高の対象』河出書房新社、2000年
- ② J・バトラ『欲望の主体——ヘーゲルと20世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』堀之内出版、2019年年
- ③ J・バトラ『ジェンダートラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社、1999年
- ④ J・バトラ『問題=物質となる身体』以文社、2021年

【参考書】

開講時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 平常点 (50%) (レジュメを作成し、発表すること)
- (2) 期末レポート (50%)

【学生の意見等からの気づき】

2024年度はサバティカル（国内研究）のため、記すことがない。

【Outline (in English)】

Outline and Purpose of the Course

The purpose of this class is to read texts by philosophers and thinkers who have had a great influence on domestic and international thought. This is because learning about the thoughts of the philosophers who are leading contemporary thought will lead to a philosophical consideration of the contemporary society in which we live.

【Goals】

- (1) Through close reading of philosophical texts, students will be able to develop their philosophical thinking.
- (2) Through philosophical texts, students will be able to philosophically examine the deeper structure of the society in which we live.

FRI500G1 - 305 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報メディア論 I A

大嶋 良明

サブタイトル：ソーシャルメディアの調査と分析

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ、文化情報学的なアプローチで分析するなかから、異文化理解に資する視点の開拓を試みる。これまで社会科学的发展の中で構築されたメディア論や人文科学分野での文化理論とも関連させた検討を試みている。とくにインターネット上の言説に着目し、その分析手法やメディアデータとしての特徴や書物との違いについて学ぶ。

【到達目標】

この科目では現代のテキストを最新の手法によって分析できるようになる。現代のネット社会をテキストの計量的・統計的な諸特性においてとらえる。英米文化の理解と異文化理解の観点から、インターネット上の言説や文化表象に関連するメディアに着目し、その主要な分析手法やモデル化について説明できるようになる。また実際のデータに適用して分析することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と輪講により行う。
・複数レポート制による輪講とパソコンを用いたインターネット上のデータの分析を試みる。
・各自が学習内容を相互閲覧可能な形でWebに記録する。
・日本語のみならず各国語文化圏のWebテキストに関する各自の話題提供を通じて、視野を拡げ問題意識を深化させる。
・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション：社会と機械学習	Webから海外社会を観察することと分析の課題を学ぶ。
2	即時性の検出	時系列のテキストからキーワードの出現傾向を検出する方法を学ぶ。
3	単語の出現頻度	形態素解析に基づく単語の出現頻度の分析、Bag of Words(BoW)の構築を学ぶ。
4	共起関係と表現の連鎖	単語の連なり、N-gram、共起関係（コロケーション）の分析方法を学ぶ。
5	文書中の単語の重要性和TF-IDF	TF-IDFによる単語の重要性の分析手法を学ぶ。
6	関連性の評価	テキストから関連性の高い文書を見つける手法を学ぶ。
7	潜在的意味論と話題性の抽出	LDA(潜在的ディリクレ分割)法によるトピックモデルと言説空間の分析法を学ぶ。
8	感情分析、ネガポジ分析	感情分析とは何かを理解し文章から意見の抽出方法を学ぶ。
9	推薦の仕組み	予測とレコメンド手法、バスケット分析の手法を学ぶ。
10	ジャンルの抽出	テキストのジャンル分類を学ぶ。
11	クラス分類	テキストのクラス分類の方法を学ぶ。
12	特徴抽出	大規模データからの特徴抽出の手法を学ぶ。
13	特徴量の圧縮と次元削減	大規模データからの特徴量圧縮の手法を学ぶ。
14	学習のまとめ	クラス内ディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。
予習復習として、テキストおよび毎回の授業で担当教員が指定する文献を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは指定しない。必要な資料は授業内で配布する。

【参考書】

全体を通じての参考書は特に指定しない。

必要に応じて提示する。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：

【多言語環境】 三上喜貴ほか、「言語天文台からみた世界の情報格差」、慶應義塾大学出版会(2014)、ISBN: 978-4-7664-2178-1

【英米言語文化】 Swiss, T., “Unspun,” NYU Press(2001), ISBN: 978-0814797594

【ネット社会の文化的特性】 川上量生（監修）、「ネットが生んだ文化」、角川学術出版(2014)、ISBN: 978-4-04-653884-0

【言語分析の手法】

(1) ボレガラ、岡崎、前原、「ウェブデータの機械学習」、講談社(2016)、ISBN:978-4-06-152918-2

(2) Richart, W. and Coelho, L.P.(著)、齋藤康毅（訳）、「実践 機械学習システム」、オライリー・ジャパン（2014）、ISBN:978-4-87311-698-3

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%

輪講 25%

課題 20%

学期末レポート 30%

を総合的に評価する。

設定した達成目標を60%以上達成している場合に合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

2018年度より日本語および中文のテキストマイニングに取り組んでいる。留学生も含めてテキストの分析への履修学生の関心を喚起したい。また履修者少数の場合にも効率よく学習できるよう常に心がける。2021年度は担当教員が国内研究を取得したので、2022年度以降はこの間の深化を盛り込んだ内容とした。2025年度もその発展的な継続を目指す。

2023年度はTwitter (X) が研究利用に関する運営方針を制限したことでオンラインでの授業内容の実習が困難であった。この点については課題内容を変更することに対応する。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノートPC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。また言語Pythonを用いた機械学習の問題解決に親しんで欲しい。学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集するWikiやポートフォリオツール等のCMSを個々の研究科目目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用して欲しい。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード： テキストマイニング、Web、機械学習、データサイエンス、ビッグデータ、インターネット、オンラインデータ

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【担当教員の業務経験】

担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のデジタル信号処理（特にデジタル音響、統計モデルによる音声認識）、マルチメディア処理（音楽音響、電子透かし）分野の経験がある。

【Outline (in English)】

This course provides with perspectives on the Internet in the context of multi-cultural cyberspace. It also covers well-known research methodology and basic analysis techniques for online text data as well as various types of media data on the Internet.

Grading policy is as follows:

In-class contribution: 25%

Analysis report on reading assignment: 25%

Homework: 20%

Term paper: 30%

Your must achieve at least 60%in the overall grade to pass for academic credit.

The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

FR1500G1 - 306 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報メディア論 I B

大嶋 良明

サブタイトル：行動データから知る人間社会と心理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ、文化情報学的なアプローチで分析するなかから、異文化理解に資する視点の開拓を試みる。これまで社会科学的发展の中で構築されたメディア論や人文科学分野での文化理論とも関連させた検討を試みている。とくにインターネット上のユーザの行動の分析から人間社会と心理について何が解明できるのかを学ぶ。

【到達目標】

この科目ではソーシャルメディアを最新の手法によって分析できるようになる。現代のネット社会をテキストの計量的・統計的な諸特性においてとらえる研究事例から、ネット社会に参加するユーザの行動や心理について考察できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と輪講により行う。
・複数レポート制による輪講とパソコンを用いたインターネット上のデータの分析を試みる。
・各自が学習内容を相互閲覧可能な形でWebに記録する。
・日本語のみならず各国語文化圏のWebテキストに関する各自の話題提供を通じて、視野を拡げ問題意識を深化させる。
・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	Webの誕生、発展からソーシャルメディアの出現までを学ぶ。
2	Webとソーシャルメディア	知識源としてのWeb、人文社会科学におけるソーシャルメディア、Webとソーシャルメディアの社会性を学ぶ。
3	ソーシャルメディアの分類	Webとソーシャルメディアの発展形態、サービスからみたソーシャルメディアの分類を学ぶ。
4	集合知とWeb2.0	集合知とは何か、Web2.0の出現とその影響、社会の変容について学ぶ。
5	情報検索	情報検索の仕組み、クローリング、インデクシング、ランキングを学ぶ。
6	情報推薦	情報推薦の仕組み、カスタマイズ、コンテンツフィルタリング、ユーザー協調について学ぶ。
7	ネットワークとしての社会	スモールワールド実験、ネットワークの評価指標、ネットワーク生成のモデルを学ぶ。
8	ソーシャルメディアによる社会分析	実ネットワークの分析と社会イベントの検出について学ぶ。
9	ソーシャルメディアにおけるユーザの心理(1)	コミュニケーション媒体としてのソーシャルメディアの特性と利用目的とユーザー心理との関係を学ぶ。
10	ソーシャルメディアにおけるユーザの心理(2)	ソーシャルメディアがパーソナリティ、対人関係、ユーザー行動に及ぼす影響を学ぶ。
11	Web社会における印象形成	Webと現実世界での印象形成、SNSにおける印象形成について学ぶ。
12	SNSプロフィールからの印象形成	SNSプロフィール、写真画像、身体的魅力の効果などについて学ぶ。
13	ソーシャルメディアの将来	大規模データからの特徴量圧縮の手法を学ぶ。
14	まとめ	学習内容を総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。

予習復習として、テキストおよび毎回の授業で担当教員が指定する文献を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

土方 嘉徳 (著)、「ソーシャルメディア論：行動データが解き明かす人間社会と心理」、サイエンス社 (2020)、ISBN-13：978-4781914862

【参考書】

全体を通じての参考書は特に指定しない。

必要に応じて提示する。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：

【多言語環境】三上喜貴ほか、「言語天文台からみた世界の情報格差」、慶應義塾大学出版会 (2014)、ISBN: 978-4-7664-2178-1

【ネット社会の言語文化】Swiss, T., “Unspun,” NYU Press (2001), ISBN: 978-0814797594

【ソーシャルメディアの特性】

土方 嘉徳 (著)、「Webでつながる—ソーシャルメディアと社会/心理分析」、サイエンス社 (2018)、ISBN: 978-4781914367

藤代 裕之 (著)、「ソーシャルメディア論・改訂版 つながりを再設計する」、青弓社 (2019)、ISBN-13: 978-4787234490

【成績評価の方法と基準】

平常点25%

輪講25%

課題20%

学期末レポート30%

を総合的に評価する。

設定した達成目標を60%以上達成している場合に合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

2018年度より日本語および中文のソーシャルメディア分析に取り組んでいる。留学生も含めてテキストの分析への履修学生の関心を喚起したい。また履修者少数の場合にも効率よく学習できるよう常に心がける。2021年度は担当教員が国内研究を取得、2022年度以降にはこの間の深化を盛り込んだ内容とした。最新の研究動向についても理解を深めるために2023年度には内外の研究論文を参考資料としても追加した。2025年度もその発展的な継続を目指す。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノートPC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。また言語Pythonを用いた機械学習の問題解決に親しんで欲しい。学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集するWikiやポートフォリオツール等のCMSを個々の研究科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用して欲しい。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード： SNS、Web、ビッグデータ、インターネット、ネット社会

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【担当教員の業務経験】

担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のデジタル信号処理（特にデジタル音響、統計モデルによる音声認識）、マルチメディア処理（音楽音響、電子透かし）分野の経験がある。

【Outline (in English)】

This course provides with perspectives on the Internet in the context of multi-cultural cyberspace. It focuses on social media and covers research methods and techniques to analyze user community and behavior as networked entity.

Grading policy is as follows:

In-class contribution: 25%

Analysis report on reading assignment: 25%

Homework: 20%

Term paper: 30%

Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.

The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

FRI500G1 - 307 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報メディア論Ⅱ

重定 如彦

サブタイトル：人工知能について学ぶ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在、大きな社会的注目を集めている人工知能について、古典的なチェスなどのゲームを題材とするAIからはじめ、近年注目を浴びている画像を認識するディープラーニングを用いたAIなどを題材とした実習を行いながらその仕組みについて学び、人工知能ができる事、できない事について理解できるようにする。

また、人工知能が社会に与える影響などについて考察する。

【到達目標】

人工知能の基礎を学ぶ。

人工知能が社会に与える影響について自分なりの考察を行えるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

人工知能について、古典的なチェスのようなゲームにおける手法から始め、最近注目を浴びてきているディープラーニングを使った画像認識に至るまで、具体的にその仕組みについて実習を行いながら学習していく。

授業では、あらかじめ与えたテーマについて各自が発表し、その内容についての議論なども行う。

学生の理解度に応じて、実際に動作する、簡単な人工知能のプログラミングの実習などを行うことも考えている。

リアクションペーパーや課題などを課した場合、提出は学習支援システムで行う。また、そのフィードバックは必要に応じて提出後の授業の冒頭で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	人工知能の定義と歴史	授業の導入及び、人工知能の定義や歴史について学ぶ
2回	ゲームの人工知能	○×ゲームやチェスなど、ゲームにおける人工知能の考え方について学ぶ
3回	ゲーム木と探索	ゲームを題材とした人工知能における、古典的な手法であるゲーム木とその探索について学ぶ
4回	α β 法と、枝刈り	ゲーム木の探索を効率的に行うための手法の一つである α β 法と、ゲーム木の枝刈りについて学ぶ
5回	様々な探索手法	ゲーム木の様々な探索手法について学ぶ
6回	評価関数	状況を数値化するための手法（評価関数）について学ぶ
7回	機械学習とディープラーニング	機械学習の基礎とその種類について学ぶ
8回	ニューラルネットワーク	ディープラーニングの基礎となるニューラルネットワークについて学ぶ
9回	画像の分類	機械学習を用いた画像認識について学ぶ
10回	ディープラーニングによる学習	人工知能がディープラーニングにおいて、どのように学習していくかについて学ぶ
11回	機械学習における様々な手法	機械学習で用いられる様々な手法について学ぶ
12回	人工知能の問題点	人工知能が抱える問題点や、限界などについて学ぶ
13回	社会に与える影響	人工知能が社会に与える影響について議論する
14回	まとめ	授業で学んだことのまとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前半は教科書を指定しないが、授業で学んだことをしっかりと復習し、授業内で提示する次の授業のテーマについて予習する。

後半は教科書を読んで予習を行い、授業で学んだことをしっかりと復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

「ゼロから作るDeep Learning —Pythonで学ぶディープラーニングの理論と実装」 斎藤 康毅 オライリー・ジャパン

その他、必要に応じて授業内で提示する。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

「配分」

平常点25%、授業内での発表や議論50%、レポート25%

「評価基準」

発表及びレポートは、読解の正確さ、発表資料またはレポートの適切さ等によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

生成AIを補助的に利用することは認めるが、生成のみを利用したレポート課題の提出は認めない。詳しくは授業内で指示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門分野>情報科学

<研究テーマ>ユビキタスコンピューティング、分散OS、ユーザインタフェース <主要研究業績>

「デジタルミュージアムのためのキオスク型WWWブラウザ」、電子情報通信学会論文誌, vol.J85-D1, No.3, 2002年3月

「分散ハイパーメディアOS Net-BTRONにおけるハイパーメディアサービス管理機構」、情報処理学会論文誌, 2001年6月

A Distributed Hypermedia Operating System: Net-BTRON, In Proceedings of the 2000 International Conference on Communication Technology, IFIP ICCT2000/WCC2000, vol.2 (Aug.2000)

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura, "ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure," 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010), pp.

303 - 310, July

19 - 23, 2010.

【Outline (in English)】

The objectives of this class are to learn about basics of artificial intelligence, and discuss about influence of artificial intelligence on our society.

In the first half of the class, the textbook is not specified, but students are expected to review what they have learned in the class and prepare for the next class topic to be presented in class.

In the second half, students are expected to read the textbook and review what they have learned in class. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

Distribution.

Ordinary points: 25%, presentations and discussions in class: 50%, reports: 25%.

Evaluation Criteria

Presentations and reports will be evaluated on the basis of accuracy of reading, appropriateness of presentation materials and reports, etc.

LNG500G1 - 308

外国語実践研究A（英語）

MARK E FIELD

備考（履修条件等）：初回授業に出席し、受講許可を得ること

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. Most graduate students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country. Study Abroad experiences like those the faculty's undergraduates experience or when foreign students do their graduate studies outside their home countries are sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

【到達目標】

The goal of English Application is to give Post-SA students and graduate students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The theme of this English Application course is to explore how the world continues to become increasingly interconnected due to better communication systems and increasing opportunities for international travel. It will also examine how more people around the world are experiencing interactions with people from different countries and cultures, i.e., directly experiencing Intercultural Communication through tourism.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System. In this course, we will first look at the historical development of tourism and its expanding cultural significance. Later participating students will be asked to investigate potential areas and/or sites where tourism is developing or may be developed in the future. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
Week 2	History of Tourism: World Tourism Day	Brief English lecture on UNWTO. Students take notes, followed by class discussion and question and answer session.
Week 3	History of Tourism: Global Code of Ethics for Tourism	Brief English lecture on UNWTO's Code of Ethics, students take notes, then discuss parts of the code and their practical meaning.
Week 4	History of Tourism: The Development of Mass Tourism	Brief English lecture on the technological and economic changes that made modern mass tourism possible. Students take notes, followed by class discussion, and Q&A session.
Week 5	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourist destinations incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 6	Tourist Markets: Transportation & Infrastructure	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.

Week 7	Tourist Markets: Accommodations	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 8	Tourist Markets: Attractions & Activities	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 9	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourism related topics incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 10	New Modes of Tourism: Cruises	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 11	New Modes of Tourism: Thematic Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 12	Business Constraints: The Economics of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 13	Social Considerations: The Environmental and Cultural Impacts of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 14	Examination/Comments	Examination/Comments

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review vocabulary and previous lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト（教科書）】

The instructor will provide some course material early in the semester, and participating students will generate more course material as the semester progresses.

【参考書】

An English to English Dictionary is recommended. This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】

40%Ongoing Evaluation (Participation, Discussions, Homework, etc.)

20%Short Presentations

40%Final Examination/Term Project

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60%or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】

Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance. The instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】

OHC and PC presentations.

【その他の重要事項】

Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester. The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

【Outline (in English)】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. Most graduate students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country. Study Abroad experiences like those the faculty's undergraduates experience or when foreign students do their graduate studies outside their home countries are sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

LNG500G1 - 308

外国語実践研究A（ドイツ語）

小川 敦

備考（履修条件等）：初回授業に出席し、受講許可を得ること

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Gymnasium等、ドイツ語圏の中等教育（中学校・高校）で用いられる地理や歴史、公民の教科書を、辞書や文法書を用いながらじっくり読むことでこれまでに身につけたドイツ語力をさらに高めます。

【到達目標】

語彙や文法の複雑なドイツ語テキストにじっくり向き合うことで今後研究にも使えるレベルの高いドイツ語を読めるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者の希望にもよりますが、グループまたは個人で一文ずつ文を音読し、解析しながら読んでいきます。また、学生と教員、学生同士で解釈に違いが出た場合はじっくり議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	教材や授業の進め方の確認
2	ドイツ語圏の教科書を読む・その1	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（1）
3	ドイツ語圏の教科書を読む・その2	第2回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（2）
4	ドイツ語圏の教科書を読む・その3	第3回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（3）
5	ドイツ語圏の教科書を読む・その4	第4回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（4）
6	ドイツ語圏の教科書を読む・その5	第5回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（5）
7	ドイツ語圏の教科書を読む・その6	第6回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（6）
8	中間のまとめ、および読解の続き	前半で扱ってきたことのまとめを行います。
9	ドイツ語圏の教科書を読む・その7	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（1）
10	ドイツ語圏の教科書を読む・その8	第9回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（2）
11	ドイツ語圏の教科書を読む・その9	第10回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（3）
12	ドイツ語圏の教科書を読む・その10	第11回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（4）
13	ドイツ語圏の教科書を読む・その11	第12回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（5）
14	授業の最終的なまとめ	学期後半で学んだことを中心に、授業で扱ったまとめを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業の教材や資料は、学習支援システムで配布します。適宜予習してください。

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使いません。地理、歴史、政治をテーマとした教材をこちらで用意します。

【参考書】

・1回生で用いたドイツ語文法を扱った教科書
・中島悠爾・朝倉巧・平尾浩三『ドイツ文法総まとめ』白水社、2003年

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な参加40%、中間試験30%、期末試験30%とします。

【学生の意見等からの気づき】

受講者が自ら発言しやすい授業運営とするように努めています。

【学生が準備すべき機器他】

教材は基本的に電子データでの配布となります。授業にはスマートフォンではなくタブレットまたはPCを持参してください。

【その他の重要事項】

授業ではドイツ語の文そのものを文法的に解析する力や多様な語彙力を身につけるようにしてください。

大学院生には学部学生とは別の試験を用意します。

【Outline (in English)】

【Course outline】

Students further develop their German language skills through close reading of geography and history textbooks used in secondary education in German-speaking countries, using dictionaries and grammar books.

【Learning Objectives】

Students learn to read German texts with complex vocabulary and grammar at a high level. Students will also gain an insight into the attitudes of people living in German-speaking countries.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

【Grading Criteria /Policy】

Active participation 40%

Midterm examination 30%

Final examination 30%

LNG500G1 - 308

外国語実践研究A（ロシア語）

佐藤 千登勢

備考（履修条件等）：初回授業に出席し、受講許可を得ること

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

これまで培ってきたロシア語の運用能力をさらに伸ばし、維持することを第一の目的とします。ロシア語の動画を視聴してロシアやエストニアの文化や社会に触れ、ロシア語の文法力とリスニングの力を高めると同時に慣用表現、決まった口語表現を覚えて使えるようにします。

【到達目標】

ロシア語能力検定試験3級程度、またロシア語検定試験（ТРКИ）基礎レベル（A2）から第1レベル（B1）のロシア語運用能力（聴解と文法）を身につけること、その能力の維持を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ロシア語の動画を視聴して質疑応答に答えたり、穴埋め問題を解いたりしながら、文法とリスニングの力がつくように進めます。映像や説明文を通して、ロシアやエストニアの文化や慣習を楽しみながら知ることも可能となります。小テストのフィードバックは翌週の教場で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし /No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。使用教材、視聴覚資料の確認。
第2回	Легенды Старого Таллина 1	タリン旧市街のシンボルにまつわる伝説について。リスニングと質疑応答。
第3回	Легенды Старого Таллина 2	タリン旧市街の建築物にまつわる伝説について。リスニングと質疑応答。
第4回	Легенды Старого Таллина 3	タリン旧市街の防壁にまつわる伝説について。リスニングと質疑応答。
第5回	Таллинн, Эстония. Старый город. 1	ロシア語ガイドによるタリンの名所案内。リスニングと質疑応答。
第6回	Таллинн, Эстония. Старый город. 2	ロシア語ガイドによるタリンの名所案内。穴埋め問題と文法概説。
第7回	Таллинн, Эстония. Старый город. 3	テキスト全体の確認と重要フレーズの暗記。
第8回	Таллинн, Эстония. Старый город. 4	ロシア語ガイドによるタリンの歴史概説。リスニングと質疑応答。
第9回	Таллинн, Эстония. Старый город. 5	ロシア語ガイドによるタリンの歴史概説。穴埋め問題と文法概説。
第10回	Таллинн, Эстония. Старый город. 6	テキスト全体の確認と重要フレーズの暗記。
第11回	Таллинн, Эстония. Старый город. 7	タリンの現況について。リスニングと質疑応答。

第12回	Таллинн, Эстония. Старый город. 8	タリンの現況について。穴埋め問題と文法概説。
第13回	Таллинн, Эстония. Старый город. 9	テキスト全体の確認と重要フレーズの暗記。
第14回	これまでのまとめ	これまで培ってきたロシア語の表現を確認する試験の実施と解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業で視聴した動画内容の習得のために、1回につき1.5時間程度の復習が必要となります。

【テキスト（教科書）】

適宜、教場で配付もしくはは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】

教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点80%、小テスト20%とし、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

みなさん一人ひとりのロシア語運用能力に合わせたテキスト選びを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

20世紀ロシア文学。ロシア・フォルマリズムを中心とした芸術理論。ソ連およびロシアの映画。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002283/profile.html>

【Outline (in English)】

● Course outline

The aim of this course is to maintain and improve Russian grammar and listening skills. We would like to share the pleasure of learning about the culture and customs of Russia and Estonia through the short movies in Russian.

● Learning Objectives

The purpose is to further develop and maintain the Russian language proficiency that has been cultivated so far(A2 to B1 in the CEFR) .

● Learning activities outside of classroom

It takes about 1.5 hours for class review.

● Grading Criteria /Policy

Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80 %) and quizzes(20 %). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

LNG500G1 - 309

外国語実践研究B（ロシア語）

佐藤 千登勢

備考（履修条件等）：初回授業に出席し、受講許可を得ること

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ロシア映画を3編とりあげ、それぞれの作品に関する解説文をロシア語で読み、これを確認するかたちで映画作品を部分的に鑑賞します。ロシア語の読解力と聴解力を身につけること、維持することが目的となります。読解についてはT P K II第1レベル程度の力をつけることが可能となり、ロシアの日常や慣習、世相について知識を得ることができます。

【到達目標】

ロシア語で書かれたロシア映画の解説文・作品論を批判的に読みながら、ロシア映画の珠玉に触れ、そうすることで、T P K II第1レベルの読解力、文法力を維持していくと同時に、ロシアの文化や世相に関する知識を得ながら自身の見解をまとめる力を育んでいきます。ロシア語の読解力を向上させメディアリテラシーの力をつけることが第一の到達目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ロシア映画の3つの作品に関する資料を講読します。みなさんの予習に基づいて進め、文法事項や文章の構造の説明をおこないます。作品に関する情報を把握した後、これを確認するために実際の映画作品を部分的に鑑賞します。課題は授業で確認と解説を行うかたちでフィードバックします。ロシア映画『サリュート7号』は、冷戦末期、ソ連の宇宙ステーション事故をめぐる人間ドラマの珠玉。『エレナの惑い』（2011）は現代ロシアの世相を浮き彫りにした心理ドラマ。『夏の終止符』（2010）はソ連時代を象徴する上司と新生ロシアを象徴する実習生の青年、ただ二人によって展開される驚くべき心理劇です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし /No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。資料配付。
第2回	映画 С а л ю т -7 について1	С а л ю т -7 の内容について読解。映画の続きを鑑賞。
第3回	映画 С а л ю т -7 について2	С а л ю т -7 の内容と反響について読解。映画の続きを鑑賞。
第4回	映画 С а л ю т -7 について3	С а л ю т -7 の内容と反響について読解の続き。映画の続きを鑑賞。
第5回	映画 С а л ю т -7 について4	С а л ю т -7 の反響について読解の続き。映画の続きを鑑賞。
第6回	映画 Elena について1	Е л е н а の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画の一部を鑑賞。
第7回	映画 Elena について2	Е л е н а の内容、鑑賞ポイントについて読解の続き。映画の続きを鑑賞。
第8回	映画 Elena について3	Е л е н а の反響について読解。映画の続きを鑑賞。
第9回	映画 Elena について4	Е л е н а の反響について読解の続き。映画の続きを鑑賞。

第10回	映画 Как я провёл этим летом. について1	Как я провёл этим летом. の内容について読解。映画の一部を鑑賞。
第11回	映画 Как я провёл этим летом. について2	Как я провёл этим летом. の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画の続きを鑑賞。
第12回	映画 Как я провёл этим летом. について3	Как я провёл этим летом. の鑑賞ポイントと反響について読解。映画の続きを鑑賞。
第13回	映画 Как я провёл этим летом. について4	Как я провёл этим летом. の反響について読解。映画の続きを鑑賞。
第14回	テストとまとめ	テストと解説（フィードバック）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

ロシア映画の作品に関するテキスト読解の予習に、1回につき2時間程度が必要となります。

【テキスト（教科書）】

適宜、教場で配付、もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】

教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点80%、小テスト20%とし、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

ロシア語の読解力向上とロシア映画鑑賞、双方への希望があったので、これに応じるような授業を組みました。

【担当教員の専門分野等】

20世紀ロシア文学。ロシア・フォルマリズムを中心とした芸術理論。ソ連およびロシアの映画。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002283/profile.html>

【Outline (in English)】

● Course outline

We will pick up some Russian film works, read the texts about them in Russian, and watch some scenes from the films while checking the texts. You will acquire reading comprehension and listening comprehension skills. You will be able to gain knowledge about Russian daily life, customs and social conditions.

● Learning Objectives

Students will acquire the level of CEFR B1 of reading comprehension and grammar, as well as knowledge of Russian culture and social conditions.

● Learning activities outside of classroom

It takes about 1.5 hours to prepare for reading comprehension of texts about the Russian movies.

● Grading Criteria /Policy

Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80%) and quizzes(20%). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

OTR500G1 - 401 (その他 / Others 500)

Thesis Writing A

MAXIM WOOLLERTON

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This is a writing and presentation course with a focus on enabling students to produce long-form academic writing in English. The aim of this course is to assist students in becoming effective writers who are able to express their critical thinking and organisational skills and present those ideas to others in English.

【到達目標】

The main goals are as follows:

1. Students will develop the skills to conceive and organise ideas for writing;
2. Students will develop the ability to research information to use in long-form pieces of academic writing;
3. Students will work on writing and editing long-form pieces of academic writing;
4. Students will examine ways to present their writing to an audience.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Students' work will include the following activities:

1. Writing various kinds of academically-oriented material;
2. Asking and answering questions with a partner or in small groups about the material;
3. Listening to audio or watching video clips of presentations;
4. Reading comprehension and analysis of paragraphs, essays and presentation scripts;
5. Researching and evaluating information to use in written work;
6. Peer editing the written work of students;
7. Reading and responding to the written ideas of other students in the class;
8. Doing the online homework activities related to the unit;

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回 / Week 1	Orientation	Course introduction and explanation. Getting information on students' backgrounds and needs. Level checking of students' English, Part 1 (Basics of English writing).
第 2 回 / Week 2	Level checking continued	Level checking of students' English, Part 2 (Basics of paragraph and essay writing structure)
第 3 回 / Week 3	Brainstorming, rhetorical modes and organisation	Methods of brainstorming. Topic and focus selection. Understanding and choosing rhetorical modes and organisational patterns. Creating an outline for your writing.

第 4 回 / Week 4	Research principles	Understanding different kinds of support. Checking if supporting information is reliable or not. Deciding how much and what kind of support you need.
第 5 回 / Week 5	Doing research	Finding material to use in your thesis or presentation script. Arranging the information you find to fit your outline.
第 6 回 / Week 6	Surveys	Principles of creating an effective questionnaire. Creating your own questionnaire. Conducting your survey. Evaluating survey results.
第 7 回 / Week 7	Creating reports	Understanding basic report structures. Explaining data and analysing results. Maintaining a consistent style. Writing a report of the survey you conducted previously.
第 8 回 / Week 8	Writing essays	Understanding essays and long form pieces of academic writing. Understanding what to include in the different parts of an essay. Planning an essay. Writing a first draft. Editing, peer editing and rewriting.
第 9 回 / Week 9	Writing reviews	Understanding the purpose of reviews. Selecting criteria for use in a review. Selecting language for criteria. Choosing what to review. Writing a review.
第 10 回 / Week 10	Biographies, histories and narratives	Using the past tenses when writing. Using time-sequence words. Describing personal experiences and historic events. Planning and organizing fictional narratives. Using adjectives and adverbs effectively.
第 11 回 / Week 11	Predicting the future	Using the future tenses when writing. Writing about future plans. Making predictions and expressing probability.
第 12 回 / Week 12	Demonstrations and instructions	Understanding what demonstrations/instructions are used for and why. Understanding the components of a demonstrative or instructional piece of writing. Creating your own demonstrative piece of writing.
第 13 回 / Week 13	Persuasion 1	Understanding persuasive writing. Understanding the components of a persuasive piece of writing.
第 14 回 / Week 14	Persuasion 2	Understanding the relationship between opinions and supporting reasons. Fact checking persuasive writing. Writing your own piece of persuasive writing.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will be required to do homework, mainly in the form of completion of follow-up exercises in the 'Study Centre' website, research of the topics covered in the class and preparation for the next class. On average, the amount of work outside of class will be approximately 60 minutes per week.

【テキスト（教科書）】

This course will use extracts from two books co-authored by the teacher: (1) The English Course - Writing Book 1 (Second Edition) by Gary Ireland and Max Woollerton. Published by The English Company (2022) ISBN 978-4-9902962-9-2; (2) The English Course - Presentation Book 1 by Gary Ireland and Max Woollerton. Published by The English Company (2021) ISBN 978-4-9902962-8-5. In addition, students will receive handouts from the teacher. [IMPORTANT NOTE: It will not be a requirement to purchase the books, but it is recommended.]

【参考書】

<http://www.theenglishcourse.com/students.html>

【成績評価の方法と基準】

In-Class Performance 100% The evaluation criteria are as follows: The total percentage will be accumulated from student classwork participation scores (35%), homework scores (35%), finished written submissions (30%). There is an absence limit of 3 classes and a lateness limit of 20 minutes. Lateness in excess of 20 minutes is counted as absence. Three times late is counted as one absence. Students who exceed the limit will not pass the course. Absences and lateness will result in a reduction in points from the classwork score.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【学生が準備すべき機器他】

Students need to bring a digital device with the ability to connect to the Internet. A laptop computer or a tablet would be the best kind of device to use.

【その他の重要事項】

In order to prevent the misuse of generative AI and provide equality all writing and speaking activities will be conducted only in class and without the use of AI. For further information about any of the points in this syllabus, please contact the instructor by email at hosei2025@woollerton.com.

【担当教員の専門分野等】

1. Education technology and English Language Teaching (ELT); 2. British social, political and economic history. A list of publications can be found here: <https://researchmap.jp/MaximJpn310887>

OTR500G1 - 402 (その他 / Others 500)

Thesis Writing B

MAXIM WOOLLERTON

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This is a writing and presentation course with a focus on enabling students to produce long-form academic writing in English. The aim of this course is to assist students in becoming effective writers who are able to express their critical thinking and organisational skills and present those ideas to others in English.

【到達目標】

The main goals are as follows:

1. Students will develop the skills to conceive and organise ideas for writing;
2. Students will develop the ability to research information to use in long-form pieces of academic writing;
3. Students will work on writing and editing long-form pieces of academic writing;
4. Students will examine ways to present their writing to an audience.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Students' work will include the following activities:

1. Writing various kinds of academically-oriented material;
2. Asking and answering questions with a partner or in small groups about the material;
3. Listening to audio or watching video clips of presentations;
4. Reading comprehension and analysis of paragraphs, essays and presentation scripts;
5. Researching and evaluating information to use in written work;
6. Peer editing the written work of students;
7. Reading and responding to the written ideas of other students in the class;
8. Doing the online homework activities related to the unit;

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回/ Week 1	Orientation	Course introduction and explanation. Getting information on students' backgrounds and needs. Level checking of students' English, Part 1 (Basics of English writing).
第 2 回/ Week 2	Level checking continued	Level checking of students' English, Part 2 (Basics of paragraph and essay writing structure)
第 3 回/ Week 3	Brainstorming, rhetorical modes and organisation	Methods of brainstorming. Topic and focus selection. Understanding and choosing rhetorical modes and organisational patterns. Creating an outline for your writing.

第 4 回/ Week 4	Research principles	Understanding different kinds of support. Checking if supporting information is reliable or not. Deciding how much and what kind of support you need.
第 5 回/ Week 5	Doing research	Finding material to use in your thesis or presentation script. Arranging the information you find to fit your outline.
第 6 回/ Week 6	Surveys	Principles of creating an effective questionnaire. Creating your own questionnaire. Conducting your survey. Evaluating survey results.
第 7 回/ Week 7	Creating reports	Understanding basic report structures. Explaining data and analysing results. Maintaining a consistent style. Writing a report of the survey you conducted previously.
第 8 回/ Week 8	Writing essays	Understanding essays and long form pieces of academic writing. Understanding what to include in the different parts of an essay. Planning an essay. Writing a first draft. Editing, peer editing and rewriting.
第 9 回/ Week 9	Writing reviews	Understanding the purpose of reviews. Selecting criteria for use in a review. Selecting language for criteria. Choosing what to review. Writing a review.
第 10 回/ Week 10	Biographies, histories and narratives	Using the past tenses when writing. Using time-sequence words. Describing personal experiences and historic events. Planning and organizing fictional narratives. Using adjectives and adverbs effectively.
第 11 回/ Week 11	Predicting the future	Using the future tenses when writing. Writing about future plans. Making predictions and expressing probability.
第 12 回/ Week 12	Demonstrations and instructions	Understanding what demonstrations/instructions are used for and why. Understanding the components of a demonstrative or instructional piece of writing. Creating your own demonstrative piece of writing.
第 13 回/ Week 13	Persuasion 1	Understanding persuasive writing. Understanding the components of a persuasive piece of writing.
第 14 回/ Week 14	Persuasion 2	Understanding the relationship between opinions and supporting reasons. Fact checking persuasive writing. Writing your own piece of persuasive writing.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will be required to do homework, mainly in the form of completion of follow-up exercises in the 'Study Centre' website, research of the topics covered in the class and preparation for the next class. On average, the amount of work outside of class will be approximately 60 minutes per week.

【テキスト（教科書）】

This course will use extracts from two books co-authored by the teacher: (1) The English Course - Writing Book 1 (Second Edition) by Gary Ireland and Max Woollerton. Published by The English Company (2022) ISBN 978-4-9902962-9-2; (2) The English Course - Presentation Book 1 by Gary Ireland and Max Woollerton. Published by The English Company (2021) ISBN 978-4-9902962-8-5. In addition, students will receive handouts from the teacher. [IMPORTANT NOTE: It will not be a requirement to purchase the books, but it is recommended.]

【参考書】

<http://www.theenglishcourse.com/students.html>

【成績評価の方法と基準】

In-Class Performance 100% The evaluation criteria are as follows: The total percentage will be accumulated from student classwork participation scores (35%), homework scores (35%), finished written submissions (30%). There is an absence limit of 3 classes and a lateness limit of 20 minutes. Lateness in excess of 20 minutes is counted as absence. Three times late is counted as one absence. Students who exceed the limit will not pass the course. Absences and lateness will result in a reduction in points from the classwork score.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【学生が準備すべき機器他】

Students need to bring a digital device with the ability to connect to the Internet. A laptop computer or a tablet would be the best kind of device to use.

【その他の重要事項】

In order to prevent the misuse of generative AI and provide equality all writing and speaking activities will be conducted only in class and without the use of AI. For further information about any of the points in this syllabus, please contact the instructor by email at hosei2025@woollerton.com.

【担当教員の専門分野等】

1. Education technology and English Language Teaching (ELT); 2. British social, political and economic history. A list of publications can be found here: <https://researchmap.jp/MaximJpn310887>

OTR500G1 - 403 (その他 / Others 500)

Oral Presentation

MARK E FIELD

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Good communication skills are necessary for anyone wanting to work in an international environment. This course is for students with a strong desire to improve their English language presentation skills. The course will focus on helping students talk about their current research theme in English and acquiring the language skills used in Oral Presentations given in English.

【到達目標】

The goal of the course is to develop students' communications skills and confidence as public speakers. Course content will include listening and vocabulary development, as well as extensive practice in using spoken English as a presentation tool. The main theme of students' presentations will be based on their current research interests.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System.

The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to actively participate in classroom activities, prepare weekly homework assignments, and review and practice at home for in-class presentations. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1 回	Class Orientation:	Presentations and Speeches: What is the Difference?
2 回	Structure:	The Types of Language Used in an Oral Presentation
3 回	Presentation #1:	Presenting Your Background & Research Interests
4 回	Learning Strategy:	Assessing Your Skills
5 回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part I
6 回	Presentation #2:	Introducing Geographical Locations
7 回	Expanding Discourse:	Exchanging Information
8 回	Reflective Communication:	Planning Your Presentation
9 回	Presentation #3:	Presenting Books and Research Material
10 回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part II
11 回	Expanding Discourse:	Controlling Your Presentation Environment
12 回	Putting It All Together:	Talking About Main Points
13 回	Putting It All Together:	Clearing up Confusing Ideas
14 回	Final Assessment:	Presentation of Your Research Theme

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

University guidelines suggest preparation and review are around 4 hours a week for a two-credit course and around an hour a week for a one-credit course.

Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. Effective presentations depend on sufficient preparation and practice, so students will need to prepare and practice outside of class before giving their in-class presentations.

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

The instructor will provide some reading materials related to Oral Presentation Skills.

【参考書】

Students will be expected to bring in reading materials related to their current research interests.

【成績評価の方法と基準】

30%On-going Evaluation participation, discussions etc.

20%Homework

50%In-class Presentations

** Class attendance is a course requirement.

Students are allowed no more than three absences in the academic semester.

【学生の意見等からの気づき】

Previous students were happy with this course and currently no data is available to support changing it. However, the instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】

We will use some OHC (Over Head Camera) and/or PC (Personal Computer) equipment to Present Visual Aids.

【その他の重要事項】

The Instructor Reserves the Right to change or alter this syllabus as needed.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

異文化間コミュニケーション、西洋思想史、経済学、言語学

<研究テーマ>

文化の変化と西洋思想の進化

<主要研究業績>

国際線の代わりとなるスロートラベルは存在するか？

"Is There a 'Slow Travel' Alternative to Intercontinental Flight?" 異文化 13, 117-182, 2012/04

ピネチエト政治後のチリにおける文化的ヒーローの発見 "Discovering a Cultural Hero in Post-Pinochet" 異文化 9, 113-166, 2008/04

Communication, Culture, Diffusion and Education: The Complexity of Intercultural Communication, Learning from the Past and Looking to the Future 法政大学 教養部紀要 111/外国語学 外国文学, 141-166, 2000/02

POL500G1 - 406 (政治学 / Politics 500)

国際人権論

藤岡 美恵子

サブタイトル：マイノリティの視点から考える人間の尊厳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人権は現代世界で常に重要な問題として扱われてきた。その保障は国際的に普遍的な課題として認識されており、何よりも、社会的に周縁化されてきた人々が自らの人間の尊厳を回復するための重要な手立てとして活用してきたのが人権であった。人権保障制度の発展は、そうした周縁化された立場の人々の尊厳を求める運動を契機に発展してきたと言ってもよい。

しかし近代の国民国家体制とともに生まれた人権思想と制度は、その枠組みの中で排除や搾取の対象となってきた集団（先住民族、マイノリティ、移民）の尊厳を守るためには不十分、もしくは根源的な矛盾をはらむという課題に直面している。それに関係するのが植民地主義の継続である。植民地主義が終焉するどころか、新たな形態で継続しているという認識が広く支持されるようになってきている現在、近代の人権保障の思想と制度が植民地主義の観点から再考されるようになってきている。この課題は、ヘイトスピーチの台頭という重大な挑戦に直面する日本社会にとっても、きわめて重要な課題である。

本授業では、国際人権保障体制の発展を踏まえた上で、それが日本を含め世界のマイノリティや先住民族の人権にどのような影響をもたらしたのかを考察し、現代世界が直面する人権をめぐる危機を人種主義と植民地主義をキーワードに考えていく。とくに現代日本におけるレイシズムと多文化主義に焦点をあてる。

人権がともすれば「思いやり」の問題として考えられがちな日本において、人権が差別され周縁化されてきた集団による公正と尊厳を求める運動を契機に発展してきたことを理解することは、今後の日本社会の在り方を考えて行く上で意義が多い。どうすればあらゆる人々の尊厳を保障することができるのかを、人権を侵害されてきた／いる人々の立場から考える思考態度を身につけ、人権をめぐる生じている国際的な課題について批判的な理解・思考能力を養う。

【到達目標】

国際的な人権保障の体制や考え方がどのように進展してきたかを踏まえた上で、それが国内の人権保障とどのように関係しているかを理解し、20世紀終盤から21世紀にかけての国際秩序の変容の中で、人権の保障という課題がどのような矛盾や問題を抱えているのかを、植民地主義と人種主義というキーワードを使って整理し、説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に対面授業とする。各回の指定テキストの報告発表と討論で進める。期末に小論文形式の試験を行う。初回授業を含め、授業参加の方法、各種お知らせは学習支援システムで通知する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション ●日本における人権に関する認識：ヘイトスピーチ、Black Lives Matter, #MeTooを手がかりに	授業内容・授業計画の説明。 人権とは何か。人権がなぜ必要なのか。人権は人間社会においてどのような位置をもつのかをあらためて考える。
第2回	国際人権の発展と現在 【テキスト】阿部（2010）「国際法への眼差し——序にかえて」	国際人権の起源と発展の跡をたどり現在の課題を知る。

第3回	変容する世界と国際人権 【テキスト】阿部（2010）第1章「人間」の終焉	冷戦終結と9・11以降、「テロリズム」という記号が動員される中での人権の後退と新たな問題を考える
第4回	人権と「文明化の使命」 【テキスト】阿部（2010）第2章「愚かしき暴力と、国際人権の物語」	植民地主義の観点から国際人権を捉えなおし、現在の「南北問題」との関係を考える
第5回	ヘイトスピーチの被害と人権 【テキスト】朴「京都朝鮮学校襲撃事件」、鄭「ヘイトスピーチ被害の非対称性」	近年問題になっているヘイトスピーチがどのような被害をもたらすのかを理解する。
第6回	ヘイトスピーチへの対応 【テキスト】阿部（2019）「国際人権法によるヘイトスピーチの規制」、中村「ヘイトスピーチの修復的アプローチを考える」	ヘイトスピーチに対して国際人権法がどう規制しているか、またヘイトスピーチを乗り越える一つの方法としての修復的アプローチを考える。
第7回	ナショナリズムとレイシズム 【テキスト】河合「日常実践としてのナショナリズムと人種主義の交錯——東アジア系市民の経験から」	日本においてナショナリズムとレイシズムがどう関係し合っているのかを考える。
第8回	シティズンシップとレイシズム 【テキスト】梁「シティズンシップに潜むレイシズム」	シティズンシップとレイシズムがどのような関係にあるのか、日本の市民権制度・入管制度を取り上げて考える
第9回	植民地主義と先住民族の自決権 【テキスト】上村（2015）「第3章 近代国家日本と「北海道」「沖縄」の植民地化」	日本によるアイヌ・沖縄への植民地支配の歴史と先住民族の自決権を理解する。
第10回	日本社会における先住民族の権利 【テキスト】上村（2024）「第3章「日本社会は先住民族の権利をどう扱ってきか——単一民族国家神話との闘い」第4章「アイヌ民族と琉球民族の現状——多くの課題と多数者の義務・責任」第5章「脱植民地化の文脈で法的拘束力と自己決定権を考える」	アイヌ民族と琉球民族への植民地化がどのように行われ、現在、先住民族としての権利がどのように侵害されているの理解し、自己決定権をめぐる現代日本社会の課題を考える。
第11回	植民地主義の克服と「多文化共生」論 【テキスト】藤岡「第1章 植民地主義の克服と「多文化共生」論」	北朝鮮バッシングを手がかりに、日本の「多文化共生」論と植民地主義の克服という課題の関係を考える。
第12回	「多文化共生」におけるマジョリティとマイノリティ 【テキスト】高谷「移民・多様性・民主主義——誰による、誰にとっての多文化共生か」、塩原「多文化共生がヘイトを超えるために」	「多文化共生」政策が移民、マイノリティへのレイシズムをなくすることにつながるのかを考える。

- 第13回 多文化主義と人権の未来
[テキスト]阿部 (2010) 第4章「要塞の中の多民族共生／多文化主義」
- 第14回 まとめ／期末試験講評 授業のまとめと期末試験講評を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定テキストを事前に読み、報告者に指定された回は要約を作成し授業当日に発表する。毎回、授業でのディスカッションに備えて準備を行う。本授業の準備時間は各4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

★——指定書 要購入。その他はプリントを配布

- ①★阿部浩己『国際法の暴力を超えて』岩波書店、2010年（「序に変えて」、第1章、第2章、第4章）
- ②阿部浩己「国際人権法によるヘイトスピーチの規制」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年
- ③上村英明『新・先住民族の「近代史」：植民地主義と新自由主義の起源を問う』平凡社、2015年（第4章「日本と「北海道」「沖縄」の植民地化」、第5章「尖閣諸島」問題と琉球民族の領土的権利）
- ④上村英明「第3章「日本社会は先住民族の権利をどう扱ってきたか——単一民族国家神話との闘い」第4章「アイヌ民族と琉球民族の現状——多くの課題と多数者の義務・責任」第5章「脱植民地化の文脈で法的拘束力と自己決定権を考える」岡本・上村・窪・朴金・朴『マイノリティ・ライツ 国際基準の形成と日本の課題』現代人文社、2024年
- ⑤河合優子「日常の実践としてのナショナリズムと人種主義の交錯——東アジア系市民の経験から」河合優子編『交錯する多文化社会——異文化コミュニケーションを捉え直す』ナカニシヤ出版、2016年
- ⑥塩原良和「多文化共生がヘイトを超えるために」岩渕功一編『多様性との対話——ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社、2021年
- ⑦高谷幸「移民・多様性・民主主義——誰による、誰にとっての多文化共生か」岩渕功一編『多様性との対話——ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社、2021年
- ⑧鄭 暎恵「ヘイトスピーチ被害の非対称性」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年
- ⑨中村一成「ヘイトクライムの修復的アプローチを考える」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年
- ⑩朴 貞任「京都朝鮮学校襲撃事件」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年
- ⑪藤岡美恵子「第1章 植民地主義の克服と「多文化共生」論」中野憲志編『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007年
- ⑫梁 英聖「シティズンシップに潜むレイシズム」『思想』2021年9月号

【参考書】

- ①岩崎稔他『継続する植民地主義—ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005年
- ②岩渕功一編著『多様性との対話—ダイバーシティ推進が言えなくするもの』青弓社、2021年
- ③植木哲也『植民学の記憶——アイヌ差別と学問の責任』緑風出版、2015年
- ④岡和田晃／マーク・ウィンチェスター『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社、2015年
- ⑤エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラリズム』岩波書店、1996年
- ⑥塩原良和『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義——オーストラリアン・マルチカルチュラリズムの変容』三元社、2005年
- ⑦永原陽子編『「植民地責任」論—脱植民地化の比較史』青木書店、2009年
- ⑧西川長夫『〈新〉植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、2006年
- ⑨ガッサン・ハージ（保莉実・塩原良和訳）『ホワイト・ネイション——ネオ・ナショナリズム批判』平凡社、2003年
- ⑩バンセル、N.ほか『植民地共和国フランス』岩波書店、2011年
- ⑪樋口直人『日本型排外主義—在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会、2014年
- ⑫ミシェル・ヴィヴィオルカ『レイシズムの変貌：グローバル化がまねいた社会の人種化、文化の断片化』明石書店、2007年
- ⑬ジョージ・M. フレドリクソン『人種主義の歴史』みすず書房、2009年
- ⑭前田朗『ヘイト・クライム』三一書房労働組合、2010年
- ⑮松島泰勝『琉球 奪われた骨——遺骨に刻まれた植民地主義』岩波書店、2018年
- ⑯アルベール・メンミ『人種差別』法政大学出版局、1996年

⑰テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』みすず書房、2000年

⑱梁英聖『日本型ヘイトスピーチとは何か』影書房、2016年

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点50%（発表、討論への参加）、期末試験50%
- ・発表については、指定テキストの内容の報告だけでなく、討論のための論点の提示を求める。
- ・討論への参加については、内容の理解に加え、討論の進行を助け、他の参加を促すような積極的な疑問の提示、意見表明を評価する。
- ・期末試験は、予め提示する2、3題の質問に対する小論文形式で行う。答案の提出日は第13回授業と第14回授業の間で後日指定（学習支援システムを通じて提出）。授業の到達目標の達成度を基準に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本授業を受講する以前は人権問題についてよく知らなかったため、当初は内容を理解するのに精一杯だったが、次第に知的関心を刺激されるようになり、授業をとってよかったという受講生の意見を踏まえ、日本国内の問題を中心に、できるだけ具体的な問題を取り上げて関心をもてるように工夫した。

【学生が準備すべき機器他】

課題の提出、学習支援システムの利用にパソコン等が必要。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞国際人権論（マイノリティ、先住民族の権利）、NGO 論、植民地主義

＜研究テーマ＞人種主義と植民地主義と平和

＜主要研究業績＞「部落女性の「不可視化」とフェミニズム—レイシズムとしての無関心」（『部落フェミニズム』エトセトラブックス、2025年）

‘Condemning J. Mark Ramseyer’s Paper “On the Invention of Identity Politics: The Buraku Outcasts in Japan” ’ in The Asia-Pacific Journal: Japan Focus, Volume 19, Issue 9, Number 8, 2021.

『脱「国際協力」——開発と平和構築を超えて』（新評論、2011年）
「資源開発への異議申し立てと先住民族の自己決定権」（東日本部落解放研究所発行『明日を拓く』第80号、2009年）、
「多文化共生」論」（『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007年）

【Outline (in English)】

【Course outline】

The guarantee of human rights has been considered an issue of universal importance in the modern world. More importantly, socially marginalized groups of people have used human rights to restore their human dignity, contributing to the development of the international human rights systems.

However, the ideas and systems of human rights which were born along with the development of the modern nation-state system now face serious challenges: one is that they are insufficient in, or in fundamental contradictions with, the protection of human dignity of groups of people who have been excluded or exploited in that system. One factor behind it is the continuation of colonialism. The human rights protection systems are now being reconsidered from that perspective.

In this course, the participants will learn how the international human rights protection systems have developed and what impact they have brought to minority and indigenous groups in Japan and elsewhere. They will consider the challenges posed to the international human rights protection systems using racism and colonialism as key concepts. A particular focus will be put on the issues of racism and multiculturalism in present-day Japan. The course provides the participants an opportunity to acquire critical thinking abilities on the issues of human rights and the perspective of the marginalized/discriminated against in thinking about how human rights can be respected for all.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students are expected to develop an understanding of how the international human rights system has developed and how it is related to the protection of human rights within national borders, what kind of challenges the world is facing in the changes of the international order since the end of the 20th century and how those issues can be explained with the keywords of colonialism and racism.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students are expected to have read the relevant text, prepare a summary (when designated) and be ready for class discussion. Your required study time is at least four hours for each class meeting.

【Grading Criteria /Policy】

Grading will be decided based on the following.

Term-end examination: 50%; In-class contribution: 50%

FRI500G1 - 407 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報ネットワーク論 A

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

情報科学、特にインターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術は広く深く発展し、情報基盤として様々な分野で必要不可欠なものとなっています。これらが、もともとどういう理由で設計された技術なのか、それが時代とともにどのように変わって来たのかを学び、インターネットの社会基盤としての役割や問題を討議します。

【到達目標】

この科目の到達目標は、コンピュータネットワークの仕組みの大枠を理解し、仮想空間を流通する情報の特性や理解を深めることです。知識を蓄積するだけでなく、自身のネットワークおよび関連情報技術の利用や社会性について論理的に考え討議することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

多文化情報ネットワーク論 A では、コンピュータネットワークの設計と基本的な仕組みを理解することにより、ネットワーク上での情報流通や形式を学ぶ。また、関連技術がどのように使われることを想定して設計され淘汰されてきたか、普段利用している情報サービスが技術的にどの程度安全性を確保されているものか、どの程度リスクがあるものかを、学生自身の使い方に鑑みながら確認していく。

なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。

本講義は対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中での授業形態の変更やそれにもなう各回の授業計画の修正については、学習支援システムでその都度提示する。履修予定者は、必ず初回授業日の前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加、または初回授業資料を当日中に確認すること。課題等の提出・フィードバックは、基本的には学習支援システムを通じて行うが、必要に応じて補助的に Google Classroom 等も用いる場合もある。授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第2回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第3回	コンピュータが情報を2進数で扱う理由、情報理論基礎	情報科学の基礎として、2進数の復習とネットワーク技術で使われる主なアルゴリズムを学ぶ。
第4回	情報ネットワークとインターネット	コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第5回	インターネットの歴史、OSI 参照モデル	インターネットの開発の理由や歴史、OSI 参照モデルを学ぶ。
第6回	インターネット関連技術の動向（1）	インターネットアーキテクチャの内、物理層およびデータリンク層の仕組みを学ぶ。
第7回	インターネット関連技術の動向（2）	インターネットアーキテクチャの内、ネットワーク層の仕組みを学ぶ。
第8回	情報科学技術と仕事（1）	情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象（利益、問題点）を仕事の観点から論じる。
第9回	情報科学技術と仕事（2）	前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。
第10回	情報科学技術と安全性（1）	情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象（利益、問題点）を個人または組織に対するセキュリティの観点から論じる。
第11回	情報科学技術と安全性（2）	前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。
第12回	個人情報とプライバシー	保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものかを学び、議論する。

第13回	情報セキュリティとネットワークセキュリティ	主な情報セキュリティ技術を学び、それがインターネットにどのように利用されているかを学ぶ。
第14回	授業のまとめ	授業での議論を振り返り、まとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要です。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

課題・レポート（30%）、議論・平常点（20%）、最終レポート（50%）で総合的に評価します。
コンピュータネットワークの仕組みの概略と現在のインターネットの利用形態に関連する技術への理解度をレポートで評価し、それに対する授業中の議論を出席および授業参加として評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

履修者の理解度に合わせて学習進度や項目を柔軟に変更する。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン併用授業の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。授業内容の議論や補足は Zoom あるいは Webex を用いる。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システムを利用して配布・提示する。授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】

状況や必要に応じて対面授業だけでなくオンライン授業に代替する可能性がある。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ インターネット上の情報流通に関する研究
＜研究テーマ＞ 主に ITS や移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題
＜主要研究業績＞

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline (in English)】

(Course outline)

We will grasp the mechanism and the design philosophy of the internet roughly and discuss its role in real society.

(Learning Objectives)

- To understand the general framework of how computer networks work.
- To develop an understanding of the characteristics and understanding of information circulating in virtual space.

In addition to accumulating knowledge, the course aims to encourage students to think and discuss logically about the use and social aspects of their own networks and related information technologies.

(Learning activities outside of classroom)

You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.

(Grading Criteria / Policy)

Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution (20%), and term-end report (50%).

FR1500G1 - 408 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報ネットワーク論B

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術の研究背景とその時代で最先端だったシステム設計を学ぶことで情報ネットワークの仕組みを大まかに掴み、今後のインターネットや他情報科学技術の使われ方について議論します。

【到達目標】

この科目では、コンピュータネットワークの仕組みの概略を理解し、現在利用されているインターネットの利用形態に関連する技術を知ると同時に、今後の通信技術の展望を考えることを目標としています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この科目の到達目標は、現在深く広く普及しているインターネットを始めとする情報ネットワークについて、その仕組みの概略と開発背景を掴む。その上で、情報ネットワーク技術が社会通信基盤として利用されていることに鑑み、実空間情報が仮想空間上をデジタルデータとして流通することの利便性とリスクを検討し、議論する。

全体を通して、教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指し、問題意識の整理と解決のための意見交換をしていく。
なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。

本講義は対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中で授業形態の変更やそれにとまなう各回の授業計画の修正については、学習支援システム（Hoppii）でその都度提示する。履修予定者は、必ず初回授業日の前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加すること。

課題等の提出・フィードバックは、授業内および学習支援システムを通じて行う。

授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第2回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第3回	インターネットの歴史	インターネットの開発の理由や歴史、コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第4回	プロトコルとレイヤ（OSI参照モデル）	OSI参照モデル、および現状のインターネットアーキテクチャと主なプロトコルを学ぶ。
第5回	経路制御アルゴリズム	ネットワーク層で使われる主な経路制御アルゴリズムを学ぶ。
第6回	IPアドレスと名前解決	インターネットプロトコル（IP）の役割と名前解決の仕組みを学ぶ。
第7回	無線技術と移動体通信	無線通信技術の種類と変遷を学び、移動体通信技術について学ぶ。
第8回	クラウドコンピューティング	クラウドコンピューティングの仕組みを学び、利益と弊害を議論する。
第9回	インターネットの社会性	インターネットが共通通信基盤として社会的に普及したことによる利益と弊害を議論する。
第10回	日本の通信技術戦略	日本が進めてきた通信技術戦略の一部を紹介し、その効果について議論する。
第11回	個人情報とプライバシー	保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものかを学び、議論する。
第12回	ネットワーク技術の国際標準化	情報技術の普及と戦略の一角を担う国際標準化について学ぶ。
第13回	知的財産とインターネット	知的財産権の一つである著作権を学び、国境を越えて利用されるインターネット上での振る舞いを考える。
第14回	情報ネットワークの抱える問題、授業のまとめ	情報ネットワークの将来性と問題について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要です。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

レポートまたは小テスト（30%）、平常点（20%）、最終レポート（50%）で総合的に評価します。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業、あるいはオンライン併用となった場合、ZoomやWebexを用いた講義となります。PCだけでなくWebカメラやマイクなど、授業参加のためのPCとネットワーク環境は準備してください。

【その他の重要事項】

状況や必要に応じて対面授業だけでなくオンライン授業に代替する可能性がある。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>インターネット上の情報流通に関する研究

<研究テーマ> 主にITSや移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題

<主要研究業績>

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline (in English)】

(Course outline)

We will grasp the mechanism of information communication technology roughly and discuss how future information technology is used in real society.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to provide students with a general understanding of how computer networks work and the technologies relevant to the current forms of Internet use, and to consider the future prospects for communications technology.

(Learning activities outside of classroom)

You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.

(Grading Criteria / Policy)

Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution(20%), and term-end report (50%).

OTR500G1 - 501 (その他 / Others 500)

国際文化研究日本語論文演習A

板井 美佐

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を拡充し、専門分野の修士論文を書くための基礎力を身につける。

【到達目標】

- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章の論旨を正確に読み取ることができる。
- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約できる。
- ・与えられたテーマで800～1200字程度の小論文を書くことができる。
- ・自分の修士論文についてレジュメを作成し、定められた時間で口頭発表できる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて、日本語で自分の感想や意見を述べ、他の意見を良く理解して、議論することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

第1回の授業では、受講生に作文を書いてもらい日本語レベルを確認します。第2回では、自己紹介と修士論文のテーマについて作文し、日本語の文章力と研究テーマ等を確認します。第3回から第8回は、学術的・専門的な日本語の文章を課題文として配布し、正確に読めるよう確認した後、指示された字数で要約文を書く練習をします。提出された各人の要約文は、すべて添削して返却します。その後、課題文のテーマについて、全員が感想や意見を出し合い討議します。以上の要約練習により、文章の論理的展開の筋道を読み取ることから、論文の論理的構成の重要性を学びます。第9回から第12回は、小論文を書く練習をします。400字から始め、1200字程度の小論文を書くことを目標に練習しつつ、論理展開や段落構成の基礎を学びます。提出された小論文は、すべて添削して返却します。第13回と第14回は、必要に応じて、7月の概要発表会の準備をします。レジュメの書き方を学び、口頭発表の練習をします。学習内容・方法や難易度は、受講する学生の日本語の水準や希望等に合わせて適宜変更します。

学習支援システムを利用する際は、添削した課題に説明を加えて返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、必要に応じて説明をします。各回の授業の内容に応じて、受講生が積極的に意見交換を行う時間を設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション 自己紹介スピーチ・作文	授業の目的と方針、学び方の説明 受講者の日本語レベル確認、受講者の希望確認
第2回	自己紹介と修士論文のテーマについて作文する	前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、受講生の修士論文のテーマを作文によって確認
第3回	課題文①	【演習1】前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①の音読確認、要約文の書き方を講義、要約文を書き提出

第4回 課題文②

第5回 課題文③

第6回 課題文④

第7回 課題文⑤

第8回 課題文⑤、まとめ

第9回 小論文を書く①

第10回 小論文を書く②

第11回 小論文を書く③

第12回 小論文を書く④

第13回 小論文を書く⑤、まとめ
概要発表会のレジュメ作成準備

第14回 概要発表会の口頭発表練習

【演習2】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①について討議、課題文②音読確認、要約文を書き提出

【演習3】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文②について討議、課題文③音読確認、要約文を書き提出

【演習4】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文③について討議、課題文④音読確認、要約文を書き提出

【演習5】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文④について討議、課題文⑤音読確認、要約文を書き提出

【演習6】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文⑤について討議、要約文を書くことで何が学べたか自己評価した後、感想や考えを出し合いまとめる。

【演習7】小論文のテーマ設定・論理展開・段落構成等について講義、次回的小論文テーマ指示

【演習8】小論文を書き提出

【演習9】前回の小論文を添削して返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、次回的小論文テーマ指示

【演習10】小論文を書き提出

【演習11】前回の小論文を添削して返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、概要発表会のレジュメの書き方について講義

【演習12】レジュメ提出、概要発表会の口頭発表練習、感想・意見交換

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をする。
 - ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたかを確認する。
 - ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意する。
- 本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

板井美佐『中国人留学生のためのアカデミック・ライティング ー大学院からのライティング・スキルズ』正文社（1540円）非売品（教室で配布予定）
**上記テキストは、中国国籍以外の学習者からも好評を得ています。

【参考書】

- ・アカデミックジャパニーズ研究会『改訂版 大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』（2015）アルク（1800円＋税）
- ・二通信子『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』（2020）スリーエーネットワーク（1540円＋税）
- ・二通信子他『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』（2009）東京大学出版会（2750円＋税）
- ・村岡貴子他『論文作成のための文章力向上プログラム』大阪大学出版社（2800円＋税）

【成績評価の方法と基準】

平常点50パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物50パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語で発表し、日本語の文章を書く機会を設けます。

- ・提出された文章は全て添削して返却し、必要に応じて説明をします。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞言語、誤用分析、アカデミック・ライティング、対照分析、中日翻訳

＜研究テーマ＞中国人日本語学習者の論文草稿に現れた誤用の傾向・要因と指導方法

＜主要研究業績＞板井美佐（2024）「博士後期課程日本語学習者の博士論文草稿に現れたアカデミック・ライティングの誤用の傾向・要因と指導方法－中国語を母語とする大学院生の調査から－」『城西国際大学大学院紀要』27号, pp. 65-85.

板井美佐（2010）『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク.

板井美佐（2000）「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について－香港4大学のアンケート調査から－」『日本語教育』104号, pp. 69-78.

【Outline (in English)】

Foreign students whose mother tongue is not Japanese read logical sentences written in Japanese and write sentences in Japanese to improve their basic ability to write their own master's thesis in Japanese.

【Grading criteria】

attitude toward class 50% (attendance state, positive attitude)
assignment 50%

OTR500G1 - 502 (その他 / Others 500)

国際文化研究日本語論文演習 B

板井 美佐

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、専門分野の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を向上させ、専門分野の修士論文を書くための基礎力を拡充する。

【到達目標】

- ・専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約し、口頭で発表できる。
- ・自分の修士論文のテーマに関して、4000字程度の小論文を書くことができる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて議論できる。（発言者ひとりひとりの意見を正確に聴き取り、テーマの方向性に沿った論理的な意見を述べたり問題点を指摘したりして、テーマを深化し発展させることができる）

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

第1回の授業で、各受講生は自分の研究テーマについてスピーチします。第2回の授業では、全員が自分の研究テーマについてまとめた作文を提出し、添削を受けた後、音読発表します。第3回から第7回までは、各受講生が自分の研究テーマに沿った書籍や文献から一定の長さの日本語の文章を抜粋して全員に配布し、その要約を書いて発表し、全員でその内容や研究テーマとの関連性について感想・意見を出し合います。第8回から第13回は、各自の研究テーマに沿った小論文を書きます。1200字程度から書き始め、第13回では、4000字程度の小論文を完成させます。第14回は、完成した4000字の小論文を口頭発表し、相互評価をします。提出された要約文・小論文は、すべて添削して返却します。学習内容・方法や速度・難易度は、受講生の水準に合わせて適宜変更します。学習支援システムを利用する際は、添削した課題に説明を加えて返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、必要に応じて説明をします。各回の授業の内容に応じて、受講生が積極的に意見交換を行う時間を設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション・研究テーマについてスピーチ	演習の目的と方針の説明、受講者の日本語レベル、研究テーマ、受講者の希望確認
第2回	作文「私の研究テーマ」	【演習1】作文後、添削された作文を各人が音読して発表し、添削内容について質疑応答
第3回	課題文①	【演習2】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文①について討議
第4回	課題文②	【演習3】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文②について討議
第5回	課題文③	【演習4】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文③について討議
第6回	課題文④	【演習5】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文④について討議

第7回 課題文⑤

第8回 小論文を書く①

第9回 小論文を書く②

第10回 小論文を書く③

第11回 小論文を書く④

第12回 小論文を書く⑤

第13回 小論文を書く⑥

第14回 小論文を書く⑦（まとめ）

【演習6】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文⑤について討議

【演習7】小論文を書く際のテーマ設定・論理展開・段落設定等について講義

【演習8】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換

【演習9】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換

【演習10】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換

【演習11】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換

【演習12】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換

【演習13】4000字の小論文を口頭発表・相互評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をする。
 - ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたかを確認し、正確に音読できるよう練習する。
 - ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意する。
- 本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

板井美佐『中国人留学生のためのアカデミック・ライティング ー大学院からのライティング・スキルズ』正文社（1540円）非売品（教室で配布予定）

＊＊上記テキストは、中国国籍以外の学習者からも好評を得ています。

【参考書】

- ・アカデミックジャパニーズ研究会『改訂版 大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』（2015）アルク（1800円＋税）
- ・二通信子『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』（2020）スリーエーネットワーク（1540円＋税）
- ・二通信子他『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』（2009）東京大学出版会（2750円＋税）
- ・村岡貴子他『論文作成のための文章力向上プログラム』大阪大学出版（2800円＋税）

【成績評価の方法と基準】

平常点50パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物50パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の論理的文章を書き、日本語で発表する機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

各自、パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

来年度の国際文化研究日本語論文演習Cの履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞言語、誤用分析、アカデミック・ライティング、対照分析、中日翻訳

＜研究テーマ＞中国人日本語学習者の論文草稿に現れた誤用の傾向・要因と指導方法

＜主要研究業績＞板井美佐（2024）「博士後期課程日本語学習者の博士論文草稿に現れたアカデミック・ライティングの誤用の傾向・要因と指導方法－中国語を母語とする大学院生の調査から－」『城西国際大学大学院紀要』27号, pp. 65-85.

板井美佐（2010）『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク。

板井美佐（2000）「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について－香港 4 大学のアンケート調査から－」『日本語教育』104 号, pp. 69-78.

【Outline (in English)】

Foreign students whose mother tongue is not Japanese practice writing in Japanese to improve their ability to write master's thesis on each specialized field.

【Grading criteria】

attitude toward class 50 % (attendance state, positive attitude)
assignment 50 %

OTR500G1 - 505 (その他 / Others 500)

国際文化研究日本語論文演習C

板井 美佐

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語で修士論文を書き始める準備を整え、実際に執筆しながら論文の書き方や日本語表現について学ぶ。

【到達目標】

- ・修士論文完成までのスケジュール（概要発表会・中間発表会等）を確認する。
- ・従来の修士論文の体裁（構成・分量・注の付け方・図表の入れ方・参考資料の掲載方法・文体・印字体等）を確認する。
- ・修士論文の主題と副題を決める。
- ・修士論文の構成（章立て・各章の分量・各章の内容と節の数やその分量）を決める。
- ・目次を書く。
- ・概要発表会の準備をする（レジュメの準備、口頭発表・質疑応答の練習等）
- ・修士論文の序論、あるいは第1章を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の7回で修士論文を書き始めるための具体的な準備を行い、その後、実際に修士論文を書き始めます。準備の段階では、まず、今まで国際文化研究科に提出された修士論文の体裁を確認し、各自のテーマに従って修士論文の構想を具体的にまとめます。次に、7月末の概要発表会、10月末の中間発表会のレジュメの書き方を学び、口頭発表・質疑応答の練習をすることによって、修士論文の構想・テーマを具体化し深化させます。第8回からは、各自修士論文の序論あるいは第1章を書き始めます。段落と段落、節と節がそれぞれ文章としてのまとまりを持ち、論理的構成の下で互いに関連し合うことを学ぶことを目標として、一つの章を完成させることを目標とします。受講生の希望と実態に合わせて内容を変更する可能性があります。

学習支援システムを利用する場合は、添削した課題に説明を加えて返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、必要に応じて説明を加えます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	・授業の目的と内容・方針の説明 ・各受講生の修士論文のテーマと進捗状況の確認
第2回	従来の修士論文の体裁を確認する	・構成、分量、注の付け方、図表の入れ方、参考資料の掲載方法、文体、印字体等
第3回	概要発表会のレジュメの書き方	・概要発表会のレジュメの書き方について講義 ・レジュメを書く
第4回	レジュメ提出・添削	・各人のレジュメを添削 ・質疑応答
第5回	レジュメに基づいて口頭発表の練習①	・声の出し方、話し方 ・時間の使い方 ・質疑応答の対応の仕方
第6回	レジュメに基づいて口頭発表の練習② スケジュール確認	・概要発表会、中間発表会、学会発表等のスケジュールを確認

第7回	修士論文の主題・副題、論文構成を確認する	・主題と副題、章立てと分量配分を書いて提出
第8回	修士論文を書く①	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出
第9回	修士論文を書く②	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第10回	修士論文を書く③	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第11回	修士論文を書く④	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第12回	修士論文を書く⑤	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第13回	修士論文を書く⑥	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第14回	修士論文を書く⑦	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の内容については、随時指導教員から指導を受けてください。本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

板井美佐『中国人留学生のためのアカデミック・ライティング ー大学院からのライティング・スキルズ』正文社（1540円）非売品（教室で配布予定）

＊＊上記テキストは、中国国籍以外の学習者からも好評を得ています。

【参考書】

- ・アカデミックジャパニーズ研究会『改訂版 大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』（2015）アルク（1800円＋税）
- ・二通信子他『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』（2020）スリーエーネットワーク（1540円＋税）
- ・二通信子『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』（2009）東京大学出版会（2750円＋税）
- ・村岡貴子他『論文作成のための文章力向上プログラム』大阪大学出版社（2800円＋税）

【成績評価の方法と基準】

平常点50パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物50パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

修士論文を書き始める準備をし、実際に論文を書き進めながら、論文の論理的構成や日本語表現について、逐次アドバイス・添削を受けることができます。修士論文執筆のペースメーカーとして利用できます。

【学生が準備すべき機器他】

各自パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

国際文化研究日本語論文演習A・B受講者が継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語、誤用分析、アカデミック・ライティング、対照分析、中日翻訳

<研究テーマ>中国人日本語学習者の論文草稿に現れた誤用の傾向・要因と指導方法

<主要研究業績>板井美佐（2024）「博士後期課程日本語学習者の博士論文草稿に現れたアカデミック・ライティングの誤用の傾向・要因と指導方法ー中国語を母語とする大学院生の調査からー」『城西国際大学大学院紀要』27号, pp. 65-85.

板井美佐（2010）『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク。
板井美佐（2000）「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS についてー香港4大学のアンケート調査からー」『日本語教育』104号, pp. 69-78.

【Outline (in English)】

This class help and give some advice to foreign students whose mother tongue is not Japanese to write their master's thesis in Japanese.

【 Grading criteria】

attitude toward class 50% (attendance state, positive attitude)
assignment 50 %

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A (代表シラバス)

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み (30%)、構想発表会での評価 (35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで (35%)、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60 % 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B (代表シラバス)**重定 如彦、大野 ロベルト**

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み (30%)、中間発表会での評価 (35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み (35%) で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】**【授業の概要 (Course Outline)】**

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、中間発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み（35%）で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

大嶋 良明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

大嶋 良明

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、中間発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み（35%）で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】**【授業の概要（Course Outline）】**

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

松本 悟

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

松本 悟

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、中間発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み（35%）で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、中間発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み（35%）で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

LETIZIA GUARINI

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2025年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

LETIZIA GUARINI

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、中間発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み（35%）で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2025年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

張 勝蘭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

張 勝蘭

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、中間発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み（35%）で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

佐々木 一恵

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハーサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 001 (その他 / Others 700)

博士論文演習 I A (代表シラバス)

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に係る投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	これまでの研究の振り返り	修士論文など今までの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2回	研究テーマの確認	第1回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを引き続き、修得する。
5回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルの修得を、更に進める。
6回	文献サーベイ④	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7回	文献サーベイ⑤	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、引き続き修得する。
8回	文献サーベイ⑥	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、更に高次のレベルで修得するよう努める。
9回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を進める。
10回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を引き続き進める。
11回	研究報告③	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を進める。
12回	研究報告④	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を、引き続き進める。
13回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を検討する。
14回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を引き続き検討する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどして、自らが積極的に対応していくことが重要です。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 001 (その他 / Others 700)

博士論文演習 I A

大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に係る投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	これまでの研究の振り返り	修士論文などこれまでの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2回	研究テーマの確認	第1回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを引き続き、修得する。
5回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルの修得を、更に進める。
6回	文献サーベイ④	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7回	文献サーベイ⑤	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、引き続き修得する。
8回	文献サーベイ⑥	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、更に高次のレベルで修得するよう努める。
9回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を進める。
10回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を引き続き進める。
11回	研究報告③	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を進める。
12回	研究報告④	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を、引き続き進める。
13回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を検討する。
14回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を引き続き検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどして、自らが積極的に対応していくことが重要です。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 002 (その他 / Others 700)

博士論文演習 I B (代表シラバス)

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどして、自らが積極的に対応していくことが重要です。大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 002 (その他 / Others 700)

博士論文演習 I B

大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどして、自らが積極的に対応していくことが重要です。大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 003 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅱ A (代表シラバス)

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究計画に沿って必要な調査 (文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等) を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する2本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について、指導教員が助言を行います。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返り	1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
6回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
7回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
8回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
11回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
12回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
13回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して、春学期の研究成果をまとめる。
14回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し、夏季休暇中にすべき調査・研究内容を明確化する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 004 (その他 / Others 700)

博士論文演習ⅡB (代表シラバス)

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究計画に沿って必要な調査 (文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等) を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる2本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いていきます。また、履修者の報告に関しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり /Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】
なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	2年間の研究成果のまとめを行うとともに、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

授業の概要 (Course Outline)

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 005 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ A (代表シラバス)

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文 (草稿) を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し、議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	執筆・調査計画の立案	2-3月の研究成果の報告を行うとともに、追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
3回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
4回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
5回	予備論文 (草稿) への指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。この頃までに予備論文 (草稿) を完成させる。
6回	予備論文 (草稿) への指導②	完成した予備論文 (草稿) について、指導教員と議論・検討を行う。
7回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
9回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
10回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
11回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
12回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
13回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して、博士論文の全体の構成を固める。
14回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ、博士論文全体の構成と内容を見直し、本格的な執筆を行なう。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 006 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ B (代表シラバス)

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて、最終的な指導を指導教員より受ける。
2回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より、提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
3回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
4回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
9回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 003 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅱ A

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する2本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について、指導教員が助言を行います。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返り	1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
6回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
7回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
8回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
11回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
12回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
13回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して、春学期の研究成果をまとめる。
14回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し、夏季休暇中にすべき調査・研究内容を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 004 (その他 / Others 700)

博士論文演習ⅡB

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる2本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いていきます。

また、履修者の報告に関しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	2年間の研究成果のまとめを行うとともに、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

授業の概要（Course Outline）

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 003 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅱ A

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する2本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について、指導教員が助言を行います。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返り	1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
6回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
7回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
8回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
11回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
12回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
13回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して、春学期の研究成果をまとめる。
14回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し、夏季休暇中にすべき調査・研究内容を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 004 (その他 / Others 700)

博士論文演習ⅡB

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる2本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いていきます。

また、履修者の報告に関しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	2年間の研究成果のまとめを行うとともに、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

授業の概要（Course Outline）

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 005 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ A

高柳 俊男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し、議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	執筆・調査計画の立案	2-3月の研究成果の報告を行うとともに、追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
3回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
4回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
5回	予備論文（草稿）への指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる。
6回	予備論文（草稿）への指導②	完成した予備論文（草稿）について、指導教員と議論・検討を行う。
7回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
9回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
10回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
11回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
12回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
13回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して、博士論文の全体の構成を固める。
14回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ、博士論文全体の構成と内容を見直し、本格的な執筆を行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 006 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ B

高柳 俊男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて、最終的な指導を指導教員より受ける。
2回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より、提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
3回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
4回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
9回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 005 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ A

森村 修

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し、議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	執筆・調査計画の立案	2-3月の研究成果の報告を行うとともに、追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
3回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
4回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
5回	予備論文（草稿）への指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる。
6回	予備論文（草稿）への指導②	完成した予備論文（草稿）について、指導教員と議論・検討を行う。
7回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
9回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
10回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
11回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
12回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
13回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して、博士論文の全体の構成を固める。
14回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ、博士論文全体の構成と内容を見直し、本格的な執筆を行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 006 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ B

森村 修

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて、最終的な指導を指導教員より受ける。
2回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より、提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
3回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
4回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
9回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 005 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ A

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し、議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり /Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし /No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	執筆・調査計画の立案	2-3月の研究成果の報告を行うとともに、追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
3回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
4回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
5回	予備論文（草稿）への指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる。
6回	予備論文（草稿）への指導②	完成した予備論文（草稿）について、指導教員と議論・検討を行う。
7回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
9回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
10回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
11回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
12回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
13回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して、博士論文の全体の構成を固める。
14回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ、博士論文全体の構成と内容を見直し、本格的な執筆を行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
 2. to start writing preliminary versions of your dissertation.
- 【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】
Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 006 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ B

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて、最終的な指導を指導教員より受ける。
2回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より、提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
3回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
4回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
9回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、本年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 101 (その他 / Others 700)

博士ワークショップ I A

重定 如彦、小川 敦

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書である論文プロポーザルを書き上げ、構想発表会で発表する。論文プロポーザルは、
 - (1) 研究テーマ
 - (2) 研究の目的
 - (3) 研究の方法
 - (4) 研究計画
 - (5) 期待される成果
 - (6) 文献リスト等
 が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会において論文プロポーザルを発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第12回	研究発表とコメント⑦	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第14回	研究発表とコメント⑨	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究A」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはあくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20点
・「国際文化共同研究A」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②論文プロポーザル：80点
・論文プロポーザルの内容：40点 ・論文プロポーザルについての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究A」のうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their research proposals and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the thesis proposal to serve as a foundation for your doctoral research. It should include:

- (1) research theme
- (2) research goals
- (3) research methods
- (4) research plan
- (5) possible outcome

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as Thesis Planning Presentations (TPP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%
- Thesis proposal: 80%(its content: 40%, presentations given in TPP: 40%)
- *Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 102 (その他 / Others 700)

博士ワークショップ I B

重定 如彦、小川 敦

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書である論文プロポーザルを書き上げ、中間発表会で発表する。論文プロポーザルは、
 - (1) 研究テーマ
 - (2) 研究の目的
 - (3) 研究の方法
 - (4) 研究計画
 - (5) 期待される成果
 - (6) 文献リスト等
 が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第12回	研究発表とコメント⑦	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第14回	研究発表とコメント⑨	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究B」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはあくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20点
・「国際文化共同研究B」に討論者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②論文プロポーザル：80点
・論文プロポーザルの内容：40点・論文プロポーザルについての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究B」のうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their research proposals and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the thesis proposal to serve as a foundation for your doctoral research. It should include:

- (1) research theme
- (2) research goals
- (3) research methods
- (4) research plan
- (5) possible outcome

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%
- Thesis proposal: 80%(its content: 40%, presentations given in TIP: 40%)
- *Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 103 (その他 / Others 700)

博士ワークショップⅡ A

重定 如彦、小川 敦

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
 2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
 3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。
- 先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それをふまえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第13回	研究発表とコメント⑧	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第14回	研究発表とコメント⑨	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究A」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはあくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20点
 - ・「国際文化共同研究A」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
 - ②先行研究分析報告：80点
 - ・先行研究分析報告の内容：40点
 - ・先行研究分析報告についての発表：40点
- 本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究A」のうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their Prior research analysis and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the prior research analysis to show your progress and originality.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as Thesis Planning Presentations (TPP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%

- Prior research analysis: 80%(its content: 40%, presentations given in TPP: 40%)

*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 104 (その他 / Others 700)

博士ワークショップⅡ B

重定 如彦、小川 敦

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
 2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
 3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。
- 先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それをふまえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第13回	研究発表とコメント⑧	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第14回	研究発表とコメント⑨	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究B」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはあくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20点
 - ・「国際文化共同研究B」に討論者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
 - ②先行研究分析報告：80点
 - ・先行研究分析報告の内容：40点
 - ・先行研究分析報告についての発表：40点
- 本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究B」のうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their Prior research analysis and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the prior research analysis to show your progress and originality.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%

- Prior research analysis: 80%(its content: 40%, presentations given in TIP: 40%)

*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 105 (その他 / Others 700)

博士ワークショップⅢ A

重定 如彦、小川 敦

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。構想発表会においては、完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え、博士論文の構成（章立て）を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会においてこれまでの研究成果や博士論文の構成（章立て）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第14回 研究発表とコメント⑨ 7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文（学位請求論文の草稿）を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究A」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはあくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20点
・「国際文化共同研究A」に討論者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②博士論文を構成する章：80点
・博士論文を構成する章の内容：40点・博士論文を構成する章についての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究A」のうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to write up, present, and publicise their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to publish part of your dissertation. In Thesis Planning Presentations (TPP), you have to present what you have written together with the table of contents, as well as to explain the whole thesis structure.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as TPP. According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%

- Written-up chapter(s): 80%(its content: 40%, presentations given in TPP: 40%)

*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 106 (その他 / Others 700)

博士ワークショップⅢ B

重定 如彦、小川 敦

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。中間発表会においては、完成した章（投稿論文原稿）の発表に加え、博士論文の構成（章立て）を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会において博士論文の要旨を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第14回 研究発表とコメント⑨ 11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究B」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはあくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20点

・「国際文化共同研究B」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②博士論文を構成する章：80点

・博士論文を構成する章の内容：40点・博士論文を構成する章についての発表：40点

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究B」のうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。

・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to write up, present, and publicise their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to publish part of your dissertation. In Thesis Interim Presentations (TIP), you have to present what you have written together with the table of contents, as well as to explain the whole thesis structure.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as TIP. According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four ours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%

- Written-up chapter(s): 80%(its content: 40%, presentations given in TIP: 40%)

*Students who successfully achieve 60%or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

修士論文

国際文化専攻教員

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【到達目標】

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
---	-----	----

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【テキスト（教科書）】

【参考書】

【成績評価の方法と基準】

【学生の意見等からの気づき】

リサーチ・ペーパー

国際文化専攻教員

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【到達目標】

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
---	-----	----

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【テキスト（教科書）】

【参考書】

【成績評価の方法と基準】

【学生の意見等からの気づき】

博士論文

国際文化専攻教員

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【到達目標】

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示された
どの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針
に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

【授業計画】 授業形態：

回	テーマ	内容
---	-----	----

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【テキスト（教科書）】

【参考書】

【成績評価の方法と基準】

【学生の意見等からの気づき】

